

国境の村々・五ヶ山の歴史 ; 五ヶ山の地名と地誌 ; 小川内の地名と地誌

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/10795>

出版情報 : pp. 160-240, 2008-03-31. 福岡県教育委員会
バージョン :
権利関係 :

2 国境の村々・五ヶ山の歴史

i. 国境を越える峠

1 塩買峠（大峠・標高 545 メートル）

五ヶ山は筑前・肥前の国境地帯である。それぞれ人々の行き来があった。筑前と肥前を結ぶ街道が峠を越える。一帯にはいくつもの国境の峠があった。東からいって、九千部山の北（権現山の南）を越えるみちが塩買峠である。筑前側、市ノ瀬での呼称で（『筑前国統風土記拾遺』、『郷土誌那珂川』那珂川町教育委員会編、1976）、福岡県立図書館蔵「筑前国郡絵図・那珂郡絵図」（本文 187 頁参照）にも塩買峯、塩買峠峯とみえる。貝原益軒『筑前国統風土記』（巻二、提要下）「国境之小名」にも同じ地名がある。いま峠周辺を「しおかい」といい、「一升盛（いっしょうもり）」という因んだ地名の小山がある。肥前側、鳥栖市域にこの名前はなく、大峠（うとうげ）と呼んでいる。

この地域では古くから製塩地は博多湾であった。有明海では塩は生産されない。有明海岸はヘドロの堆積ばかりで、砂がなかった。かん水も塩も泥で黒くなったのではなかろうか。砂がなければ安価で上質な塩を作ることはできなかった。干満差のある博多湾や今津湾沿岸での製塩については、文永の役（文永十一年・1274）を描いた『蒙古襲来絵詞』に「とりかひ（鳥飼）のしほひかた（潮干潟）」、「とりかひかたのしほやのまつ（鳥飼潟の塩屋の松）」がみえる。また文正二年（1467）四月五日・興隆寺文書に「当宮（筥崎宮）領田嶋村内塩浜四町」と見えている。樋井川河口は元来鳥飼潮干潟（現在その名残が大濠公園となっている）を経て荒戸の東に流れ出ていたものが、近世初期の福岡城下町整備の過程で、現在の河口に付け替えられて、干潟の排水、干陸化が進行した。今は内陸となっている樋井川河口・鳥飼や田島は中世・近世には塩田で、塩屋であった苫屋からけむりがたなびく光景があった。今津にも瑞梅寺川河口干潟沿岸にかつては塩田があり、塩屋の地名もある。『筑前国統風土記』（708 頁・拾遺）にも次のように記されている。

國中塩浜在所

凡八所 姪浜塩地二十三四町 今宿十七町 松崎十町余 和白二十五町新地 勝浦廿三四町 津屋崎町数不詳新地 渡村三町七反新地 芥屋少

貞享三年（1686）・筑肥国境脊振山争論文書（秀村選三編・地域史資料叢書 1・29 頁）に久保山村新之允と申者椎原村次兵衛所へ参、物語仕候ハ、私儀福岡へ塩など買ニ参候とみえており、肥前久保山村（脊振村）の人も、塩を福岡に買いに行ったことがわかる。一石（いちこく）越え（椎原峠）、釜蓋峠（車谷越え）のいずれかを越えたのであろう。養父郡の人々の場合は、福岡まで塩を買いに、この塩買峠を越えることがあった。筑後川流域や、遠く杵島郡・藤津郡の人々も塩を買うために有明海を渡って筑後川を遡り、鳥栖より峠を越えたい。

塩買峠（大峠）は鳥栖市・勝尾城下と那珂川町・市ノ瀬を結ぶ。市ノ瀬の南西には一の岳城がある。勝尾城は筑紫氏の本城であり、一の岳城は支城であるから、この道は筑紫氏にとっての軍道であったことがわかる。一の岳城については後述する。峠を越えた河内にある禅刹万歳

寺は中国人（元）僧見心来復、中国渡来僧以亨得謙の頂相（禅僧の肖像画、ともに国指定重要文化財）を所有する。この道の頻繁な往来を語る。

2 高村峠・コ峠（標高 570 メートル、以下付図「五ヶ山・小川内地区しこ名分布図」参照）

九千部山から南に、国境の尾根道はいくつかの峰を経て下って行く。この峰々を、福岡県立図書館蔵「筑前国郡絵図」（那珂郡図、187 頁）では順に水ノミ山、高尾、タラムセ、力石原、ホコ石、ホコ石立粒、三領境谷、三領境峠、大谷頭、と記している。前掲『筑前国続風土記』「国境ノ小名」（名著出版、54 頁）にも同じ記載がある。三領境とは筑前・黒田領、対馬・田代領、肥前・鍋島領の境であろう。対馬領は基肄郡全部と養父郡半分で、牛原村までを含んだ。三領境は佐賀鍋島領の山浦と田代領牛原との境の山で、いまの石谷山の北西に該当しよう。いま三領境峠とよぶ地点がある（『国境石』那珂川町文化財ハンドブック、那珂川町教育委員会 2002）。大谷頭は谷より屏風岩を経て下り、コ峠（「小峠」）となる。小峠に登る道は明治 35 年地図に書かれ、一部は平成 9 年地図にも歩道として記されている。倉谷では高村の上にあることから高村峠と呼んでいた。

3 七曲峠（標高 495 メートル、旧 5 万分の 1 図では 501.6 メートル）

「筑前国郡絵図」（187 頁）ではコ峠から西に、コヤ尾、曲りを経てアヤベ峠となる。さらにフタキ子（『続風土記』では「札木辻」で、こちらが正しい）、メクラオトシ、中ノ峠となっている。アヤベ峠すなわち七曲峠である。峠を越えれば綾部（佐賀県中原町[現みやき町]）に出た。この峠を越えて、耕作の安全を祈願するため、五ヶ山の人々が綾部神社の風切り神事に参った。鳥栖・久留米まで炭やわさび葉などを販売に行き、生活の糧とすることもあった。

「筑前国郡絵図」また明治 35 年陸地測量部 5 万分 1 図によれば、肥前街道は市ノ瀬と五ヶ山の境である亀の尾峠より南下、終始那珂川の左岸（西側）を通り、落合（大野谷と小川内谷の合流点）のわずか下流（東側）で道は橋を渡った。小川内道はそこで分岐し西に向かった。橋を渡ると右に小山があって、『筑前国続風土記』にみえる白土城があった。白土は筑紫氏一の岳城の支城である。現地では猫城と呼んでいる。

「直に行き白土か城と云小山を越え」（『筑前国続風土記』137 頁）

「小山を越」とある。絵図や地図に見る限りは現道に同じであるから、バス道開通時に地下げされる前は小さな峠になっていた。猫城はその峠を押さえる城で、西北から西にかけては白土川に面した絶壁に守られていた。

このちいさな峠から坂本峠道と七曲峠道が分岐した。『筑前国続風土記拾遺』は「大野の方に行く道の東に大谷あり。広瀬といふ。桑河内と大野との堺なり」とし、倉谷は広瀬と呼ばれていた。『小川内誌』88 頁に二つあった大野橋のうち、ひとつを広瀬橋といい、ひとつを前川の橋といったとある。七曲道は明治期の地図によると、水田から草山に続き、谷に入って沢どうしに峠に出たようである。「七曲」とは倉谷の水田地帯に付せられた小字である。しかしながら七曲峠という峠の名前は筑前側の史料にも出てこない。「筑前国郡絵図」に「あやべ峠」とあったことはみた。高村峠と同じく、村内の地名によって峠の呼称も付いたのだろう。猫城から東に白土川に沿って七曲峠道は行く。徒渉地点は飛石であった。

置かれた石をわたることで、濡れずに川を渡ることができる。橋ではなく徒渡りであった。牛や馬は横の浅瀬を行った。また茶屋の前という地名もあるから、一時期茶屋があったらしい。往来は頻繁だったようだが、宿泊施設などはない。時おり旅人が民家に宿泊していたという記憶は、聞き取り調査によって確認できる（214～215頁参照）。

4 坂本峠・中峠

（標高 545 メートル、中峠は標高 525 メートル、旧 5 万分の 1 図では 534.5 メートル）

坂本峠は肥前国坂本村に行く峠の意味であるから、筑前側からの呼称であろう。しかし近世の文献ではその名を確認できない。『筑前国続風土記拾遺』には「東流は地焼峠より出る川にして」とあり、「地焼峠」と見えている。福岡県立図書館蔵「筑前国郡絵図」では「中ノ峠」、『筑前国続風土記』では「中峠」とある。神埼郡に行く本道であった。最高所の標高は 545 メートルで、県境そのものにはなく、佐賀県側に入った位置にある。手前に小さな峠（標高 525 メートル）があって、そこが県境である。ここが史料に「中峠」とみえるものに該当しよう。明治



Fig. III 2-1-1 五ヶ山周辺図 (1/60,000) (国土地理院発行地図)
(遺跡番号は 35 頁参照)

35年地図を見ると、「中峠」から直接養父郡・三根郡に下る道があって、谷に下ってすぐに七曲峠からの道と合流していたことがわかる。

小川内から最も近い鉄道駅は中原駅であった。「小川内区長日誌」(資料編)をみると、昭和7年11月4日では出身者の凱旋歓迎に中原駅まで行っている。その日に大山祇神社で祝賀会を開催しているから、午前を下って駅にて出迎え、午後には戻ることができた。それほどに遠い距離ではない。ほかの例(同12月2日)もあわせれば、出征兵士、凱旋兵士の送迎は中原駅まで行くことになっていたようである。ただし『小川内誌』90頁によれば、中原駅まで見送るのは、親戚と青年団で、ほかの村民は佐賀橋までであった。また学校教職員の離任・赴任そのほかでは、一本杉(桜グウ)の丸木橋にて見送った(『小川内誌』88頁)。前者は七曲道で、後者は坂本峠道を行ったのであろう。丸木橋とあるが、牛馬も橋を渡れたのか、牛馬は下って流れを渡ったのかはわからない。

「区長日誌」昭和5年3月の記事では、唐津を経て東松浦郡に行くために中原駅に出ている。明治35年地図では中原・神埼駅のみで三田川駅はまだ存在していなかった。昭和初期も同様であった。

5 亀の尾峠

陸軍陸地測量部の地図に、亀の尾峠の東に虎ヶ岳(笹城)とみえる。『続風土記』に虎岳城、『拾遺』に笹城とある。現在虎ヶ岳も笹城の呼称も、ほとんど記憶されていないようだ。峠をはさんで東に笹城、西に一の岳城があったから、一の岳城に敵対する勢力が、この峠を行軍することは至難であった。

ii. 軍事要衝としての中世五ヶ山と一の岳城

大峠(塩買峠)をはさんで筑紫氏の本城勝尾城(鳥栖市)と支城一の岳城(那珂川町)があったことをみた。

筑紫氏の城を書き上げた「城数之覚」(筑紫文書・『佐賀県史料集成』二八-三六)のうち、那珂郡の記載を見よう。

- 一 牛頭ノ城 幡崎兵庫頭・筑紫越前守
- 一 白水ノ城 筑紫良甫 一 隈本ノ城 番持 一 山田ノ城 同
- 一 猫尾ノ城 同 一 一ノ嶽ノ城 同 一 蟻塚の城 同

牛頭城(大野城市不動城：牛頭を牛頭で表記する例がいくつかある)、一ノ岳城、山田城(岩戸城)は遺跡が明確に残り、白水城もおおよその位置がわかる。隈本は天正期・指出帳に熊本がみえ、現在の東隈、西隈とされる(『角川福岡県地名辞典』)。猫尾ノ城は未詳だが、猫城という呼称は郡内に不入道と五ヶ山の二つがある。前者については『続風土記拾遺』古城記の項に「猫城、不入道村の西六町斗、成竹村に境へる所、川に臨て一孤山有、茂山にして岩多く崎嶇也、上の平地一反余有、西南の岸下を那珂川遶り流る。昔山田兵部丞といひし士の城址といふ、いかなる人にや年暦も不詳。東北の方山田に越る坂を猫峠と云、猫城峠其由来伝はらす」とある。『続風土記』は「猫嶺城」と表記し、『拾遺』は「猫城峠」と表記している。いま一つ

が五ヶ山の猫城だが、『続風土記』が白土の城として記述していること、「小山を越」とあることは先に見た。

『続風土記』をみると、ほかに遠賀郡上底井野村にも「猫城とて小山有」（巻31 拾遺、707頁）とあるから、要するに猫のような形をした小山は、しばしば猫城と名付けられたことが分かる。「城数之覚」の「猫尾ノ城」は、「尾」の語義からいっても、猫城と同じである。筑紫氏はこの軍道を行き来したが、むろん攻める側もこの道を使った。

筑紫文書・慶安五年（1652）の筑紫良泰筑紫家由緒書（『佐賀県史料集成』二八）に、一の岳城についての詳しい記述があつて、五ヶ山の戦略的な位置がわかる。

一、

大友殿筑後國へ出勢候て、九州之内筑前・豊前・肥前・筑後・肥後・豊後六ヶ國、大友殿御知行ニ被成、諸大名大友殿御幕下ニ罷成候、惟門様秋月文珠と被仰合、大友殿ニ不被成御随候条、六十國之人数を卒、秋月ニ取掛ケ候処、法名宗吟家中之者心替り仕、文殊相果被申候、後ニハ文珠子息種實中國衆を憑、秋月ニ入被申候、

一、

秋月文殊相果、大友殿基養父河内之城ニ責掛被申候、大手口ニて良祝一戦仕、豊後衆引退在之へ陣取仕候、勝尾ハ城悪敷御座候、殊ニ豊後衆大勢ニて候条、五ヶ山ニ被成御引籠候、山中難所之山豊後衆承及、五加山へハ取掛不申、肥前龍造寺表を働、それより帰陣ニて御座候、筑紫事五ヶ山ニ罷有、大友殿へ随不申候条、筑後一ヶ國之衆ニ大友殿より被申付、筑紫五ヶ山ニ籠居候可討果由にて、筑後衆人数貳万之筈ニて筑後を打立申候由相聞へ申候、豊後より御目付衆新光寺と申出家、佐藤と申侍被罷出候、惟門様良祝被成御談合、筑後人数五加山ニ御引請候事、心外思召候間、宰府表へ御打出候て、可被成御討死と被成御定、宰府へ御出候、宰府ハ廣所ニて御座候故、合戦之次第難成ニ付、針摺と申村ニ御人数被成御立、筑後衆御待候処、一番備星野・門中書、兩人貳千程ニて御座候、惟門様御人数、五加山ニ御座候間、御家中之衆知行無御座候故、侍衆我々計已上五六百ニ星野・門中書被成御伐崩、御鎚下ニて兩人相果、不残頸を御家中衆取被申候、筑後衆惣敗軍ニ罷成候、筑後河邊迄追討被成候、百姓已下迄御味方ニ罷成、頸を取申候、弥御人数かさみ申候、討取頸、千三百七十、武籠と申村之前ニ頸塚を御つき被成候、惟門様五ヶ山にて御煩被成、御死去候、廣門様十二ノ御年、良祝取立、御家被成御連続候、惟門様御内儀様馬場殿御娘にて御座候、満門様敵の末御縁組故、御たたれ披成、惟門様さう気



Pho. III 2-2-1 一の岳城（鉄塔左）



Pho. III 2-2-2 白土（猫）城

ニ被為成、御内儀様害し被成候、其御身も御煩て終自害被成、御死去候、馬場殿一類悉たたれ御つふし、御家来ニ被成候より御たたりやミ候、筑紫越前馬場殿末也

文中に登場する良祝は筑紫秀門の養子で屋山弥三郎といった人物である。筑紫越後守と称して家門での年寄であった（良悦とした史料もある）。家督を継いだ惟門の義兄にあたる。文殊は秋月種実の父で、文種また種方といい、弘治 3 年（1557）に討死にした。

そのあと惟門は五ヶ山に退いた。しかし雌伏していた筑紫惟門は捨て身の戦いで、永禄 2 年（1559）に逆転勝利を収めた。この由緒書には合戦の年が明記されていないが、永禄 2 年 4 月 2 日の合戦である。一連の文書が『大宰府太宰府天満宮史料』一五巻に収録されていて、問註所文書や蒲池文書のリアルタイム史料（同時代史料）によって、大友方の門中書（問註所）鑑豊とその親類被官ら数十人、蒲池十郎親類被官が戦死していることが史実として確認できる。ほか時代的には下った叙述になるが、『北肥戦誌』もこの合戦での星野鑑泰、問註所鑑晴らの討死を記している。『大友家文書録』は「此役未詳敵姓名」と書いているから、事実とすればよほどの奇襲作戦だったらしい（なお東大史料編纂所『史料綜覧』もこの合戦を取りあげているが、若干の混乱があり、永禄 2 年と 7 年の同じ 4 月 2 日にほぼ同じ内容の綱文（概要を記した文章）がある。2 年が正しい）。合戦のあった侍島という場所については、満盛院文書中に筑紫村内侍島とある。『福岡県の地名』は筑紫野市下見に比定している。下見は筑紫村に隣接し、土島屋敷（「しとうやしき」とルビがある。「さむらいしま」かもしれない）という地名がある。筑紫良泰由緒書が、合戦があったと記す針摺とは 2 ～ 3 キロメートル離れている。

由緒書では針摺原の合戦で星野・問註所ら大友の一番備（ぞなえ）は 2,000 の兵で、対する筑紫方は 500 ないし 600 人、討ち取った首は 1,370 ということである。数字が事実ならば、筑紫方には大きな勝利だった。なぜこのような奇跡の勝利が可能だったのか。

宣教師たちの報告によると、永禄 2 年 2 月 25 日に反大友勢力二千人が博多の町を占領し、大友氏の庇護を受けていたキリシタンも平戸に逃げたとある（「イエズス会士通信」ほか、『大宰府太宰府天満宮史料』一五）。針摺合戦の一月前には大友氏の支配は大きく揺らいでいたのである。筑紫惟門そしておそらく連携していた秋月勢力はこの動揺を大きく突くものであった。

なお『龍造寺隆信譜』（史料稿本所引）永禄五年・筑紫真清安堵本領には
傳曰、先年筑紫惟門爲大友氏所攻下城走中国、永禄二年八月、惟門郎従等、在筑前五箇山蜂起、掠筑紫長門入道真清領、迎惟門於本城、城于一瀬構教箇所守之、真清無力攻之、乞加勢、四月下旬、公及神代勝利遣軍士合戦、得首数十級、贈真清、真清以其威追払彼党、安堵本領、大友宗麟以使書感之

とある。8 月は、4 月の誤りではないか。そうなら 4 月 2 日侍島合戦のあとの状況となる。惟門による五ヶ山支配は短かった。

永禄 2 年に惟門が勝利した針摺は、大宰府から南下する日田街道が通り、針摺山や針摺峠があったように、小さいながらも地峡であった。よってしばしば合戦場になっている。永禄 2 年の合戦が侍島合戦とされるのは、おそらくは緒戦が針摺原で、終戦が侍島だったのであろう。『筑前国続風土記』『筑前国続風土記拾遺』のそれぞれ古城・古戦場の項には、天正 7 年（1579）4 月秋月種実、筑紫広門が大友方の高橋紹運と戦い、種実が針摺原に陣を取り、紹運が二日市

にまで出張したと記している。

この由緒書には「基養父河内之城」とある。基肄郡と養父郡をあわせた呼称が、戦国時代からあったらしい。河内の城というのが、現在の勝尾城山は北側が河内地籍に、南側が牛原地籍に属している。河内の側にも城郭として重要な機能があった。城下の市（市場）が東にあったといわれることも関連しよう。「勝尾は城悪しく、ごぞ候」とある。五ヶ山と比較したものである。要害に不十分ということで、五ヶ山に引きこもった。『北肥戦誌』には「豊後衆攻一岳不果、犬塚山城守等墜命者衆矣」とある。たしかに攻めるのに難しかったようだ。大友側にしてみれば、犠牲を出してまで、奥に逃げ込んだ敵は追わない、無視して差しつかえないということであろう。街道沿いの要衝ではあったが、たしかに山中の難所でもあった。

惟門は、馬場氏女子を妻としていた。満門の敵になる家筋であり、崇りによって「そう気」となり、妻を殺し、自身も五ヶ山にて自害したとある（引用文末尾）。「諸家系図纂」にも自害のことは見えて、永禄10年（1567）のこととある。

『大友家文書録』永禄十年六月条に「高橋鑑種毛利元就に通じて岩屋城に挙兵、筑紫広門が五箇山城に拠り、龍造寺隆信が鑑種に呼応し、豊芸和睦が破綻した」とある。八月条に、大友方の軍勢（斉藤鎮実）が園部から五ヶ山を攻撃したと見えている。「至肥前、向五箇山城」、「屯園部、遠攻五箇山」

園部はいまの基山町園部であるから、おそらくいったん南の谷に入ってから、ないしは権現山から大峠を越えて、五箇山城すなわち一の岳城の攻撃に向かったものであろう。園部・宮ノ前にサブタンジ・サブタンゴエ（三郎ヶ谷路、三郎ヶ谷越）という谷道と峠道があり、勝尾城の侍が使った道という伝承がある。なお、園部・宮ノ前南方のオトサ（オトサン）山頂に筑紫広門の墓があるという。同じく『大友家文書録』同月条によれば「生松原戦死戸次鑑連家士」として「後藤隼人佐・奈良原備後守」ほか数名の戦死者の名がみえる。対原田、対筑紫の両面作戦だったが、生の松原方面の北部作戦は失敗した。しかし五ヶ山攻めでは筑紫惟門が自害しており、成功である。惟門の死と、永禄十年の戦い・大友氏の五ヶ山侵攻との前後関係はくわしくは分からないのだが、密接な関連を持とう。

『続風土記』古城・鷲が岳城（南面里）の項には、同じ天正7年の10月24日に龍造寺隆信が、その将大田兵衛に三千余人の兵をつけ、筑前五ヶ山の奥、大野の里へ打ち越し、つづいて鷲が城・大鶴宗雲を攻撃し、筑紫広門も同調して攻撃したとある。高橋紹運が後詰（援軍）に山田山（岩戸山）に布陣したため、大田は撤兵したが、広門は包囲を続け、秋月が高橋の本城岩屋城を攻撃した際に、有利な形勢となったことを記している。大宰府攻略に五ヶ山を進軍して、岩戸での合戦になった。大野とあるから坂本峠越えだろう。

五ヶ山は奥深い山中であったから、逃げ込み城に適していた。ここまで逃げ込めば、追求してくる敵はあまりいなかった。放置しておいても影響は少なかったのだろう。五ヶ山城を確保することによって、肥前・筑前の幹線道路を押さえることはできた。しかし別にも基幹本線があるのだから支障はさほどにはなかった。

こうした五ヶ山の位置は不思議な役割を果たす。しばしば逆転の目になることがあった。起死回生策を可能とするのが五ヶ山だった。南北朝期に宮方が吉野山などを拠点とし、九州の宮方も八女郡矢部や肥後矢部など山岳地帯を拠点としている。かれらは少数派・劣勢派で、中央は

掌握できず、山岳ゲリラ的な戦いを強いられた。五ヶ山の戦いはゲリラ作戦である。

同じく『続風土記』古城・一嶽古城（一瀬村、市ノ瀬）の項では、天正14年7月の島津方による筑前攻めの際に、広門自体は勝尾城にて降参したが、家人の園部財部が亀尾・一の岳に籠もったことを記している。亀ノ尾嶺は敵に「かさ」（上方）より攻められて、本城へ撤退、薩摩方が亀ノ尾に向陣をとったけれどもその日の内には落とせず、夜中に筑紫勢は肥前へ落ちたこと、そののち大善寺に囚われていた広門が脱出に成功して、一の岳の秋月勢を攻め崩して入城、次第に勢力を回復して、勝尾城を挽回したと記している。

この事件については史料が多い。まずは同時代史料（リアルタイムに記された文献）をみる。第一は島津方の枢要人物であった上井覚兼の日記（『上井覚兼日記』大日本古記録）である。

（天正十四年八月廿九日条）

筑紫広門、五ヶ山へ被打入候由也

（三十日条）

筑紫広門再城之由候、就其、御行之事

（九月）朔日

広門、去廿七日被忍出、先一嶽へ取乗、翌日勝尾へ被仕乗候、蒲池衆当番にて、迷惑仕由註進也（中略）、彼城も不番たるへく候由也（中略）、

終日各談合にて候 筑紫方如此之分別ハ、定而龍造寺一致候而、指立候て如此候らん、然者、彼塚之様体見申候分者、輒筑紫可召崩事可難成候、先日被仕崩候ハ、不慮之仕合候、剩、肥前（龍造寺）と同意候てハ、容易難被攻候（下略）

（御前＝島津義久）広門事、不被討果、中途ニ被召置候歟、言語道断、曲事ニ被 思召候、せめて其分候ハ、早々如爰元被遣候て可然之旨、被仰候処（以下略）

四日

（前略）御恥辱此上ハなく候、人の見申さぬ所にてハ、御落涙なさるゝ計也

脱出して一の岳城に入った広門は、翌日には勝尾城に入ったという。よほどに手薄な状態になっていたのであろうか。島津方には大失態で、島津義久はなぜ早く処刑しなかったのか、それがかなわないにしてもなぜ早く八代にまで連れてこなかったのかと叱責している。義久は人目のないところでは涙を流した（「御落涙」）とあるのだから、世間の笑いものになった悔しさは一通りではなかった。

第二の史料は『大友家文書録』（三、『大分県史料』33、天正14年7月～9月の項・237頁）と、そこに収められた豊臣秀吉御内書である。まず『大友家文書録』をみる。

七月島津忠長、伊集院忠棟、入筑前、撃筑紫広門、広門戦敗、以五箇山城降、実年月十日也、忠長錮之於筑後大善寺、一説曰先是高良山座主麟圭降属島津、於是忠長遣広門於筑後、錮麟圭家、進陥高鳥居城、斬城主筑紫左衛門佐、而附五箇山城於秋月種実、使星野鎮豊・其弟民部少輔・共筑後州士、守高鳥居城、陥其余二城

とある。大善寺幽閉ではなく、高良山座主宅での幽閉という説もあった。つづく九月の条項に

筑紫広門逃出大善寺之囚、催兵、得計千人、至筑前、攻五箇山城、斬城守坂田蔵人、板井大炊助・共秋月家士、復其城、而告黒田孝高等属之

とある。豊臣秀吉は勞せずして城を二つも手に入れたわけだから、喜んだ。(天正14年)10月3日秀吉御内書が『大友家文書録』に収められている。

九月廿一日書状、今月三日於京都披見候

一筑紫主居城取返候由申越、尤之仕合候、右仕立悪敷様相聞候処、今度彼居城手入、忠節なるへき由尤候、入念、人数・兵糧・玉薬已下、安国寺令相談、可然様可申付候事

島津義久とは逆で、さぞかし笑いが止まらなかったことであろう。このようなことが可能になったのにはいろいろな事情や状況があったと思われるが、詳細までは分からない。覚兼らがいうように、龍造寺の動きが連動していたのであろう。筑紫広門が龍造寺政家あてに出したこの前後の起請文が龍造寺文書に二点ほど残されている(『佐賀県史料集成』三)。もっとも利を得たのは秀吉だった。秀吉こそが後ろでさまざまに手を打っていた。

以上の史料では五ヶ山攻めの詳細は分からないけれど、先の良泰由緒書では攻防の詳細が分かる。いくぶん時間をおいたのちの記述とはいえ、なにより当事者の回想である。貴重な叙述だ。

大善寺を出た広門は、夜中に秋月家老坂田蔵人、板並大炊(先の史料では板井。板井が正しいか)が千余りの人数で守っていた一の岳城(一ノ嶽之城)に着いた。使者を遣わして開城を要請したが、断られる。その日の卯の刻(朝五時)に攻めかかった。城中には鉄砲が多く、手負いも出たが、みな塀にとりつき、本丸には我ら(良泰)が一番乗りした。坂田蔵人は我らの槍にて討ち果たされた。二の丸には広門小姓衆七人が一番乗りしたが、五人は内よりの槍につかれて相果てた。浅手だった二人(高原新兵衛・後瀬助兵衛)は刀で奮戦し首を取った。本丸を先に確保できたので、劣勢であった二の丸勢を本丸に引き取った。板並大炊は台所口にて討ち死にした。広門が登城して首実検をしたところ、甲頸三百七十三あった。勝ち鬨を上げて山下の百姓の所へ宿を取った。戌の刻(夜七時頃)に広門からの使者がきて、夜中に大儀だが、勝尾に行き、薩摩方として在番している蒲池兵庫に使者に立ち、城受取の交渉をせよと命令された。われらは今日の戦いで腕に覚えのある者は三人が討ち死にし、手負いも十人以上いるので、夜中に勝尾に行くことはとうていできないと断ったが、家中の者といえども大善寺にいる間にちりぢりになってしまった。それでもわれらにはいまだ四五百の兵があるということで、承知し、夜中に三里の道を歩み、夜明けに勝尾城に着いた。城に使いを立て、受け取りたいと申ししたところ、城を開け退け、一人としていなくなった。

勝尾城に登ったところ、基養父両郡の百姓がお礼に続々とやってきた。二三日して広門もやってきて、近在の敵方諸処を焼き払った。こうして太閤様の御出馬を待った。

『覚兼日記』の記述にもよく合うし、当事者の発言だからリアルである。ただし373という首の数が正確なのかどうか、誇張が含まれているのか、いないのかは分からない。

五ヶ山城は不思議な位置にあったことになる。たしかにここを確保できれば、劣勢挽回が可能になることがあった。

なおいま残る一の岳城の石垣遺構は、この時代にしては新しい印象を与える(本書30頁、Pho. I 4-2-3)。おそらくはこの峠と城の重要性を認識した黒田藩が、近世に入ってから城地を維持管理していたのであろう。いったん事あるときは、いつでも再利用できる状態にし

ていたと考える。

五ヶ山のなかで、道の分岐として最大のものが、七曲道と坂本道の分岐点である。小さな峠のわきに、猫城（白土城）が置かれた。小さな城であったが、街道押えの城で、虎岳城と同じ意味を持った。わずかな手兵が置かれるだけでも、通行者には大きな脅威を与え、軍隊によるその突破には多大な時間を割く必要があった。

なお『続風土記』虎岳城とあるのは陸地測量部地図による限り、亀尾峠東の城、つまり亀尾城を指そうが、「城主不詳、麻生氏が端城なりと云伝ふ」としていて、筑紫氏との関連は不明瞭である。峠を挟む二つの城（亀尾城・一の岳城）は、相呼応するもので、平時には関所の機能も果たしたことであろう。猫城、虎ヶ岳という比喻は、それぞれの役割を例えるものでもあった。

峠を下ったところにも城がある。塩買峠を下れば勝尾城、七曲峠・坂本峠を下ればいずれも綾部城があった。綾部城は元龜二年（1571）、龍造寺氏の攻撃によって、綾部鎮幸が敗れるまで綾部一族の城であった。しかしのちには筑紫氏の城となり、城督として筑紫四郎右衛門尉が居城し、のち龍造寺氏に譲られている（前掲「筑紫文書」・城教之覚）。城は峠・道の押さえとしてあった。道は経済流通そのものでもあり、軍事そのものでもあった。

iii. 肥筑国境争論

1 元禄六年・筑前板屋と肥前西小川内の境論

A 小川内周辺の論

脊振山相論（争論）といえば、天和3年（1683）に発生し、10年を要して元禄6年（1693）に幕府の裁許によって決着した肥筑国境相論、すなわち肥前国神埼郡久保山村と筑前国早良郡



Pho. III 2-3-1 早良郡絵図（福岡県立図書館所蔵・河崎文書。右が小川内境で、東から古川、クビリ、栗穂、妹路釜、高野頭の地名が、脊振山頂の西に魚釣谷頭、車越の地名がある。）

板屋村、脇山村、椎原村との相論が知られている。このときの相論は、二重平と呼ばれた山頂から西・南に下った一帯広域の領有をめぐる起きたものだった。五ヶ山（那珂郡）は従来の研究では、二重平相論の当事者ではなかったとされている。相論は早良郡と神埼郡の間でのものだったからだ。しかし実際には国境を挟む肥前西小川内と筑前板屋もまったく無関係ではなかった。このとき肥前側は、両国国境は往古より高障子からクビリに至る線と主張したが、筑前・板屋村側は新儀であるとして承知しなかった。

肥前側は、国境は往古より決まっていた、明白であると主張した。このときの肥前側の主張を網羅する「光茂公譜考補地取」『佐賀県近世史料』（1-3）には、以下のようにある。

是（*弁財天）ヨリ東ハ小川内ト申候テ、嶺ヲ越、筑前内へ肥前ノ内指入居申候（371頁）

段々峯分ケ上宮岳東、高障子ノ辻迄是ヨリ谷ニ下リ、小川内ト申候一村ノ在所、肥前石高ノ内ニテ人家田畠御座候、谷ニテ候故、川ヲ限り、両国ノ境往古ヨリ相分リ申候、北ハ筑前板屋村、南ハ肥前国小川内村、谷続平地ニテ、川ヲ境ヒ、双方ヨリ田畠作り来候、此小川ノ頭ハ、高障子辻ヨリ落候谷川ニ付テ、峯ヨリ下ハ谷ノ水筋ニテ、古来ヨリ国境相分リ候（364頁）

小川内村ノ儀、谷ニ下リ両国ノ在家田畠御座候ニ付、川ヲ堺、北東ハ筑前、南西ハ肥前、東ハ筑前山、西ハ肥前山、其間ノ谷川ヲ分ケ、東小川内ハ筑前、西小川内ハ肥前ト往古ヨリ堺目無紛候（372頁）

小川内村ハ一村ノ地ニテ在家田畠御座候（373頁）

これに対し筑前・東小川内は、肥前の主張は新儀であって認められないとした。評定所における当事者千右衛門（筑前側）と五左衛門（肥前側）のやりとりが逐語記録されている（同上、光茂公譜考補地取五、『佐賀県近世史料』一の三）。それによれば、肥前側は立岩からクビリが境界で、谷川であることはまちがいない。高障子峯右側の水流に落ちる谷が古来よりの境であるとした。くびりについては「西小河内村・板屋村境 くびりと被申候所より東小河内境」ともあるし、『筑前国早良郡図』（福岡市博物館・藤井靖司資料、ほぼ同じ絵図が福岡県立図書館・河崎文書にある）にも位置が示されている。

いっぽう千右衛門は唐船岩から立岩に見渡し（見通した線）であるが、いったん川に沿って、三渡瀬に出る。そこよりは谷川伝いに東に登り、その立岩が境であると伝え聞いている。立岩からは谷に下り、東は峯分けである。魚釣谷、牛宮谷、花木原は従来炭焼きをしてきたところで、67、68年以前に野火（山火事）にて山が焼けるまでは炭焼きをし、運上を納めてきた



Pho. III 2-3-2 脊振山・脊振ダム



Pho. III 2-3-3 五ヶ山

ところだと主張した。五左衛門は立岩が境界であることは承知できない。下の谷川が境界であることは筑前衆も前々より了解していたことである。今回立岩が境と主張して谷川の半ばから尾にかけて新たに境だとして踏査をしていったが、西小川内村になんの断りもなく領内を押し通ったことは遺憾である。このように主張しており、小川内境についても係争となった模様である。しかしこれは二重平という大問題に比べれば、きわめて些細なことであった。

年未詳板屋村百姓喜兵衛申状（文中に「亥ノ十一月、同十二月」とあり、貞享元年か。『筑肥国境脊振山争論文書』秀村選三編・地域史資料叢書1）によっても、

70、70年前から板屋村は古野山が荒れたため、うおつり谷、花ノ木原にて炭釜をこしらえ炭焼きをしてきた。肥前側から「その場所は肥前の狩山であるから筑前側で炭を焼くことはできない」という主張があると聞いたので、久保山村にたずねたところ、あれは筑前（*板屋）の内山であるという回答があった。肥前の狩山であったというように佐賀藩当主による狩などが行われていた。

「当時論地ニ成居申候、牛宮谷、花木原、魚釣谷」とある（331頁）。「早良郡図」（178頁）に魚釣谷頭がみえる。車越の東に当たり、いまの椎原車谷の反対側、肥前側に相当しよう。牛宮谷は後述（次頁）のように現存するが、「上宮ヨリ南、牛宮谷辺ノ儀」（355頁）に合致する。なお論所に鑄師石竈があり、それは牛宮谷之尾にて鑄物師が炭を焼いたからだとされている（369頁）。「早良郡図」には稜線より東の国境線上に「妹路釜」という地名をのせている。鑄師石竈のある場所はいくつかあったのであろうか。花木原という地名もいまの西小川内に地名として残っている。ハナノキは櫛（シキミ）の別称というから、各地に植えられていたのかも知れない。

B 板屋・久保山間の論地

係争地については『脊振村史』（1994）におよその比定がされている。脊振山頂の直下、西側である。比定の根拠は明治初年絵図に記された「篠平野」にあるようだ。「篠平」はたしかに主要な係争地だが、耕地「篠平」と原野「篠平野」が同一の場所なのかどうか。古文書に記された論地地名はまだ多い。『村史』記述はそれらを具体的にふまえた比定ではないと思われた。

今回佐賀県側、久保山田中（脊振村、神崎市）の地名調査を行うことができ、いくつかの論地の地名が判明した。いずれも土地台帳記載地名である小字ではなく、聞き取りによってしか収集できない通称地名（しこ名）である。炭焼きに従事した人が詳しいが、昭和30年代に炭焼きが行われなくなった。いま、50代以下の世代は山の地名を知らない。

1 ニンジュウ

ニンジュウは田中より山側に登った田地で、田中の枢要耕地といえる

久保山より二重平拾貳丁、二重平より弁才天迄十六、七丁

（『筑肥国境脊振山争論文書』地域史資料叢書・12頁）

弁才天山（上宮岳）から17丁（1.8キロ弱）とされた二重平に該当しよう。脊振山（上宮）山頂から下って2キロの位置にある。脊振神社下宮（旧多聞坊）のわずか500メートルほど東の位置にあり、田中の集落にも近い。「二重」では古田なのか開田なのかの検証が行われている。

2 ササンジャーラ

二重(ニンジュウ)の東はウーコチ(オオコチ)川である。それを隔てて、イシカキタ(石垣田)、ササンジャーラと続く。ササンジャーラは現在、耕作放棄されて植林されているが、かつてはウーコチ川・ササンジャーラ井手が灌漑する水田であった。水田の形状も残されている。ササンジャーラ(篠平・笹平)でも新開地なのか否かが争われて、篠平古田跡の検証が行われた(『佐賀県近世史料』469頁)。ここには一晩で石垣を築いたという伝承があるらしい。

3 ウシグーザカ・シェイバの石飛

ウシグーザカという地名がある。争論では牛宮谷にて久保山村百姓が炭を焼こうとしてさしとめられた、また椎原村が炭を焼いた場所とされている。

脊振村田中の人々はウシグーザカでさかんに炭を焼いた。一カマから50俵の炭が出るから、牛は八俵、男は三俵、女は二俵をかついで三日から四日がかかりでおろした(1俵は15kg)。牛

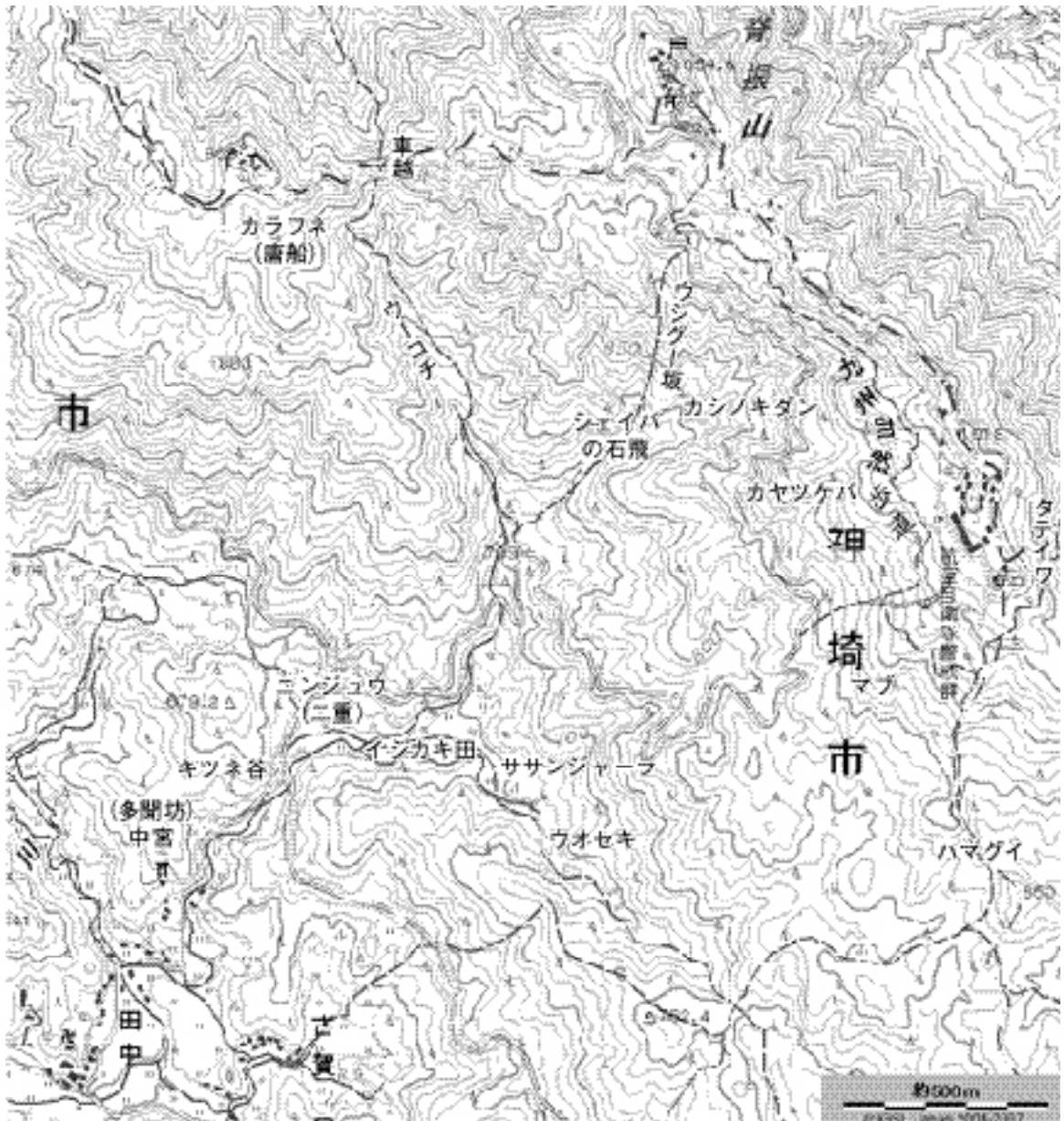


Fig. III 2-3-1 神崎市久保山・田中のしこ名 (1/25,000) 〈国土地理院発行地図〉

が川沿いに上り下りした坂がウシグーザカであった。

牛宮谷・脇 塩井谷（『筑肥国境脊振山争論文書』46頁）

あるいは

牛宮谷汐湯場下（同97頁）

とあるように、牛宮谷の一部で脇からの谷が塩井谷で、汐湯場があった。この地名は「シェイバの石飛」として記憶されていた。

「シェイバの石飛、そがんとを登りよったもん。うしぐーざかの下の方だ」。

登山道沿いを指した。神水川をよくシェイガワという。シェイバ（神水場）はお塩井取りをする塩井場だった。

4 マブ

立岩（自衛隊基地）の西側をマブとよぶ。マブ（間歩）は坑道を指す。国境争論に「かねほり」が頻出する。筑前国板屋村によれば

此方よりかねをほり申たる跡所々ニ有之、立岩之浦合ニ御座候（『筑肥国境脊振山争論文書』64頁）

とある。マブは金堀の跡だ。

ほかにも弁財岳南の平の内、桑河内、篠平、きつね谷、金山、桜の木山にマブがあったという（『脊振村史』381頁）。「きつね谷」は田中集落の北に、「桜の木」は田中の村南に地名がある。

5 カラフネ・ウオセキ

ウオセキ（イオセキ）という地名は篠平の東にある。国有林との境界に近い。かつて山腹を流れて南の古賀ノ尾の水田を灌漑するウオセキの取り入れ口があり、多くの人に記憶される。板屋村から走った人物が、国境は「唐船より篠平・うをせきはた・くり山迄」（『脊振村史』382頁）といている。カラフネ石は縦走路にある。气象台レーダ近くのザレ場で、南の展望がよく、いまも多くの登山者が休む。田中の人も周知しているし、福岡市立博物館蔵ほかの「早良郡図」にも明記されている。板屋村の村人が国境と認識していた線は、3つの地名が現存するから、かなり明確である。ウーコチ川という自然河川が境である。不自然な国境認識ではない。

史料にみえる魚釣谷はウオセキとは別である。右の早良郡図によれば、車越と脊振山・役行者の中間が魚釣谷頭だった。車越は北側（福岡県側）、椎原・車谷の頭で、今日ヤハズ峠とよばれている。よって魚釣谷に該当しそうなものは、ウーコチ川に流れ込む東の谷か。文脈からはウーコチ川そのものを指すようにも思われる。伝承されていないのは筑前側の呼称だったからであろう。

筑前側が国境線と主張した三渡瀬という地名は、いま久保山・肥前側では記憶されていない。しかし「篠平之下」が「三渡瀬近く」で、「三渡瀬の印杭の上が肥前領二重平」であった（『佐賀県近世史料』444頁）。さらに「三渡瀬西ノ田中」とあり、田中の東である（313頁）。「三渡瀬より神水場迄拾壺丁四間、三渡瀬より唐船迄拾式丁八間」ともある（『脊振村史』383頁）。場所はおおよそ推定できる。おそらくウーコチ川とイオセキ川の合流点か、その近くであろう。

『脊振村史』が引用する『肥前国官社記』によると、天正11年（1583）の山論に高祖原田と龍造寺の間で決定された「昔ノ国境」は「クビリ立岩・花木原・二重平・三ツ渡・魚釣谷・立

石・唐船・シヤブ頭（辻シヤウブ頭、菖蒲）」で、それが元禄六年の裁定で山頂の峯分になったと書かれている。二重平・三ツ渡が国境ならば、まちがいなく西の山麓に筑前領が伸びていた。戦国時代、原田少輔の時分に、早良郡内、西は一の鳥居、北は鷲ヶ嶽、東は九千部嶽、南は三渡瀬までを寄進し、その寄進状が残されていると板屋村は主張した（『脊振村史』380頁）。

「車越之大谷ヨリ此川筋ニ境ヲ引下シ候ハ、無紛境目」（『佐賀県近世史料』444頁）

とある。細部の出入りはあるかもしれないが、おおむね国境はウーコチ川筋にある。境界認識は巨視的には一致している。村史が依拠した明治図の「篠平野」は耕地「篠平」の上部にあった野をいおう。係争地はずっと下である。

論所となった地点は地名調査によって明らかになる部分が多い。一帯は国有林になった。また筑前側は敗退し、排除されたから、筑前側呼称は使用されずに消滅した。いまでは位置を確認できない地名も確かに多いのだが、それでも収集できた地名によって、争論のようすが具体的に、詳細になった。

稜線（分水嶺）によって確定されず、越境する国境線のありかたについては、潜在的に不信の念があったようで、「ミのを切ニ、何とて不仕候か」（どうしてミのを切目にしないのか）という発言もある。「みのう」は尾根の頂上の意味で、「みのうまで」というように今も使っている。

「みのお切ならば、西小河内（西小川内）は筑前に入るはずだと発言したが、いまだその点に関する回答はない」（71頁）。あるいは

「我々共見申候而ハ、筑前之内ノ様ニ見へ申候か、何とて西小河内共ハ山ヲ越候か」

と、山を越えて肥前領があることへの疑念は、なかなか払拭されなかった（88頁）。

西小川内が肥前領であるという認識は、元禄以前はむろん、国絵図が作成された正保以前にも確定していたであろうが、稜線をこえて飛び地があることを不自然に思う気持ちは、元禄段階でも、依然根強かったようである。西小川内が肥前領となった歴史的な経緯には、稜線より西に当たる地域との交換などがあった可能性を想定できるかと思う。

係争地であった牛宮谷・魚釣谷には筑前板屋、肥前久保山の農民が炭焼きに入っていた。山を焼き草切山にしたこともあった。両国両村の共同用益権があったと考える。山頂弁財天宮補修が両国で行われてきたことも、共同用益権と一体である。

秣山、草山などにはもともと境界意識は稀薄だった。のちに見るが佐賀県三根郡上峰町大字堤字三本黒木の秣場は養父郡・三根郡・神埼郡の草山、すなわち三郡立合の山であった。明治



Photo. III 2-3-4 脊振山と南麓



Photo. III 2-3-5 五ヶ山・小川内

9 年（1876）官有地編入時に境界査定が行われて紛争になった。もともと境界線がなかったところに境界線を設定しなければならなくなったから、境界紛争が起こった。

国絵図作成などで国境意識は強くなる。共益地にも国境を引く必要が生じてくる。争論は必然的に発生した。それまでは国境は二本線で、両国の意識は相互に越境していた。それでかまわなかったのである。

二重平は筑前側の用益が認められてきた土地には違いないように思われ、いわば一種の共同利用地であろう。しかし筑前側はそうしたことを証明し、幕府に承認させることはできなかった。

なお久保山・田中、古賀ノ尾での聞き取りに際しては田中・服巻正夫氏（昭和 8 年生まれ）から多大な情報を得た。またそれを森崎満、西川進、納富照海氏らから再確認した。また古賀ノ尾では築地力（大正 15）、吉浦文夫、築地はま（大正 13）の各氏からご教示を得た。

2 九千部山から坂本峠の国境石設置

現在、五ヶ山と周囲には国境石が点々と確認されている。これは天和・元禄の相論結果によるものなのだろうか。『栖』26、特集「国境の石をめぐって」（1995）によれば、九千部山の尾根筋にある国境石は、宝永元年（1704）から二年にかけての建設であることが、対馬藩・宗家文庫文書によってわかる。長忠生「文書にみる九千部山尾根筋の国境石」（同上所収）によって概要を紹介すれば、このとき福岡藩側が設置した碑を対馬藩側で確認した。境界そのものに建てた場所は、権現山、大峠の二ヶ所のみで、「何れも境石、筑前の内に少し宛、引き取り立てこれ有り候由」とあるように、他の石は境界線上そのものではなく、少し引いた位置に設置された。これは坂本峠の近辺でも同じであって、緩衝帯としての国境域を設けたものである。

二重平・元禄裁定からおおよそ 10 年が経過していた。一敗地に塗（まみ）れた福岡藩にしてみれば、国境線自体の確定・確保を早急の課題としたものであろう。

設置場所は

- 1 権現山 2 大峠 3 藤内が崩・とうないがくえ（筑前でいう塩買） 4 象石 5 薬師峯
6 塔尾か（九千部山山腹）

* 以上は河内村・市ノ瀬村境、当初は無銘石を宝永元年 11 月 4 日に建て、確認を得たのち、刻銘石としたのが 12 月 3 日。

- 7 笛草山 8 制札の本（水のみ頭）

* 以上は河内村・道十里村・桑河内村境、宝永 2 年 4 月 22 日建立。

- 9 高尾山 10 二管（にかん）山（たらむせ頭、たうむせ頭か） 11 かど石

* 以上は牛原川内村・道十里村・桑河内村境、宝永 2 年 4 月 22 日建立。

- 12 ほこ石 13 大谷頭 14 三領境

* 以上は牛原川内村・大野村境、宝永 2 年 4 月 22 日建立（長論文に 6 月とあるが 4 月ではなかろうか）

このときの国境石は文言が共通していて、いずれも「従是北筑前領」「従是西北筑前領」というものである。碑文の筆跡も同誌掲載の写真・拓本を見る限り極めて似る。同一人のものである。筑前側で建てたから、筑前の文字しか記されなかった。

この筑前領と対馬・田代領との境界石に続いて、七曲峠までにさらに九つの国境石が残されている（13～21）。その文言は先のものとは少し異なって、「従是北筑前國」「従是西北筑前國」と「領」の文字が「國」に代わっている。筆跡も先のものとは異なっていて、筑前の「前」のうち、月の部分が耳のような印象を受ける。これらは筑前黒田藩と、肥前鍋島藩との境界に建てられたものであり、さきの対馬・田代領との境石とは別の時期に建設されたと考えられる。文言は先のものに類似しており、肥前側が建てたわけではなく、筑前側が建てたことは明瞭である。

次に七曲峠から坂本峠北を経て谷川まで14個の国境石が確認されている（22～35）。これについては主としてさきの『栖』には言及がない。『栖』は鳥栖市域を扱う雑誌だからであろう。この分は『国境石』（くにざかいいし、那珂川町文化財パンフレット・那珂川町教育委員会）によりつつ、述べてみよう。

碑文の文字は「従是北筑前國」22・28、「従是西筑前國」24、「従是東北筑前國」32・34・39、「従是東筑前國」37、「従是南肥前國」23・26・27、「従是東肥前國」25・35、「従是西南肥前國」29・33、「従是西肥前國」36・38、とある。すなわちこれらの区間は筑前と肥前と両方の国境石がある。それより東には筑前領が建立したものしかなかったから、建立の経緯を別にするものである。

これらは肥前側と筑前側の石が近接するものが多い。27-28、29-30、31-32、38-39は対面するかのようである。24-25、33-34も、いくぶん離れてはいるが、基本は同様であろう。おそらく両藩が立会しつつ、ほぼ同時に建設したものと考えられる。

3 札木山・地焼争論

さて二重平争論決着のあとも、福岡藩・佐賀藩領の境界争いは、坂本峠周辺では継続して行われていた。

国境石は当初の争論地を示すわけではなく、争論後の調停結果を示す。肥前側は当初、現在の国境よりも東、また北が国境線であると主張し、筑前側は西または南が国境線であると主張したはずである。

こうした争論が起きる原因は国境の山々が両国数か村の草山（秣山）つまり入会山であったからではないかと考える。現在の古老が記憶する限りでは国境の山は雑木山だったという。しかし明治35年地図に明瞭なように、この国境の山は草原であった。牛の飼料を得るための草山であった。

そこでこの周辺一帯の争論の内、現代に至るも決着を見ない、佐賀県での事例についても紹介しておきたい。

その1 肥前管内・周辺草山の相論

国土地理院から刊行された平成九年刊の2万5千分の1地図をみると、中原町と上峰町（以上は旧三根郡、それぞれ現在はみやき町、上峰町）の境界は未定となっている。高柳（中原町）と塚原（上峰町）の間に引かれた境界線は北には続かず、そこで消えている（筆者は東脊振村・神埼郡、現吉野ヶ里町との境界を未定とした従前図もあったと記憶する）。

『角川日本地名辞典・佐賀県』高柳村の項（411頁）に、八か村の入会山であった「三根郡草山」

をめぐって宝暦六年（1756）神埼郡大曲村と三根養父両郡五ヶ村で争論となり、藩の見分を受けた。文政四年（1821）にも争論が再発したとある。このことは『東脊振村史』（1982）ほか『峰』創刊号に掲載された鶴田浩「上峰町北部境界について」（刊行年未詳）も詳しい。これによれば

- 1 宝暦六年・文政四年（鎮西山北部が対象か）
- 2 明治九年の境界査定

の二度の争論があった。上峰村大字堤字三本黒木の秣場は養父郡・三根郡・神埼郡の草山であった。明治初年、官有地編入時に境界査定をした。

養父・三根の郡界は

福岡県境字札木ノ辻ヨリ南千年中ノタヲ、戌亥谷、堂ノ谷、大塚山、狐谷ヲ以テ養父・三根ノ郡界

三根・神埼の郡界（上峰町・東脊振村境界になるはず）は

ダゴン堂登り口ヨリ北同県境字観音坂迄峰道ヲ以テ三根・神埼ノ郡界

とある。中原村は近世には三根郡であったが、明治初年には養父郡に属した。この論考に添付された明治19年製、昭和25年写の三本黒木国有原野反別二百五十町歩略図に書かれた地名は

筑前国境・札木の辻・時焼・千年中ノタヲ（以下略）

とあって、元禄の肥筑国境争論に登場する地名はここにも顔を出している。

その2 札木山・地焼争論

以上を踏まえながら、つぎに地焼・札木山をめぐる論所をみる。この山々の地名に関する記述を確認しておこう。

まず1『筑前国続風土記』には以下のようにある。

大野より南の方、肥前の内を四五町通り、川を越え、また筑前に入、十町余行て嶺あり。地焼嶺といふ。谷川の流れ出る頭を境とす。地焼の前の嶺を小嶺と云。道祖神両所にあり。又烏帽子岩と云岩あり。地焼嶺より肥前の方に、四町許ゆけは、彼国よりたてし関所あり。

2 『筑前国続風土記附録』

本編に見へたる地焼嶺・小嶺・道祖神・烏帽子岩ハ皆肥前国西小河内に属す。

3 『筑前国続風土記拾遺』

大野より肥前神埼にゆくには、村より十町斗道の左に山伏塚とてあり、又其先に烏帽子岩といふあり。地焼とて峠の下に野あり。此辺両国の地入交りて犬牙の如し。目くら落しとて、馬のかうねの如き赤剥の上に、肥前の境石野石立り。

1の貝原益軒の時代には、大野から峠（地焼嶺＝地焼峠＝坂本峠）に至るまでは、最初は肥前領を通過し、つぎに筑前領を通過して峠（嶺）までは筑前領であった。ところが附録の段階になると、烏帽子岩より上は全て肥前領となっていた。そして拾遺になると、両国は入り交じって犬の牙のようだとある。犬牙錯綜、つまり犬のきばのように、互いに食い違い入り組んでいるという。これを歴史的変遷と読むか、調査の精度とみるかであるが、前者とすれば、国境ないし道筋はその都度変わっているかのようである。じつは、前掲『国境石』によると、旧街道と国境の線の関係は、大野地内では肥前領を通過し、上部になると（35より上）では筑前領を通過している。『続風土記』本編の記述が、じつはもっとも旧状にはあっている。



Pho. III 2-3-6 那珂郡絵図

地理的記述は 1 の本編、2 の附録が

- 1 烏帽子岩・2 道祖神・3 小嶺（地焼の前の嶺）・4 地焼嶺（関所四丁手前）
3 の拾遺が

1 山伏塚（現存）・2 烏帽子岩・3 野（地焼）・4 目くら落とし（馬のこうね状の赤ハゲ）
となる。さきの肥前側の史料を以下に示す。県境一帯に札木の辻、南に時焼があった。

御領他領境在名録（『東脊振村史』昭和 57・所収）

北筑前山

一 札木山 神崎郡小川内村 但双方山峰尾両水流境、筑前側えの往還あり 大庄屋小宮善左
エ門 大山留重永清兵エ

北筑前

一 寺焼 同郡同村 番人侍・足軽なり 右同人

但此筋宝永年中境論候所双方歩寄境目差分・絵図証文取替・境石立て方今に歴然

東は筑前村

一 大野 同郡小川内村の内、但小川内川境

右同人 大山留 平山新蔵

東同嶺小川内村

一 小川内村 右同 右同 右同人

東同嶺板屋村

一 くびり 右同 右同 右同人

但此所より鬼ヶ鼻之間、先年筑前国と争論、公儀御役人御下向御裁許之標示式拾本相建
居候

東右同村

一 千葉岳 右同 但谷境 右同人

なお福岡県側の認識では、札木山も地焼も福岡県側に入りこんだ地点の地名であるという意識があるらしい（060307 築地徳実さん）。点の地名ではなく、面積をもった面的な地名であったものか。

以下は、築地徳実・裕御夫妻からの聞き取りである（平成 18 年 3 月 7 日）。

——（徳実さん）ダムの無線塔のあるところ（597 m の少し北）、県境よりちょっと福岡県に入っている、ジャケって所がありますもんね。ジャケはちょうど、うちの山境、境界ですもの。民有林です。

ああ、フダキノツジってあるもんね。ジャケから続いとるもんね。フダキノツジは県境ではない。福岡県にだいぶ入っている。いま工事しようが。あれからフダキノツジって登れる。フダキノツジから無線塔に続く。フダキノツジって、山の境界の道。三角点より北側。メクラ落としは知らんなあ。中峠、牟田、知らん。ジャケへ道はない。

（明治の頃には草山ですけど？）

自分が知る限り、草山ではなく、ゾウキ山だった。

（やすさん）エボシイワってききよったもんねえ。

よってこの認識と筑前国郡図をあわせ考えれば、ジャケもフダキノツジも点的な地名という

よりは領域的な面的地名ではないかと考えられる。

争論の経緯を示す筑前側の史料を引用する。

「黒田新統家譜卷十一」「綱政記四」元禄九年～元禄十三年より

那珂郡大野村の内地焼ハ、肥前國神崎郡西小河内にさかひ、殊ニ其地、入ましりたる所なれハ、兩國の百姓數年争論する所也。此度際圖取かハしの事に依て、去元禄十三年綱政命有て、此方家老中より際繪圖取かハしの相談、双方役人申談せしむへき旨、飛札ニて申遣し、其後彼方役人有田主計・枝吉三郎右衛門・竹田權右衛門と、久大夫・八右衛門と度々書通ニ及ふ。境目の繪圖、たかひに借覽しけるに、彼方正保の古繪圖に替る趣もなく、背振山御裁許の所はかり、改候由、申來る。地やけ境も分明ならず。此方新古の繪圖に各相違の所も有しかハ、相談に及ふへき處に、江府より御いそきの旨にて、隣國の境相調さる所ハ、其儘持參し、江戸におゐて、雙方役人申談し、相極むへき旨申越しけれハ、此地におゐて論談に及ハす。去十三年の秋、各江戸に持參しける。江戸において伊左衛門・武助・與兵衛共に大和守へ參り、長濱次左衛門に面談し、肥前境の際圖を渡し置ける。公儀繪圖所の例、境圖出入ある所ハ、雙方長を断、矩を補て繪圖を改む。狩野良信か門弟繪圖所の頭取磯野彌兵衛と云者、此方肥前國共に繪圖うけ合調へけるか、伊左衛門方へ申越けるハ、其御國と肥前國と共に境の所を少々改置候。最初寫し候繪圖に少々ちかひ候間、先一覽のために遣すへき由申越けるにより、山本源助を遣し、此方繪圖ハ規矩の器を以分間を定置、其上良信既に得心にて下繪圖成就したる事なるを、今以改めらるる事いかかに候間、此方へ來り役人共へ其趣を詳に申され候へと申ける。其後彌兵衛改たる圖を持來ル。一覽するに、第一地焼の圖出先を断、其外所々相違せり。彌兵衛申けるハ、佐賀役人衆地形に別條も是なき由申され候。勿論筑前繪圖ハ御念入たる事なれハ、其旨に随ひたく候へとも、彼方はかり改候てハ、役人の不念ニも成候間、此所を料見いたし候へと申され候故、かくのこたく改候由申ける。武助・與兵衛申けるハ、怡土郡未の方ハ、公領なるに依て此方より分間に及ハす、形相はかりの圖なる故に、長短の出入最初既に望のこたく、改置候。當領ハ、ことごとと規矩に合せ、郡縣の周圍、山谷の高下までも、少の差語なき旨を、光之・綱政も聞ととけおかれ候へハ、今更爰許ニおいて、役人の心得として改候事ならさる事ニ候。しかしながら、佐賀役人衆出あひ、たかひの帳面を以て相校へ、此方分間相違候ハハ、宜きに随ひ、改め候へし。此方少も異儀を立候事ニてハ無之候間、此旨佐賀役人衆へ申談し給り候へ、と申けれとも、左様ニてハとかく相濟さる事に候間、幾重ニも中をとり、よろしき様に申談へき由にて、歸りける。佐賀役人、出あひ候とて、少も我意を立、何かと諍ふ事ニてハ、なき事ながら、肥前境、すへて何の障も是なき處に、わつかの地焼のあらそひにて、事かましく、成行てハ、いかかなれハ、彼方役人と出會候事ハ、無用にすへき由、福岡よりも下知し給ひける。長濱次左衛門に相談しけれとも、雙方繪圖の出入ハ、補正して合せ置通例なれハ、所存のこたくに成かたき故、次左衛門料見を以、彌兵衛に申付、ふたたび、よろしきやうに、當國の際圖ともに相改め、佐賀方三分の二、筑前の方三分一を改めける。際繪圖、取かハさるる前に、飛脚を福岡に馳て、此旨を申遣し、第一地焼の模様を通覽せしめらる。凡ハ、大野村前川筋を上り、烏帽子石邊にて川をさかひ、それより上、地焼に至てハ、古道筋を境と此方にては申傳へ、彼方よりハ新道筋を境と此方にてハ申傳へ、彼方よりハ、新道限りを境のよし、論しける。彼地分間の時、古道筋の谷頭ニてハ、形相よろしからさる故に、中谷筋を境にして、分間しける。然

るに此方、札木辻より猫嶺といふ處を境筋なる旨、彼方役人申候由、次左衛門語りける。猫嶺といふハ、佐賀より稱する名にて、此方ニハ其名なし。道祖神ある石塚の邊成へし。然れハ境筋甚相違し心もとなき故、福岡にて、再び役人を出し、分間して、山形を江戸に遣しける。然とも論地ハ、わつかの事なれハ、事決せずハ、畢竟、間地ともなすへし。事故なく繪圖の上にて、境を極め候へと福岡よりも追々下知せられ、江戸において次左衛門よりも、肥前の方、別條なき境なる旨、彼方役人申由にて、度々際圖をいそぎ、且此方繪圖の内に、札木辻・烏帽子石も有て、彼方形相、其趣に、かへらす。雙方少の補正ハ諸國の通例にて、殊ニ此方の圖を削補する事、彼方に比すれハわつかの事なれハ、異儀ニ及ハす、際圖取かハして事濟ける。

川添昭二校訂『新訂黒田家譜第三卷』180～182頁

正保国絵図を改訂する必要があった。いわゆる元禄国絵図の作成である。二重平の問題は幕府裁定を受けて決着したが、地焼の境界は決定できなかった。筑前側は古道が境と主張、肥前側は新道が境と主張した。このときは国絵図作成の期限に間に合わせる事が最優先されたようで、中間の中の谷で分間絵図を作成することにしたが、なお猫嶺までの境界については、両国に隔たりがあった。そこで分間測量をして福岡藩からは山形（山の地形模型図）を江戸に送ることにした。しかしその主張は正保図に比して、わずかな訂正ですんだし、福岡藩にしてみれば、佐賀藩側の訂正よりも、わずかで済むものであった。

国境の境石については『筑前国統風土記』「肥前国あや部村へ越る道也、此所に境塚あり。筑前肥前の境なり」と七曲峠の境塚について記述するが、他の塚の記載はない。

また『筑前国統風土記拾遺』では上述のように「目くら落し」と呼ばれる「馬のこうね」（馬の背）状の地点には「肥前の境石（野石）」があったと記している。一カ所の境石の記述しかなく、他の石の状況は不明である。

みたように元禄13年の相論は図上で決着が付けられた。おそらくこうした解決法では、現地に境界指標を設置するまでには至らなかったことであろう。現在残されている国境石が設置されるまでには、なお時間を要したと考えられる。

坂本峠近辺の相対する両藩の境石は、国境が線ではなく、幅を持つ帯であることを示す。緩衝地帯ともいえよう。しかしこの帯は実は現在の県境には踏襲されていない。24-25の対面する両藩の石は二つとも福岡県内にある。27-28、29-30、31-32はいずれも佐賀県内にある。23は大きく福岡県に入りこんでいる。峠より五ヶ山に下っては江戸時代の国境の帯よりも東に県境が設定され、札木山周辺では南に下って県境が設定された。そこにいかなる駆け引きがあったのか、あるいはなかったのか。それもわからない。

4 国境石

水没予定地域のなかに国境石がある。全部で4つあって、一つは転倒し、原位置を動いているようだ。ほかは旧位置のままで、よほどに水流の影響を受けない位置を選んで建設した。石垣の中にあるので運んできた石のように思われるが、あるいは基部は自然石なのだろうか。文言はみな同じである。

此石垣相障申間舗事

筑前國五箇山村

碑文の筆跡は同一人のものである。ただし一つ一つの文字は差異もあって、「まじく」の箇所が間舗としたものと、間敷としたものがある。つまり一枚の原紙を書いて渡したのではなく、一人が四枚分を書いて、それを別の数人の石工に渡したのであろう。

設置位置は中島状態で、国境石碑文の西と東に水流がある。現在では東が本流で水量も多い。ときによって水流に変化が生じやすかったのであろう。川には梁をかけたり、魚を捕ったり、また用水を取水したりで、権益が錯綜しがちだった。筑前側の意思表示として、この境界石を動かしてはならないと主張した。藩よりの資金の支援は受けたであろうが、建設主体はあくまで五ヶ山（五箇山）村であった。その点が先の札木争論を受けて藩自体が建てた国境石との相違である。

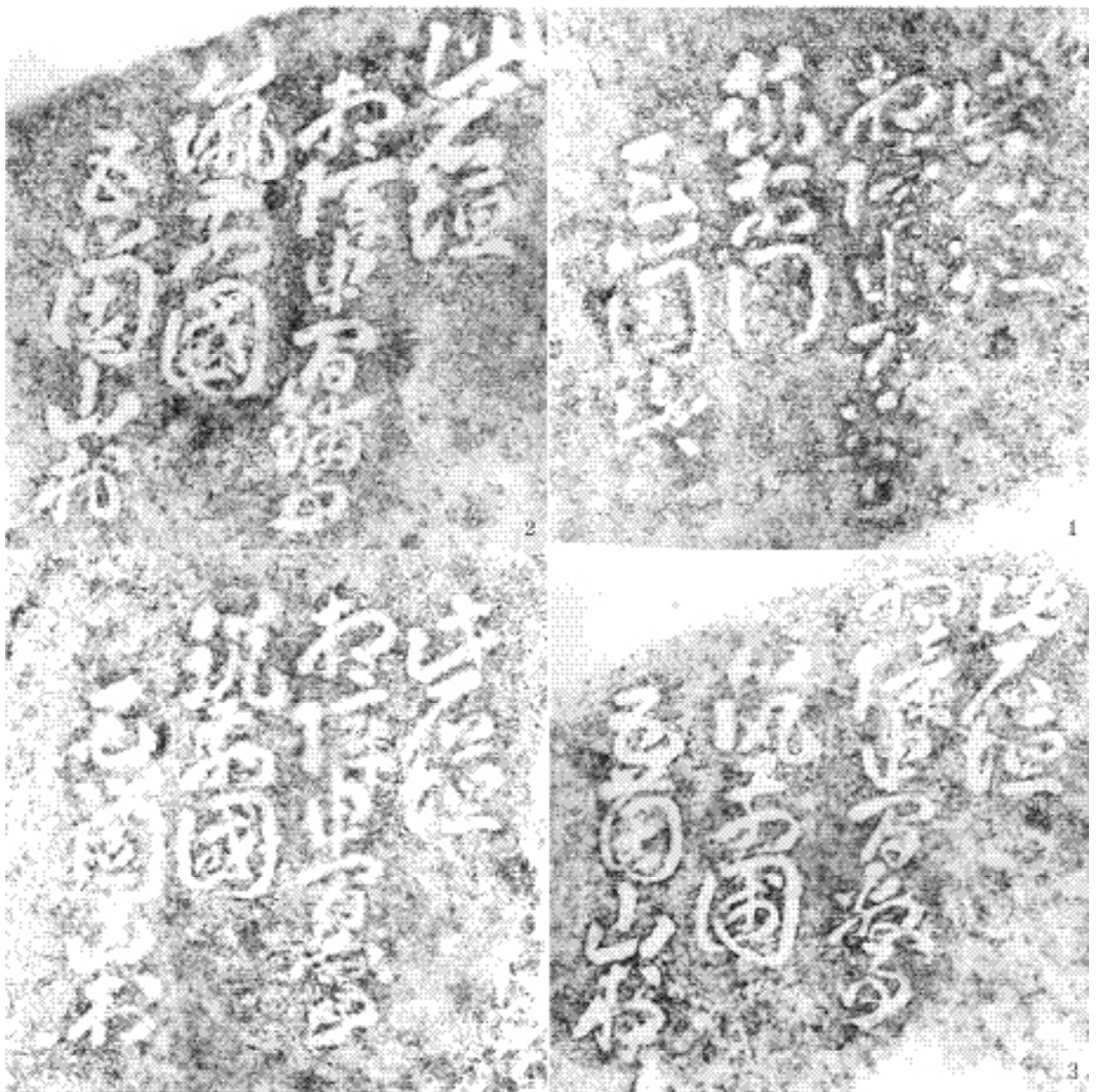


Fig. Ⅲ 2-3-2 五ヶ山国境石拓影 (1/10)
(下流から順に1・2・3・4)

札木争論の結果を受けた国境石は峠から下って、『栖』26 報告の 35 で終わる。山伏小積石の近くである。ここよりは「従是川中境」とあるから、境界石の設置は不可能であった。中洲・中島状となるこの地点において、再度国境石を設置した。

5 山内刀指

近世、肥前側では住民の一部が山内刀指と位置づけられたらしい。山内とは佐賀郡・神埼郡の山地部をいう。神代氏家臣の後裔で、この地に居住した人々をいうようだ。刀指は文字どおり帯刀を許された人々であろう。

山内刀指由緒

佐嘉神埼山内の処、我等先祖以来、惣心遣御付置被候処委細新敷く能不申達候

一、御公私の法の処は沙汰に及ぼす万厳密に相守り小百姓に至る迄一流風俗悪しき処等の無き様内連々申諭可く候

一、惣心遣御付なされ置き候に付いては勿論不刀指被宦山中住居の人小百姓に至る迄、自然御法及相背萬風俗悪しき処等之れ有らば其申付可く候尤も重き事柄に候半ば筋々相達し手当之有り候様御取斗申処に候条兼々相慎申可候

一、泰盛様御代より第一他より被官相成り絵人相増候処桐き御法ついに被れ仰せ付き置き候 此方家督初めには御書き付相被され処に候共の末両山内大庄屋小庄屋江も跡方定規の如く相違無き様申達置く処に候条其の意を得可く候

『西小川内誌』に記されたこの古文書は現在確認ができない。文言も不安定で、厳密な史料批判が重要に思われる。しかし国境の村、西小川内に鉄砲を所持する刀指が置かれたことは、大いにあり得ることであろう。

〔服部英雄〕



Pho. Ⅲ 2-3-7 立(楯)岩



Pho. Ⅲ 2-3-8 国境石の調査

3 五ヶ山の地名と地誌

i. 網取 〈2003（平成15年）9月1日取材〉

地名

いちのこーち：谷水がかり、ウエンタは良い田、反当5、6俵、麦も作った。

あいばたけ：田んぼがあった。寒天会社があった。

池尻

ごしょ（御所）：道の上。

もぐち（門口）：一の岳城の門。

ウエンタニ：門口の上。

マゴハチ岩（敵が来たとき弓で射たところ）

前田

えのき谷：前田の小川の支流。

しいのきぶち

はる

といしだに（とびいし谷か）飛び石があった。牛はだぶだぶ横を行く。（飛び石だから、橋はない）大水が出てこっちへ帰ってこられなくなった。小屋もちよこつとはあったけど、泊まった覚えはない。水の引くのを待つ（あるいは下流まで下って橋を渡ったか）。

の（野）：牛用の草場。いまはダムサイトの横の檜山。

いせびせい（石びせい）：瀬はなかった。川がひいろう（広く）なっとった。中島。ヤエザクラブチは一のコウチの横。

にわとりぜ：小さな淵、河野さんのお宅の前の深み。前はボロンボロン、石飛び。

平石の石飛び：学校なんか飛び石を通っていった。

馬の子尾根：うまんこおね、馬の骨のような尾根という意味。「こお」に屋根の桁という意味があるらしい。

炭焼き

五ヶ山にある国有林全部、九千部頂上まで。みんなで50戸、50で切り分ける。小組合（こぐみあい）、世話人がよる。入札をする。一年中焼く。夏でも焼く。窯が上と下と離れている。2か所で焼く。窯は個人個人、1俵は15キロ、前んとは（以前は尺貫法）25斤っていった。キロに直せば15キロ。

国からの五ヶ山区への木の払い下げは一括。向こうのいう値段のまま（交渉はできない、高いと思えば入札しない）。それを区が入札して50戸に分ける。条件によって値段がちがう。一人で二つ分。兼業といっても農家の方がいくらもない。金といえば炭（炭の現金収入が米よりもよい）。世話人みんなで見てまわる。あそこはどうか。入札料は（営林署からの）払い下げ値段より高くなる。

窯はひとつで100から100俵のうえ、できる。窯を作るまでは個人の仕事。木を入れて土を

あげて叩く（窯は詰めた燃料自体が柱になって、上から土をかぶせて作る）。何人か、10人ぐらいで、窯打ち。講のごと、講（相互扶助グループ）みたいにする。よそから雇うことはちょっとなかった。窯自体、寿命はかなりある。去年の窯、人の窯じゃあるけど、使える。けどまわりに木がない。1年ごとに次の雑木に行く（周りに木のあるところへ窯は移っていく）。

薪炭材を焼いたあとは植林。床ざらい、杉植え、ねざらい。国の政策でほとんど（杉に）転換。カシ、ナラ、シイ。（ほんとうは）自然（林）がよい。炭を焼いたあと、どうかしたら、たまに（木の残りを焼畑として）焼く。小豆やら、蒔いたり、たまにした。近くのところせな、からわなならん（背負っていかなければならない）。めったにはせん。切畑焼きとか何とかいった。

おうこ（枋、負うこ）、人間がからって降りる。行きは道具、帰りには俵にしたと（炭俵）を持って、4つ持つ人もおった（4俵60キロを担ぎ降りる人もいた）。

（100俵も下ろさなければならぬ）わざわざ弁当なんかも持って行かない。一日、二日すぐに4俵いのうて、こにゃーならん。手ぶらで帰ってくることはない。地下足袋はいて。牛で出すことはした。

炭の検査は西畑（*那珂川町）の人、1等、2等を決める。値段もちがう。優良炭は五ヶ山組合が燃料屋に売る。カシ1俵、1,000円、10俵1万円、木炭組合が売って、何%かを取る。

たわら、なわ、自家製、茅を切って「ダツ」（俵）づくり。全部自分、縄のうて（縄をなって）ダツ編んで。朝でも夜でも。たくさん焼いたけど、大もうけした人はいない。月に焼く量、決まっている。5へんも10ぺんも焼けん。窯1個で1週間かかる。窯踏み（火留め）、密閉、（密閉しても、ずーっと）火のついとるぢやなからうかってぐらい熱かった。1月に2回。窯を二つ。去年のと、今年のと。いっぺん焼いたら次の木を（伐って）用意せにゃならん。休みはない。土曜も日曜もない。雪の日も雨の日も炭作り、たわらに入れる。骨折るわりには豊かではない。でもその頃のサラリーマンよりは良かった。わたしは窯3つ持っ取りましたよ。まったくの失敗もある。窯のコウ（屋根）が落ちる。山火事になる。師走の24日には山に行かん。山の神祭り、12月24日、山の木を切らん。土用（禁忌）の話は聞いたことはない。炭焼きの道は良かったはずですよ、修理しよりました。板屋に行く道、板屋と特別な交流はなかったけど、屋根やさん、屋根葺きの職人さんをお願いに行った。

塩クジラや皮クジラ、佐賀、綾部の方から担いで歩いてきた。一番長もてするこんな大きなのを買った。山にぶら下げて窯の小屋の中、ちょっとずつ切って、ご飯のオカズ。

窯踏みは火を止める時期のこと。窯によってちがう。時間早うしたら、炭がやおくて火もてが悪い。遅くなったら、灰のごとになってしまって、量が少なくなる。夜じゃろうが、なんじゃろうが、火を止める。火を入れてから煙の色とかみて。寒暖計もあった。

（はじめ）白い煙が、（つぎに）青くなって、（やがて）見えんごとなる。それを見て止める時期を判断できる。（人によっては）ニオイもしんなさった。木の水分によってもちがうかもしらんが、最初がちがうだけと思う（煙の色の視覚判断、人によっては臭覚も加味。自分は焼き上がり頃の臭覚差はわからなかった）。

窯踏みが必ず夜中になった。その（火を止める）頃ですよ、今でもそうして行かれるとは思うけど、月もなか、まったく真っ暗ななか、飛び石を跳んでいった。提灯は持っていくことが多かったけど、提灯は雨降りには消える。真っ暗ななか、行って、赤土で煙突を塞いだ。近く

にある赤土で。

夜中に行くのはいやだった。1 時頃に行かなかんあ、夜中恐ろしうて行ききらん。明日の晩・窯踏み。風の入る穴を小さくする。明日の晩か、明後日の晩になるかも知らん。どうかすると明後日の夜（経験で窯踏みの時刻を見計らって夜中に窯まで行くが、遅れることもあった）。晩の 11 時頃からのぼらなならん。1 時間ぐらい窯の前で寝たりする。ねぼうしたらたいへん。冬でも熱うして寝られん。厚着なんかできん。汗びっしょり。

炭窯（の屋根）は竹が一番よかとです。下から持って行くとは、やおいかん。下は木にして杉の皮。上は竹。下をささこ（竹）で茅を置き、押さえを竹。窯小屋と炭小屋、両方屋根を付ける。トタンはいちばん弱い。煙の酢、酸味でやられる。茅の方がうんと強い。屋根が煙で固まってしまう。（結わえている）かづらもガチンガチン。

入札の場所、木の気というか、平地もあって真っ黒で、上から下に木の集めやすいところ、しまうときの分（運び出し、片づけのしやすさ）、（いろいろな条件を整理できている）頭のよかもんが勝ち。

入札、国からこうた金はきまっとる。五ヶ山の区に 50 万円、入札して、高う買うても、配当があった。その配当金を計算に入れてよい山を取った。

「負（お）うこ」（枋）はまだうちにありますよ。肩だけだから（余分なものは何も付いてないから）、慣れればいい。

きんま道、山に対して自分で作ります。木を寄せるため、牛にひっぱらせて（*作る時に牛を使役か）。索道でも出した。あとになって近くの 5 - 6 人でやった。こっち（炭の入った袋か）が下がれば、空（から）があがっていく。よう破れよった（落ちた）。下の方で煙が上がる。落ちたら商品には、なりやせん。100 俵のはずが 70 俵、80 俵。炭のクズばかり。イロりにいれた炭、長もてする火の「あたり」とかね。炭のクズはけっこうできる。うちに使（つこ）うして（自家用として、使ったが）、もっとあつて山に捨てた。

いま木炭はいい。竹炭はキロ数がない。あの頃は焼かん。

田と小屋

田はトイシ谷やエノキ谷、遠い田のところは掘っ立て小屋、稲刈りで雨降り、雨宿りの場所がある。棟木で三角の小屋を作った。そういう小屋が多かった。床は土。上は杉の皮。長もてするよう、栗の木を使った。くさらん。ぐるりは腐れても、芯は保つ（掘っ立て柱は土に触れる部分は腐るが、芯で保った）。カリンカリンしとる。持ち主が強うするなら竹も使う。

茅屋根の葺き替え：こーがけ

家の茅屋根は何十年にいっぺん葺き替え。こーガケっていう。講（こう）を作る。茅は一軒から何把の割り当て。いつでもはされん（準備期間が要る）。茅が枯れてりっぱにならんと。一年にいっぺんか、（葺き替えが）ないときもありやあ二軒がいっぺんの年もあった。うちのうら（側）、20 年、保った。屋根の日当たりの具合による。屋根替えを雨の降るときにすると、弱い。縄もすぐぼろっと切れる。準備しててたまたま天気はずれた。そうしたら中止。網取全戸、こーがけ。

肥え松・火打ち石・たばこ

九千部のなんとか林班にワサビあるけど、こっち側（*左岸）にはワサビがない。植えても

消える。地にあわん。逆に九千部側（*右岸）は松の木がだめ。松明の芯にする肥え松。こっちはあるけど、向こうにはない。

肥え松は炭焼きの時、必ず火を燃やすたき付けに使った。向こうの山に入るときは、（松がないから）こっちの肥え松をけずっというて持って行く。マッチはあったけど、戦争中にはなくなった。タバコには火打ちを使った。タバコはマッチをたくさん使うから。ホクチって、やお一か木を屑にした。炭に焼いて粉にする。ちょっとあったら火はつきます。石を左手、右に金具、落ちたときすーっと吸うとつく。ドーランってタバコ入れ。刻みタバコ。山に入ったら火打ちで炭焼きもした。タバコは左手に持って手の上で転がして。（戦時中のたばこは）三服でしまい。町は敷島とか、巻きたばこ、農家は刻みたばこ。戦時中は配給だったから。20年ころは全然なかった。

たばこのたねを取ってきて、山の中でこっそり作った。みつかったら処罰される。

サルのは焼いて漢方薬に

何一つなかった。山にはサルが集団でいくつもおった。田から荒らしてしまう。鉄砲で撃った。火薬はどっかから手に入れる。弾は鉛を溶かして自分で作る。一回に二つ弾を入れる。弾一つだけだと皮で留まって逃げる。二個入れれば鉛の弾が中へ入っていく。サルは食べた。おいしい。馬肉のごとある。脂っ気もない。すき焼きにした。だれか砂糖をもっておらした。「中国では頭は最高級のごちそうですね」

頭は食べる。内臓以外みな食べた。タヌキ、アナグマ、野ウサギ、山鳥。何でも食べた。犬はいっぺん食べたことがある。うまい。サルは一匹か二匹、はぐれていると、反対に仕掛けてきます。サルは鉄砲でどンドン撃て。下に行った。埋金から下、西隈(にしぐま)、集団でいる。

サルの黒焼きは頭の病気の薬、じいさん、いつも飲みよりましたね。だいぶ遠いところからたずねても来ました（遠方からも買いに来た）。身はふつうに食べる。頭の骨、ツボに入れて黒焼き、炭焼きにする。炭をノコで切る。その鋸屑。ノコで切った屑。

*漢方薬でいう猿頭霜（えんとうそう）のことで、「サルの頭の黒焼。頭痛薬」とされる。密閉した容器内で、つまり酸欠状態で焼いたものを霜（そう、黒焼き）といい、効果は認められているが、薬理は未解明とされる。

大きなテッポウ、六番くらい持っている人がいましたよ。イノシシはいなかった。このごろ出る。ずーっと前はシカもいた。シカのどうかして跳んでいきよるそうです。わたしは見たことはない。ヒラクチは食べるし、薬にもなる。いち食べたらおねしょに効く。あれ臭いもんねえ。猫がイタチを捕まえにきて、辛抱しながら待ちかまえている。

山にある薬はじいさんが良く取ったのはハクリ、葉っぱがでてきてラッキョウみたい。根っこがべとべとになってアカギレの薬。

*ハクリはサイハイランの別名で塗り薬として使用。

薬はセンブリ、ゲンノショウコ、ドクダミ。せんぶりは男の薬、前は山のはげたところにあった（胃の薬、毛はえ薬としても知られる）。

川

といしの谷、アブラメとかおってもいくらもおらん。むかし、イシモチ、石にペタッペタッと付く。きれいな魚、ドンクロとはちがう。

「カジカですか？」

カジカは蛙（カワズ）。ウナギ、エノハが本流にいた。魚釣りはミミズ、糸は木綿糸で釣った。竹（サオ）も自分で作る。ハリは買う。

「川の毒流しは？」

しよったけど、いうてよかと？終戦後すぐ、なんべんかしたけど。木の葉っぱ、アシビ。あんまり効（き）かんかった。ゲランは小さいとが、ひっくり返る。だんだん食べよりました。（毒に当たったからといって）どうもなかったな。おいしかった。川掃除みたいなもの、（魚がいなくなる時期は）長うはない、よってくるからまた復活する。（魚は死にますか？）そうでもなかった。生きてる。

*アシビはアセビ、馬酔木に同じ。葉にアセボトキシシンという毒素がある。毒流し漁で、“ゲラン”と呼ばれるものは、外国産マメ科の植物である。根っこに殺虫効果があり、デリスという天然農薬として流通していた。ゲラン化学が製造元であったため、デリスの根をゲランと呼んだ。

家庭用電気 100 ボルト、片一方の線だけ、瞬間に浮いてくる。すぐにまた逃げていく。（川は汚れないけど）電気もいかん（脱法行為）、電気を盗むから。

青年

五ヶ山は上山、下山。上山が大野、東小河内、下山が桑河内、網取、網取は（県境ではないから）佐賀県となかが悪いということはないけれど、縁組みはない。東、西、小川内どうしの縁組みはない。下に下がったら嫁に行ったりがある。

ヨバイはむらのなか。（きれいな人を）「じょうもんさん」で言った。よその村の者が来て追い出すということは知らない、酒を持って来るという話も知らない。集会所はお観音さま、青年は泊まりよった。桑河内へ行ったり、道十里に行ったり、上山でも泊まる。相撲をしたり、お話をして、ただ泊まるだけ。力石もあった。観音堂に丸い石、担ぎよなった人もあったねえ。

金鉱

網取で金山の鉱石選別。トユを持ってきて、棒に石を付けてゴロゴロまわした。お宮の階段の下。あとで米つきに転用した。川から水、松の木で箱、米をついてもらってお礼をする。八十吉（ヤソキチ）さんの（が）ロクロを作った。蛇の目傘のアタマ。

金山をした人は田中左内さん、知っている。財産家、自分で資本投資、馬に乗って革の靴やらはいてすごかった。お祝い事の肴代、封筒に左内さんの書く字はこぼれとった。はみ出ると、大きな字。全部なくして、しもうた。金（キン）も取れてはいた。金が出るところは水晶が出る。肴代、佐賀はしおくじら、鮭の干物。

*田中左内氏については『小川内誌』184頁。

シンキョウさん

シンキョウさんはここに泊まった。（南畑）ダムができる頃まで。目は見えた。りっぱな男、息子もいっぺんか、二へん、きなった。琵琶を持ってきた。むしろ引いて、わらに御幣、のりと（祝詞）をあげて。米取れたら新しか、わらを束ねて、竹刺して新しい御幣さん。

遠くへ宮参り・綾部、吉木

かざどめ（風留め）のころ、二百十日のおこもり。大風のこんように、綾部の風の神様を頂いてきて、田の東西南北に立てよった。綾部まで歩いて総代が取りに行った。坂本峠まで二時間、また二時間。いま田がない。

太宰府、吉木の須佐神社、7月15日のお祇園さんは自転車でいった。10月16日オクンチ、自分のお宮のお祭り、お祇園さまのお礼。何年にいっぺんか、座元になる。一年中のお祭りとかはこちら。集会所のないとき、お座元。いま網取に座元はない。桑河内はまだ座元がある。

飢饉の話は聞いたことがない。葛根（かんね、くずね）も食べない。箕を直して来る人、桶の輪がえ、修繕は来た。

地主・小作はあったけど、自作農の方が多かった。小作も何軒かあった。小作ばっかしだと食べる米がない。麦を食べることが多かった。（米は）あってもよかとは全部やって（売って）しまった。屑米ばかし。

古墓改葬

南畑ダムの時、網取の古か墓を改葬した。墓掘り専門の人もあるけど、頼むと金がいる。私が掘った。カメは臭った。最初は恐ろしかった。うわっ、出てきた。慣れたらもう、どうってことはない。新しい人から古い人から。顔を知っている人の墓もあった。いくら新しくても骨のない人もあった。あとになったら木だけど、もっと前はカメの墓。カメ棺（に溜まった）水は結核の薬によかげな。箱（の棺）になったらみんな寄って、作って、いのうて行った。五組合で製材所、せいた、いらんと（不要材）をもらって、下のいまのお寺の近くで焼いた。

網取の寺は観音様、山神社、ふないし地蔵さん。札所になっている。地元で管理。

発電所

電気が来たとき、それまで全部ランプ。水で灯りがどうしてつくか。灯りを消す方じゃないか。反対があって、電気はただでやる、とかいう話があったらしい。

空池は手前に吊り橋があったはず。ウツオの下の川のところ、その尻。空池底の横が丸電取り入口。どうして空池というかという、工事が天ぷら工事、セメント半分しか使っていない。うちのじいさん、馬車引き。セメント樽、いくつも積んでも半分は空。セメント100俵、半分50俵しか使っとらん。水が漏って貯まらん。

ダムの飯場は上ん田にあった。御所に事務所。道十里への石飛は飛石と丸太3本。グワングワン動く。沈み橋もあって、飯場の方から（学校へ）子供が来た。

網取から出征は何人もしとる。けど戦死者は一人もおらん。



Pho. Ⅲ 3-1-1 網取・山神社



Pho. Ⅲ 3-1-2 網取・山神社境内

ii. 桑河内 (2003 (平成 15 年) 9 月 3 日取材)

地名と回想

いでのくちがわ

まつのはる

にしうらの田んぼ

なかのぎし

こあら：ここはそれぞれの田の町が狭い。二人も入れん。一人ずつ入って苗を植えおった。イノシシが来て土手やら崩して、いまは藪になっとる。

中のきり：

ひこひったん：九内さんが知っとう池がある。ひこいっちゃんじゃなかるうか。今榊を植えてのぶよさん、きよちかさんのうち。

またはち：みなアダナ。だいぶ田がある。のぶさんたちの田、それくさ、だんだん荒れて、いまは藪。カワラ、マエダ、ウラダ、川口、みなアダナ。

ニシビラ：西日のように当たるところ。稲にはいいです。朝日は長くは当たらない。熟れ方も少ない。小川内は朝から夕日まで。日照時間が長い。山と山の間をこう行く。米もとれる。向こうが実りはじめても、こっち、うちの田はまだ青々しとる。

ニタンタン：* 2 反田という意味であろうか。

コナガン (コナカン)：何枚か、かなりある。石垣もある。鍬、みつまた、打って踏みたくる。そこそこ踏んで、一坪、二坪。牛、たいていの田には入る (のに、そこは狭すぎて入らない)。そういう田は何枚もない。クワジロ (鍬・人力だけだと)、牛で鋤く (の) とは 10 倍ぐらい、ちがおうね。そういう田 (鍬でしか鋤けない田) も、桑河内じゅうでいえば、少々、4 ~ 5 枚はあった。

キンノキ：桐の木。減反以後、杉を植えた。昭和 46 年にはね、うちのキンノキも作っていた。橋を渡ってすぐにカネちゃんとかあって、あと 5 枚。こっちに長いとが 1, 2, 3 枚と、こっちへんに 1, 2, 3 枚 (そんな風に川の向こう、キンノキには田があった)。

イイモリ：わたしが昭和 48 年にゴルフ場に出るようになった。おとうさん、お前がキャディーして 5 万円もらえるようになったら、イイモリ、やめてもよか、っていった (耕作に苦勞の多い田だったということであろう)。

マツノハル：ミツヨシさんの田。

セグチ：

アラタ：

ニュードウ：ニタンタより下がニュードウ。

ヨコイバ (ヨコイワ)：よこうとこ、つまり休むところ。ちょっと、よこう。稲をかるうて、そこにちょっとした段があれば、尻餅ついて、「よこう (いこう)」。

さくらのもと：

たのくぼ：

おうらかみ (オウラカン、オオダガミ)

よもしろう・よしのもと：そのあい中が、たのくぼ。

やたろう：初永さんの母親が作った。その下がおうらがみ。

はさこ：ひっこんで、せーまいところ、そこは、はさこ。そのしこ名はさくづくり、その下がやさぶろう。かとうだ。

ふけ：麦は作る。全部は作れない。自動車の廃車置き場。

しんぞうだ：心臓部に当たる。ほんのちょこっと。いい田ではない。

寺の前：むかし寺があったじゃろうか。

岸高、くぼ：むかい。

石仏は網取。亀の尾の方、ふな地蔵のあたり。

水あみ場（水アビバ）、ます石がのこつとる。一番上の家の前。平石のこつちから渡るところ、子供が学校行くとき、飛び石。（石は何度か）いくつか流れた。下さ、回らないかんって。（人間は）一人も流れんでいっとるけんあ。いまのもんは渡りきらん。

いしぶせ（石伏せ）、川の渡る前。石ぶせ通って、平石、渡る。前田の下、岸高、くぼ、砂ワラ、あとは前田。「くぼんせ、こんかい」って。カネちゃんの田んぼ。

国有林は上の方、カメノオ官山、クセンブ官山、大野は高村（官山）。国有は林班、99 林班。民有との境にホリキリダオ。

タキダン（滝谷）、大雨が降ると、（村から）滝が見える。

ワサビ田はワサビ谷、ワサビ取りに行きよった。きょうはどっち行こうか。

ワサビ取りとかあんまりいっとらん、ほとんどいかん、（国有林での入札価格が）高つかもん。あんまりあわん。3 年にいっぺん借地願い。願（ねご）うとるのは 1 か所。じっさい取るとは 2 か所。3 人の名前で申請、個人では（許可を）おろさん。全員の名前で願いを出す。網取はサクラダニ（道十里）に作る。植えて（わさび）田にしている。国の補助を受けて作ったけど、水害で流れた。いまは葉っぱばかり。

お茶は畑の周り、田の周り、石垣、だんだんと生える。天然、いくらなっても、のうならん。土手あぜには大豆、小豆。あぜめ（あぜまめ？）って、ガンノメ、小豆より小さい。わたし来た頃に、いつもとった。

井手について・災害復旧での改良

井手は本川に 3 つ。井手の川に一つ。あとは竹のとい（竹樋で水を取った）。西平（にしひら）の井手。合流してから向かいの井手。前田にかかる。

井手相互の（配水比率など）取り決めはない（自由に取れる）。取り口には鉛管。旱魃の時は井手の口と向こう閉めて合流させる。前田はまかなう。なんべんか開けたことはある。むかしのままなら、石を並べて堰くような井手。

堰堤改修、井手の口は早（はよ）うできとる。昭和 24 年災害、28 年災害があった。30 年ころの災害工事だろうか。

（奥さん）28 年にここ（お嫁）にきた。ここへこん前、（嫁入り前に）知らずに仕事に来た。あとで結婚してそこが自分の田だと知った。しばらくしたら（井手が改修されて堰堤ができ）川のなか、飛石を渡すのに板、敷いて、耕耘機渡した。ここの災害、うちの裏がくえて（崩れて）土砂が入り込んだ。深川組が日雇いで工事。三面側溝は谷組。よこいばで、初めてこま一

かブルを押した。ユンボ、その前は、てぼり。向かいの大きな堰堤の時は岡沢組。下請けで三坂。谷組の別れが岡沢組。

チゴが淵での雨乞い

稲は必ずできた（不作の話は聞いてない）。むかしは造林していないから（雑木山だから）、水はあったんじゃないかな。雨乞いは知らないけど、ばーちゃん、88になって死んだ。大正2年生まれ、ばーちゃんがいうには博多から虎の頭。もってきてチゴの淵につけんしゃった。小学校のころ、はなしに聞いた。

*虎の頭による雨乞いは『小川内誌』156頁。

チゴの淵はうずまきに巻き込まれたらこわい。アメちゃん（進駐軍兵士）、ふりちんで泳ぐ。怖いながら見に行った。また水浴びにきとる。チョコレートくれた。追っかけてくるから逃げた。6年生で終戦だったから、中学生ぐらい。

山の地名・いわぐら

いわぐらは東小河内、岩ばっかり。部落よりずーっと上。ゼンリン教の行場がいわぐら（岩蔵）。峠もいわぐら峠。むかし牛と人間しかいかん。いまは車で行ける。さがしのと竜王（背振山荘の下）のあいなが、いわぐら峠。むかしはこうもり岩といった。なか真っ黒。

山からとれるもの

まっはだめ（生えない）、かずらは太るけど、くずね（葛根）、むかしは取りよったげなけど、わしら知らん。親父が水に溶いて作った。よそからは（くずを）取りにきよった。（葛は立木を枯らす。猪が掘っていく）いのししがきてよかったことはそれぐらい。

竹の実を食うた。だいぶむかしじゃろう。竹の実はおいしい。小さい竹、もうそう（孟宗）ではない。小さいきれいな実。あれがなったら不作、「もうもう」する。不作のことをもうもうという（「損毛」であろうか）。米粒にする。

炭・官山雑木山の入札

炭は冬、夏、農閑期。昭和40年まで焼いた。国有林払い下げ、特売でもらった。雑木、かし、しい、くぬぎ。優先権があって、むかし営林署から10町歩、5町歩。五ヶ山に特売の権利。

それを9月の1日か2日に投票。山（組合か）の約1,000万（円）もっていた。いま500万（円）なかろう。40人炭焼き、40ぐらいに分ける。3から5反歩。敷き札、振り出し。こまーか紙、1から40まで番号。ご飯茶碗に入れて、紙をかぶせて穴を開けて、はい、と出す。敷き札5万円、日当もかける。1町が5万だけど、7万か8万で落としてもらう。場所振り出し。敷き札3万、どこ山。80万も90万もなった。

元方がすわっていて、そこに出す。一番高いやつが落とす。ごまかしがきかない。金は別の箱、自分はいくら。（狙っていても）取り損ねることもある。うんと焼く人は一つの山では足らん。引っ付きおうてる横の山、買おうと思って高く出せば買えた。買えないとき、また売りはできたから、（どうしてもほしい場合には）その落札した人から買った。落札された金（国からの価格との差額分）は区の維持費になる。

（伐採後、木が大きくなる）45年が1サイクル。40年か41年すぎりゃ焼かれる。営林署の担当が調べる。収穫調査。条規持って立てる。測量させる。（ここを）10町払い下げよう。収益が余ったら国に納めよう。営林署担当区主任、（みなで）ごちそうして殿様のごと、さまさま。

タブの木、シイの木、やおかですもんねえ、安物だからカクビョウ（角俵）、四角にダツをする。正味 25 キロ。（目方を稼ぐため？）たたき割って押し込む。高いのはカシ（樫）、カシだけは別、樫炭（かしずみ）が一番長持ちする。樫は樫ばかりで小丸のダツに入れる。

入札対象の山はバラバラだった。銭さえ出せばとれる。網取・亀の尾山、1 時間あれば行く。わあわあいつてにぎやか。九千部頂上まで、4 キロほど。自分は 1 時間で行く、女の方は 1 時間半、下りは 30 分。（いま）一番上にはNHKテレビ塔。

大野と網取に木炭倉庫があった。

入札は山惣代の家でした。ひとつの割にひとつの窯。（40 のわりだから）40 のカマができる。

カマうち

かまうち衆は手間替え（*交代で協力、「ゆい」がえし）。かまうちの日、今頃、二百十日の頃、芋がら、担いでいく。煮炊きする。芋がらの芋煮て、食べさせた。終わったら、酒飲ませる。地鶏こうてきて、むしって腹一杯食いよった。おはぎはいっぱい持って上がった。窯の前で酒とおはぎと、お煮染め。10 何人分、3 升ぐらい炊いた。小豆も 1 升ぐらい、餡こしらえた。のんきな仕事じゃあるけれど、重労働。むかしの人は強かったです。

（できた炭を）4 俵、いのうてくる。斤で 25 斤を 4 俵。自分も降りたことがある。1 俵と 2 俵、片荷が軽い。山道やけん（オウゴで天秤にして担ぐと片荷になるが、坂道だからそれでもよかった）。ちょっと鉄索を入れた。索道を途中まで、線にぶら下げて。

カマ場所、ないところは安うなりました（竈作りに適切な場所がないと入札価格は下がった）。谷の湿気のないとこ、（もしも）尾根に作ったら木ば寄せるとき、全部担ぎ上げにゃならん（竈はふつう木を運びやすく、降ろせるところ、低い谷に作る）。45 年前に作られたようなところが多い（適切な場所は限られているから、伐期になると、同じ所に再び作られる）。（入札前にとどの山によい木があるか）下調べ、40 ぐらいの山、あらかた見とかにゃ、ならん。2 - 3 日かかる。

火種

戦時中少なかったもんな。ひっちゃんじいさん、火打ちでたばこを吸いなった。刃がね、三日月のような形、鎖つけて。むかしは刻み、キセルと、胴乱。火打ち石、ホクチ（ホクチに火種を落として火を付ける）、榎（エノキ）か何か焼いて炭ないて（なして）、粉にないて、火付きがいい。四角か胴乱の丸うなって、ちょっと（素早く）せると、火の粉のである。ちょっと吸いよるならもう、ついとるもんねえ。（家には必ず）火種を残しよんなったもんなあ。つけぎ（先端に硫黄が付けてある杉皮）はしっとう（知ってますか）？（火種は）冬ならこたつ、夏は囲炉裏。

青年・志願召集

青年の頃、市ノ瀬から下は集会所、うちんとはなかったから（集会所ではなく）、お観音様になんべんか泊まった。力石はお観音様のところにある。もってあがとる。一番ちいさか、長かとで 120 斤（約 70 キログラム）あった。国武が、手の届かん一番小さいやつ。胸まであげた。そこまで。それより前のひとは力が強かった。夜おそうまでしてわあわあいつて遊んだりした。飲み食い。金ももつとらん。

干し柿をおといて（落として）きたこと、あるわなあ。青年の遊び、ひもじゅうなったごと

あるねえ。

終戦間際、志願で行かされる。志願で行って、知った人はたいてい戦死。昭和20年3月、二日市の公会堂で徴兵検査で第一乙種。5月末、現場召集。引っぱられて1万6千人、あいのうて佐世保海兵団に入った。針尾、7月入団式。1ヶ月半の新兵教育が終了、そしたら8月15日だった。それで一緒に終了。腕、胸に二等水兵の徽章、でも何にもないですよ。終戦と同時に一等兵になった。とうぐわ、大根鋤いて帰ってきた。まだおるうちにアメリカの兵隊、低う飛んでくる。びっくりした。

桑河内では、いいさん、もりみつさん、かのうさん、としおさん。四人が戦死。としおさんは朝鮮にいて兵隊に。戦争未亡人は大野にいる。大蔵さん。戦死の家、兵隊の家、農作業を手伝って、面倒をみたり、勤労奉仕。小学校五、六年、六年頃からは女子の手伝い。戦死ではないけど、満州から命からがら引き上げた人も何人もいる。

死んだ大蔵さんやそうじさん、銃剣術で郡の大会に出た。悪さもしている。

私たちのころは夜ばいといっても草履持ち、下駄持ちでついて行かされただけ。亡くなられたけど、東小河内、県会議員のYさんが、88歳の祝い、青年頃から悪さ、口もうまい、夜ばいの話をよくされた。

川東と川西、運動会の綱引きをしておったよ。

ロクロ師

網取でロクロ師をしていた人はよその人で、網取の人ではない。お宮の下にうちがあって、水車があった。めずらしいから見に行った。ロクロの水車。N・八十吉さんという。おとななら炭焼きの山でロクロ木を分けておく。(残しておいて)「こりゃ、八十吉さんどこ、もってきやよかね」、こどもならロクロ木を持って行けば羊糞をくれた。卸にいて中州まで行ってバクチうちよんかった。えづかった(怖かった)。ロクロ細工する。石を持ってなんべんもいたずら。学校まで八十吉さんが追いかけてきて、「この石を投げたもんは出てこい」。いま孫は不入道にいる。

シンキョウさん

ここがシンキョウさんの宿だった。西新から琵琶もってござった。シンキョウさんの来よらしたままのお札、残してある。家は改造したけん、お荒神さん、くど、その上にエビの太か。



Pho. III 3-2-1 桑河内：聞き取り調査



Pho. III 3-2-2 桑河内風景

荒神さんの寝場所はカマドの上。煙で真っ黒なつて強い。一回来たら桑河内全部回る。年に四回、ほかのところは二回。しき祭り、たびたびござった。網取はいまの区長さんが宿、いっぺんきて 2、3 泊する。庭に台をおいて、あとは土間。おぼんに一升なんていわん。米を荒神さんにあげとる。それを引いてく。ふつうのお礼はいくらか払うけど、(ほかに) 荒神さんに(奉穀)。袋はこんなにふくれてる。ぎゅっと抱(だか)いて、担いでいく。こうもり傘持って。10 軒も回れば 1 俵になる(60 キロ)。歩いていって、途中の非農家で米を売っていく。荒神さんは火の神様。

平野シンキョウ、その親父さんが目の見えんやった。そいで座頭さんていった。シンキョウさんにザトウさんていうと、腹かいた(目が見えるから)。すぐ(メモ不十分)とわらは半分、竹ば立てて。御幣切ってからそれ隠す。竹も切ってしのき竹。縄のうたり(縄なったり)、わらと幣紙と竹を用意、こっこつ、くわ、ぱっとうちがえてくさ、さーっと切る。くどの前。ねぶりかぶって(目をつむって)宙で引く。

子供がついて行った。おしろダコ、たんでダコをした。

こうじん坊さん、位はよかった。琵琶のベンベン、上手やっただって、母親から聞いている。年取って子供が 1 回か 2 回きたけど、金は(?) 全然(ちがう)一。うちの父親がその人、シンキョウさんと同じ年、終戦のとし、41 で死んだ。山惣代しとった。若かった。

iii. 東小河内 〈2002(平成 14 年) 9 月 16 日取材〉

地名(しこな)

オオバル(大原)、サガシノ、竹の屋敷、カメノオ、ミヤデン、カメヤグチ
ナガウエ(ナガムネ)、イタチガワ、クロイシノタニ、マルクマの谷、シンミチ(新道)、
チゴトシ(水番のおまんさん、稚児をここにおいて行った)、レンキチブチ
ネコトウゲ、ガラサン

地名について

地名は土地台帳に記載される小字(正式地名)と文字化はされていないしこな・通称地名があった。

ここがヒガシオガワチ(東小河内)、ここがオオバル(大原)、納骨堂がある。それから上、サガシノ、竹の屋敷、カメノオ。ところの名であって、オオバルの一番とかいう(*台帳に載っていて地番がついた地名である)。ミヤデンとかはしこな(*通称)ですたいね。しこなを使うのは家族ぐらい。むかしは田。お宮の田、竹ノ屋敷にも(別の)ミヤデンがある。カメヤグチも田が 1 反ぐらいある。

一番上(北側)、ナガウエ、ナガムネかもしれない。つぎの谷はイタチガワ。サガシノから飲料水を取る。ダムができた昭和 52 年、ダムから新規に水道ができた。

(ダム以前も以後も)サガシノからも取るとは取ったです。十分ではない。水槽も新規。

クロイシはダムの下、少し田がある。何枚か水路の上にもある。イタチゴウは谷の名前は地

図には載っていないけど、何かで（文字でも）見たと思う。ケンメンは竹屋敷のうち。

ウラヤマって竹の子掘って、コウネ（*尾根をコウネという）。「家の上」から取ってくる。ウラヤマと家の上は別の場所。マエは家の前、前田とか。

あっちこっち名前はもつとるよ、場所を知らせるためのしこ名。

小川内水路と芝取り場、区役

——用水は村を貫通していたが、下流部では不足がちだった。

水路が 2 キロある。オガワチ水路、もとは一、二反かかりさえすりゃー川へ落ちる。水路自体は明治時代からある。（けど、よい）水路がなかった。

——庄屋だった家を中心となって水路を整備した。

サラサン畑っていいますがね、サラ吉っていう人の畑、その人は庄屋さん、五ヶ山部落の庄屋、五ヶ山中から人が寄ったと聞きましたかね。明治大正ではすぼり（素掘り）、どんどん水が漏る。赤土水路は漏らん。ガラガラ石（を通過するところ）が漏る。毎年やり換え。穴のほぐるですよ。芝を貼る。鍬の先で、打（うつ）とですよ。打って、泥と一緒に貼り付ける。石を入れといて泥、芝でふさいだ。足でよう踏まえとく。芝と泥、そげん強くはなかるうけど、漏水は防げる。

——水路維持のための土地もあつたし、区役も多くあつた。

山側は井手から下 10 ～ 20 メートルは共有の土地。芝うち床。（井手を）修理するための芝（をとる）、ノンナカ（草藪）にしとつた。上（の方）は秣野にする。だれがうちおといてもいいように、芝生をとるため。個人（有地）ではむやみに立ち入れないから。だんだんせんごとなった。

芝うち床はあとでコンクリーに改修したとき、12 軒に割って、分けあつた。だからいまは個人分（*共有地から民有地に変わった）。

10 日くらいは区役ってありました。水路の区役、学校卒業したもんと、うちにおるもん、一軒から二人、三人。それじゃあ、やおいかん。

大井手そのものはシバノではいかんわけ、周囲から竹の長いとを切ってきましょう。しがらみ、杭木（くき）を立てる。網のごと、しょうけ編んだごととして、竹とか柳の木とか、曲がるような木は切って井手を堰くのを使う。個人も自分の土地のこまい木は切ってもらった方がいいわけ。赤土は、もってこいといわれたら担いでいく。

井手はびっしゃりは、とまらんです。横からビュービュー漏ります。60 年ばかり前、井手堰を修理、ダムのできたとき、やりかえて今はコンクリ。

その前は、大水のくれば、流れる。また修理、2 回も 3 回も。水の足らんといったら（いわれたら）、石を持ちかけて貼っていく。年によってちがう。雨の多い年に井堰は流れる。雨の少ないとき石を置いて川を堰き止める。雨の降る年は、ありゃーされん。流される（その都度直す）。

ちびちびの区役は 1 軒からひとり。苗代前の大仕事は男のおるしこ、全員がでる。田植え前、区役、植えてからも 2 ～ 3 回、入れ区役。下の方は早魃、今年（は特に）、雨が降らない。年三回・四回区役があつた。

止めさえすりゃ、水は十分あつたけど、漏れ水がある。下、大原にまで下って行くと、水はいかほどもない。手入れさえすりゃー水はあつたから、上から順に田植え。部落の規約で決め

てはないが、上から順が決まり。どうしても田は白なって、こりゃー全滅しよるぜ、お互い隣組、譲りおうたろうけれど、いままでそげん早魃はありません。手入れさえすりゃ水はある。大川から取るから手はいるけど、水不足はなかった。早魃したほうが米はよけいに取れる。早うも育つし、大きなる。早魃ほど満作。曇りの多い、雨の多い年は、稲は良くない。

道水路改良

道と水路さえありゃくらせる。けどこれがあるから難儀する。何とかせにゃいかん。この前の道が里道、30歳ぐらいの時、50年ばかり前、改修をした。一番の発起人は築地幸四郎（こうじろう）、わたしの先祖、60ぐらいで亡くなった。水路と道をよう（良く）なさんと、この村はようならん。水路と道、昭和時代になりゃ補助金が出る。それをもらって1,000メートルないか、改修した。幸四郎は村会議員、そのひとが話の発端、道は上がり下がりしてウサギの道みたいな道、その道をよくしていった。お宮（の土地）は国のもの（国有地）、何筆もあった。そのお宮に木のたつとるのを切って開墾して田んぼ、一軒・一二軒、家の前の道が昔の道、里道。借金して道作り。補助はあった。半分は払わしゃんか。水路は水路で借金。利の分、金利を四、五年払いよった。足らん分、上の山、37万円で売って借金が終わった。

これがいつペン目の改修、位置は同じでコンクリーにした。2へん目の改修はダムの時。背振は上水専用のダム。けど、この村に水利権がある。どうしてもせにゃならん。ダムの補償で三面側溝にした。手打ちの方が安い。（既設のコンクリ溝を）いけただけではダメ。継ぎ目の処置もある。

水路が谷川を横断するところは漏る。尾はほりこみだから漏らん。マルクマの谷、シモノ谷一。

新道は昭和になってからの道。前にも曲がり曲がりの道はあった。

水不足で（クロイシに）池があった。20町歩の共有林、その中に私の畑があった。村の中に換えてくれんか。換えたけど、造林し切らん。いまは鯉を活かしてある。遊び場さ。田はあるが、3〜4枚。

宮田

一番下にお宮、むかしお宮があったが今は田になってしまっている。お宮の田、宮田（ミヤデン）、1反ぐらいある。道路、水路の改修で村が借金、それを返すため、ミヤデンを売った。それはうちが買った。前にもっちゃった人の名前。それでうちではしこ名でミヤデンっていう。水路や道路に金がいる。何とかしてこりゃ収入が、なからにゃいかん、毎年貯金しながら一。

ミヤデンを売ったりしても、まだ水路の修理に金が足りん。毎年やり換え、年によっちゃあ二回も三回も。

むかしは水不足、脊振ダムが昭和45年着工、52年完工。人家はなかった、脊振ダムでは家は浸かっちゃおらん。板屋の人の田と、開拓の人、どかしてダム。（そこは）板屋の主力の田だった。

水田

お宮の前にもひとつ、堰がある。こっちはさがしい。向こう（佐賀）は谷が深い。こっちは下が岩盤でけわしく育ちも悪い。農作物になれば天気が左右する。むこうは午後は日陰、作物はこっちがよい。現在でも米の反あたり1俵か、半俵半もちがう。こっちは6俵、むこうは5俵いかんぐらいでしょう。五ヶ山は田は1軒1町、むかしは4俵かそれくらい。1町で40俵、4斗俵で16石、6〜7人家族の飯米で（自家用）10俵残す（30俵を売る）。戦前麦

も作りましたもんねえ。大体自作農。田は大体平均していたが、山は持ち主の差別があった。多い人で10町、少ない人は1町以下。

県境・その1、鞍結びほか

佐賀県側（小川内、西小川内）に行き来する事は多かった。この橋が900円ぐらいかかった。昭和——、50年前、そのころ橋を架けた。その前は飛び石っていうですね、行き来が多い。五ヶ山より（も）小川内を頼りにしていた。むこう（小川内）は有力な親方がいた。

うちのじいさん、三軒上の家からの分かれ。いのししがりとか遊ぶことの大将。明治18年が親父、その前の代。もたんやっつらうね、米一俵の余裕はなかった。

佐賀県は山が多い村、田はたいしたことはないけれど、山の木を1反売れば、一年は使い銭があった。生活された。むこうはそれで生活がよかった。（こちらは米の1俵も無い生活）。高利貸しのようなこともしよった。たとえば、くらさぎ、牛馬に負うする鞍ですたい。鞍に藁なんかをつめておく。新しいうちは中がはっている。だんだん牛の体に当たる。鞍は3年にいっぺん換える。古いままだと体裁も悪い。見栄もある。鞍を作ることは鞍イイ（結い）という。ちょっとかるわせてみにゃーいかん、ペターっと五体になじむごと、こまかく調整する。具合を見る時、積み荷の米を佐賀県側から借りた。一回ぐりーっと、荷を積んで回ってみる。大野がっさに回ってきたら、それで1升の借り賃をとりに来よった。訓練用に廻るだけで。

そういう生活、わたしもたいてい大きくなって、親しうなって、近うした人だけど、親父さん、背広着て田んぼへ行く。すっかき（鋤カキ）、水見（調節）に背広。（そういう口実で）わたしがどげな仕事してくるか、見に来た。ドレイのようなことして佐賀県の人に仕えた。

三代すりゃ一家も代わる。庄屋の家、こっちはもう絶えた。町あたりの太い庄屋とはちがう。鞍を作るときは鞍イイさんにこういう風に使います、といえはそれにそって作ってくれる。牛も馬も同じ。積み荷、鞍の斤目の重たければ丈夫に作らないといけない。うんとは乗せんなら、軽く。斤でいえは500斤とか（1斤は160匁で600グラムに当たる、500斤は30kg）。貫目とはいわなかった。

路引き（ろびき、どびき）する鞍はまた違う。鞍はこもうしていい。胸で引く（路引き用の鞍は胸にかかる）。前を丈夫にしてある。引き緒を二つ、まんなかに肘木、曲がった木。カンを木の真ん中に打つ。その前にチェーン。五体にかかるように引く。10年くらい、路曳き、馬車引きをした。

木馬

シュラ（シラ、修羅）はそりの事。そりのように作る。全体をキンマ（木馬）という。木のつきしろが少ないとよく滑っていく（枕木とそのうえの横木の接触面が少ないと、滑るという意味）。少しずつ道を作りながら。キンマ道は橋のようにかける。汽車みたいに道に枕木をおいて。レールが下で枕木が上になるところがちがう。枕木のレール、レールがキンマ道。二間、4メートル20センチずつ。9間にきる。谷の上を運ぶ時は柱を立てて、その上を運ぶ。二本接いで支柱のごと、谷の上なんか、こわいとこも掛ける。杉の裏木、こまいところ、横木はこまい。枕木。路地につかんから（横木は）軽かですよ（軽い方がよい）。枕木は金釘が打ってあります。山が終わったら持って帰る。横木は捨てても、枕木は使う。運び出すためのレールは末代もんですよ、山が閉まるまで。キンマ道がついていれば、その山を売らんか、と行って

来る人もあった。キンマ道があるという事は山に付加価値がつくという事。

キンマ道は、はしごの段をわたっていく。馬や牛では引かれん。人間が肩にかけて揺さぶりながら、さがしいところ、急なところ、厚いぼろ切れ、つるつると 3 回巻き付けて、(てこで) ゆるめてブレーキにする。終わったら次の人がまたする。どんなさがしい所でもくるです。

わたしも加勢に行ったことがある。すーしこずつ、次々に作っていく。千石っていいよったように、大きからにゃあわん。山が大きいと出し賃がかかる。簡単に出来るようにすることが大事。

亀の尾もダムに降りる方は民有林、キンマ道もあった。道もつくつとうけん、山も高こう買うから。そういう計画、第三者は崩してしまう。その分の道があれば安く買う。

檜の木が堅いけん、油をかけて、引きよりましたね。杉でん摩擦すれば減る(柔らかい杉は早く消耗する)。

切畑(山焼き)

むかしはソバって作りよった。山焼きにした。切畑っていわっしゃった。木を切ったあと、畑を作るのが切畑、焼くのが山焼き、わたしの代ではソバも作るし、むかしは焼いた後に大根。はっぱ、虫もつかんし。種をパラパラ。土と混ぜくりあう。新規のところはわりかた虫がおらん。まくとも大根、ゴボウ。うちぶつといて木の枝で混ぜくってやる。よう生えます。間引きはする。しかしそれほど手がいらぬ。木を切った後の根払いも、焼いてしまえば、片付いてしまう。

村の変化

元は 22 軒、今は 10 軒。百姓やめて炭坑、筑豊や長崎の炭坑に出ていった。職業軍人、兵隊になる。炭坑に行く、先生になる。残ったものはフータ息子だけ。わたしの里、この上 4 軒目、長崎商業の先生で出ていった。息子の代になって、村に残っていたもの、何もかも売った。親戚の残ったものが田や山をもらうのがふつう。そのいえは村には何もない。

川と生活

チゴ落としは県境に井堰がある。オマンが滝、蛤水道って佐賀県に行く水道。水(みず)飢饉にチゴを捨てといて水番に行かっしゃったって、西小川内の人から聞きましたわ。

大野橋(おおのばし)の下にレンキチ淵(ぶち)。合流点、連吉さん、一番上のじい。チゴ落としは岩は低い。レンキチ淵は飛び込み、やおいかん。橋の架かる前、飛び石、その上が小学校 4 - 5 年の時の遊び場。

木の箱の底にガラスをはめて、ろうそくを垂らしてぐるり。一時はもちよった(水もすぐには漏らない)。上からみえた。魚がじっとしとる。ひっかけばり、竹の一ヒロの先につっかけ、ひっぱると、ひもが付いている。針だけ抜ける。

ドンボウ、イシモチ、ハヤ、ヤマブチバヤ。イシモチは石の中に下に付いている。エノハは早いけん、とれる(とりにくい?)。むかしはおったそうですよ。

山の生き物

冬はカッチュウワナ。壁しましようが(まわりに壁)、中にえさ、やっというて、はね木、えさを採りに入ろうとして踏むと、こーまい落とし、チンチロが外れる。かちやんと落ちてクビが挟まる。たまに足をはさむ。カッチュウヒヨドリはわたしたちの小遣い。10 銭ぐらい。帳

面の替わりよったですよ (新しいノートが買えた?)。山に 20 も 30 もかける。日に一羽、とれたら学校へ行く時の小遣い、店のひと、(子供から) こう (買う) といて、また売りはった。店のひとは不入道あたりのひと。学校は南畑小学校、6 年生までは分校 (五ヶ山分校)、高等小学校は不入道まで、2 里半、2 時間はかかる。学校から帰ったら勉強どころかワナ見て回る。ワナ道って道がついとったですよ。シバはわいとったら (掃わいておけば)、どうしたもんか、えさの多いと思ってよってくる。すぐかかる。もようて (催うて、共同で) ワナをかけて当番で見よった。ほんつぐみのみが黄ない実、こしばの実とか赤いもん一。

茅山と山焼き

尾まで茅山、杉山、松山があった。竹山はない。竹の屋敷も草切りと茅山。冬にふちを 5 メートルくらい切っておく (防火帯を周りに作っておく)。焼く時は男も女も出て焼く。切るときは男だけ (が出る)。上から順々に焼いていく。飛び火 (失火延焼) もあった。何年かにいっぺん。民有林が焼けた。ヨコの山。失火しても罰金は払わん。口の断り、「粗相したけん、こらえてつか一さい」(口頭で謝罪する)。急に風の方向が変わる。反対から吹いたら人手不足、ちょっと残とったたら (草が残っていると、完全な防火帯にならずに) あぶない。フチの焼きようが少なかったということはあまりない。少しずつなら危ないことはない。下からぼーっと燃やす。すると上だけ燃えて芯が残る。上からゆっくり焼いて、いい草とか茅ができる。

茅きりの講があった。氏神様、市ノ瀬に合幣 (合併)、日吉神社。今も社地はある。

(講は家数が決まっていた) 分家や他から入ってきた家は茅きり講に入る時、加入金を払って入る。20 万とか 30 万ださんと共有林とかの権利は得られない。20 町からの財産、無償でかたることはクサ、できん。八女からきたひと、かたしてくれ。断った。区にはかたっている。行事にはかたっていない (引っ越してきた人は区の構成員にはなれるが、財産区の構成員にはなれない)。

近くの山、ウラヤマはたきぎ山、あんた方の焚きもん、焼くついでやあ、24 戸、助け合う。1 軒のたきぎはしれたもの。

うるしはみない。お茶はどこ切っても自然に、はゆる。背振千坊、納骨堂の裏、寺の裏という。石塔なんかありますよ。(ダムの) 補償ねらいで、よその人が買っている。

木炭

木炭は焼いた。炭焼きはナラ、クヌギ、カシ、うら木 (雑木)。杉は別、炭にはならん。やおうして、ぼうぼうして灰になってしまう。雑木はもつ。堅い方が火付きは悪いが長持ちする。

木炭山は亀の尾の国有林と民有地。木を買う。国有林は雑木を切ってあと造林する。木は払い下げるから、とってお前たち、根ざらいせよ。雑木だけは区にもらって、それをさらに競売にかけて炭焼き。大きく焼いていたのは雑餉ノ隈の渡邊鉄工所、そこの焼子になる人もいた。その人たちは今では良いくらし、木炭抱いて斤目もしかといわんなら (きちんと主張しないと)、1 俵いくら (むこうが値段を付けてしまう)。もうけは業者。I って佐賀に木炭業者。不入道の K、あちこちに土地を持っている。炭担いでもっていく。値段を決める。K のお婆あさん、酒をいっばいついでくる。いわば酒が賄賂、(酔ってしまって) 値段を値切られる。

炭焼いて、儲かったもんはおらん。三人の木炭組合評価委員が炭の値段を決める。評価委員の Z さんだけは儲かった。竈もつくらんで、国有林のあまり、うら木 (雑木) を焼くために人

が使って空いた竈を使って焼いた（人の焼いた後の窯について、人を雇って安く焼いていた）。金儲け、松は下の方は松ずみを焼いた（松炭は火力が強い）。Zさんが松を渡邊鉄工所に売った。最後は局長にまでなった。

物資の運搬

川流しはできない。岩や滝のあるところはダメ。材木が割れてしまう。木口（こぐち）をドスンとやったら、製材したときに割れる。

昭和20年より前、まえは佐賀橋まで。（それより上が）道のようになったとは22～23年、佐賀橋から下がトラック、上が馬車、馬車の入るところまでは路引き。さーっと下がってくるから、牛でも馬でも音で分かるとでしよう。一息で駆け下りる。牛も一生懸命。カンが足にくる（足に触れる）。くるっと横向きになる。路引きした牛は慣れている。五ヶ山でも路引きしたのはわたし一人ぐらいやろう。馬車引きもした。山から出して佐賀橋までいくら。馬車引きの方が良かった。この山全部を請け負った。大体二人で組んどったけど、3人のこともあった。組んだ人は西小川内、炭坑やめとらっしゃった人で路引きの経験者、わたしより10才ぐらい上の賢い働く人、戦後佐賀の平野の方の田んぼ、朝鮮の人が帰りまっしょう。その人から田をこうたりしたような人。

現金取りは炭焼き、炭焼きの手ご。日当は70銭か80銭。ほかは山行きの手ごぐらい。たまに道の修理。

県境・その2、ケンカなどの思い出

佐賀県との結婚はない。どうしてかなあ。身分の差がある。佐賀県は金持ち、商売上のつきあいがある。よかお客さんだったですよ。格差があったじゃろうと思いますわ。むこうは禅宗、こっちは真宗。

姉がもらわれて、養女でやってくれんかったのまれたけど、その話も成立せんかった。小川内は40何軒。学校が一丁あるぐらい大きい村。

こっちの学校は2里半先、歩いて2時間の不入道、同級生は男が一人、女が二人、一人は杉谷てるこ、看護婦になった。一人は佐賀県に行った。男一人はすぐ死んだ。

尋常小学校は近かったけど、むこう（佐賀）の高等小学校は遠かった。小川内から南畑小学校への越境はあった。こっちへ通うときは委託料とかいって、20銭とか25銭の月謝、ふつう



Pho. Ⅲ 3-3-1 東小河内：山神社



Pho. Ⅲ 3-3-2 国境石

のひとりよりあの人たちは10銭ぐらい多かった。(同級生だから)子供の頃はよか友達、ケンカもしましたもんねえ。けんかの宿、けんか大将、はじまりは一人、おればこなす、蹴ったりなんかする。5人も10人も集まってどっちも大きくなる。(決着を付けるため)あしたケンカする。こっちには五ヶ山から加勢、むこうは大野から加勢。石投げつけ合い。人数でどうしても負ける。向こうが強いもんじゃから、家の中に逃げて入って、障子を破られて親父に叱られた。

宗雲(そうぐも)ますみ、ケンカの強い人、大人になって一緒に区長、電話取り付けで天神まで行って、局長に土下座して頼んだ。秀太郎という局長に、山芋掘ってきて、山のおみやげです、どうぞ、とかいって。もう一人、杉谷巽(たつみ)もいた。ダム反対派。

電話は当時1軒14万の負担だった。半分お互いに利用ということで一緒に陳情した。町からは半分補助。電気自体は子供の頃からこーまい発電所。佐賀県ともようて(催うて)発電。大正の終わりにはあった。ダムができるうんと前、九電が水利権の買収、各戸の電気取り付け料は無料でやろう。電気代は払った。(発電の)水利権をやった。下はそのとき網取の山を売ったから共有林がない。

遊びには行った。たばこ店があつて、みどりさんというじょうもんさん(きれいな人)、お茶飲んだり。お祭りにはあんまり行きよらん。

青年

(佐賀県とは)結婚はなかったけど、夜這いは行った。ふたりでつるのうて行こうか。戸のきしきしいう家は小便かける。きしってだけいう。目的ははたさんなあ。少しも(成果は)なかった。追いたくられた。明るく日は秋の新竈づくりの忙しいとき。牛馬に喰わするえさは、明るく日までに掘っておかにならん。にぐるクサ(逃げるとき)、芋も盗んだ。(むこうが)起きらっしゃったら、芋ののう(なく)なるとる。

五ヶ山では村の中ではカキ泥棒ぐらい。青年宿で年功の人が「きょうは柿ばもいでこい」、トナワ(10縄)ぐらい軒下の柿を取ってくる。「うちんとに似たるごたるねえ」、うちんとこ(命令した先輩の家)の柿とってきたって。

柿を連で数えることは知らない。1縄、かたっぽう10ずつで20。買いにきよったです。

青年のときは奉納相撲、日吉神社の相撲大会、桑の河内はお観音様の広い。相撲の稽古。鬼塚先生が向上会で意見発表したこともある。宿は空き家を利用して、ないところはお観音様、お宮。冬でも泊まった。青年にかたったときは綿を1斤ずつ出す。(蒲団)一枚が抱えきらんくらい(大きくて)重い。しらみ、のみはおらんごとあつた。

兵隊は洗濯もせん。へこまで抜けて、のみ、虱。疲れとるけん、ねずみも多い。足を齧られてもおぼえんごと。

軍隊・戦死した弟

久留米の54自動車隊、輜重兵だった。軍隊に行く前から自動車に乗っていた。馬車挽きになそうか、自動車か。免許も兵隊に行く前から持っていた。自動車が入ってからは(山仕事も)楽だった。

軍隊は内地勤務。木炭車は班に2台、車。指揮班で中隊の指揮をとっていく。模範の隊。鹿児島、宮崎に行って終戦。

軍隊で叩かれるのは誰でもいっしょ。頭がいいとか、悪いとかは関係なし。老年兵の住友で

課長さんだった人が「ぼくがねえ」、「キサマジィ、ぼくとは何か！」ぴしゃーんと叩かれる。巻脚絆、ぽーんとあけといて崩れたら、「当番以外は練兵場一周」。夏の暑いとき、そこにたまっとる水、ぎゅうぎゅうのんだるですよ。

軍隊は大工も左官もしょうけ屋もおる。何でもできます。小隊に一人か二人の脱走兵、すぐつかまえられる。自殺の危険があるから金具類、ボタンは取られる。ベルトもない。地方の監獄に入れられる。入れ墨の人なんかはかえっておとなしい。

同士討ちは多い。うらまれるもんは多い。戦地に行ったら、あれば一番に殺せ。突撃の時撃ってもわからん。戦死として届け出る。人間もいよいよ鍛われるとこうなる。

戦争中の見送りたいものだった。1日前に(今の)ダムの辺まで見送り。入営時間の8時か9時までに届くように前の日から。わたしの弟、海軍。20才で、特攻で死んだ。村の人はかわいがってくれる。特攻で死んだといえ、取り入れにも加勢。臼杵としお、わたしの友達も特攻死。

網取、城のあったとき、お姫様が一の岳城におらしゃった。納骨堂の改葬の時、掘りに行った。(お姫さま墓地から)この箱を持ってきている。あけてみたが砂しかなかった。お神棚にあげといた。豊臣時代の鏡はありますよ。シナ事変の金の法被、赤くて後(うしろ)に金の字がある。

iv. 大野 (2002 (平成14年) 9月17日取材)

台帳に記載された字名

大野 (うーの)

倉谷

茅床：かつては共有地で20町の原野に茅床が1反あった。3日ぐらいかけて野焼きが行われた。「わちぎり」といって、山の頂上から10mくらい、延焼を防ぐため、あらかじめ焼いておく。防火用にバケツに水を入れ、ポンプを用意する。

——ノ(野)ばっかり、ワラビ・ゼンマイ、花はオミナエシ・キキョウ・センブリ、きのこはアカナバ、ナメコみただけど味は悪かった。ノグリは笹栗、20町歩ぐらい持ってましたもんねえ。ノは焼きおった。ワチギリで先切るとですよ。大火事にならんごと。

ここの秣は牛の飼料、肥料は2〜3月頃、麦田に入れた。麦は小麦(うどん用)と裸麦で、米7に裸麦3ぐらいの割合で混ぜて食べた。

——牛のクサ、田に枯らしといて、マヤゴエもあるし、そのまま2月から3月、麦田の上に広げていく。

井柳：イヤナギ、ダム事務所の上。

七曲：ダム事務所の上。

水川：墓がある。

中尾：お宮の上。

高村：お宮からずっと上がって行った所。

宮の内：高村の少し手前。

白土：川の向こう。しらつち

しこ名

びくんだに（びくにだに・比丘尼谷） 茅切り床。茅床の共有原野で、国有林の手前の 1 反（国有境まで山で 1 反）。ここの茅を使って 1 年に 1 軒ずつ「手間がえ」で茅を葺く。そこがびくんだん。金鉱があつて小規模に採掘された時期があつた。いまも縦坑が残っている（後述）。
おろしぎ 田があつたが、今は杉林になっている。田の形はしている。わたしとトシエさんとイクオさんが作った。

ねこじょう（猫城） 上は立派なひらた。つつじがきれいで、お籠りは 5 月 11 日。弁才天お籠りをする。背振の頂上がべざいてん、女の神様。

みやのさき 1 反、田があつたが、杉林になっている。

なかおじり・ながおじり 高村峠の下に田があつて、たえちゃんが作っていた。現在は栗が植えられている。ここから高村峠、むかしオイヅカさんの家があつた。やっぱり百姓だけど、学校の先生、五ヶ山小の校長先生だった。3 m くらいで峠。

ささでーら（笹平） 区の草きり場がある。入札して草切りを決める。オイヅカ先生に草切り床を売った。そこからずーっと行くと九千部に行かれるですよ。

たかむらがわ カシ・ナラ・クヌギ等の炭焼きを、国有林内で九千部の上まで行っていた。ささでーらからリアカーを引いて川の横を通って炭焼場に行っていた。そこから九千部は近かった。現ダム事務所は木炭組合倉庫の跡地である。

しおいば（お汐井場） 馬を洗う。馬の方が足は速いが、部落の人は牛の方が使い慣れていた。競犁会があつた。父親が戦地から馬を連れ帰ったため、馬を使っていた家もあつた。

いまじょーだん 谷筋

ちゃやのまえ（茶屋の前） 井手がある。七曲峠（綾部峠）に至る道沿いに茶屋があつたのであろう。飛び石があつた。右岸。こうくぼうより上。

こうくぼう・こうくぼ イヤナギ井手がある。コウクボの池があつた。右岸。川（河）はコウと発音するので、おそらくコウクボ・川久保であろう。

倉谷は昔も今も 9 軒だけでずーっときている。増えもせず、減りもせず。むかしはまだ家数はあつて、ここ（ダム事務所）をウメさん屋敷という。ほとんどが築地姓。

お宮は日吉神社、9 軒で守り、（戸数が少ないから）1 年 1 年じゃ参ってしまう。一年に一回くじ引きをする。その年の当番を決める。前年につとめた人をのぞいて 8 人の名前を書いて小さな木の箱に入れる。穴、ほがいとるから、一枚、ぽろりと出てくる。翌年の当番が決まる。大役、いわんなあ。（とにかく）たいへん。お宮の守り、一年中の行事、掃除、はわく、草切る、榊を神様にあげる。神様は大山祇の尊じゃないかな。戦時中に市ノ瀬に合併、南畑ぢゅう（南畑村全部の神社が合祀された）。忘れ物があつて、持って行くつもりだったカップン、神主の靴の片方、それがご神体だった（合祀の時に忘れた靴が神体代わり）。寺は無い。

集落の南の方には坂本峠が、南東には七曲峠がある。坂本峠は郵便配達で東脊振からやって

くる。佐賀県との境は地図上では峠上だが、実際は少しズレており、正確には送電線と峠が一致するという。ここから一番地がはじまる。七曲峠はより狭く、かつて村の人々はここを通過して綾部八幡様（風の神様）にお札をもらいに行っていた。

集落の東の方には林道が通っているが、九千部の頂上にはとどかず、途切れている。昔は徒歩（カチ）道が原野の中や尾道にあった。

峠を行き来する人々

——隔絶された山村のようだが、峠を越えて村人は行商にも行く。

わさびだん、国有林の谷を税金出して軒別に谷を割り当て、9つ（9区を入札した）。佐賀を越えて、女がしょうて（背負って）、ワラで作ったフゴ入れてから、うちの家内も中原まで楽に売りに行った。

「わさびでござっしょう」。

束にして葉っぱにして、葉っぱだけ、売りに行く。福岡はあんまり食べん、中原、神崎、鳥栖が売れる。泥棒が根ごと持って行く。ちょこっとなが、なかもんね。根から取っていけば、なくなるわなあ。（育ちは）あんまり日陰でもいかん。

炭も出した。中原・綾部へ行くときは、峠までまえの晩に何俵か担ぎ上げといて、1俵15キロ、下りは2俵でもしよえるから。帰りがけ、イカの塩からとかと換えて。

彼岸の中日が風の神様（綾部神社）のフリュウ、歩んでから行ったけど、帰りがやおいかん。——逆に峠を越えてさまざまな人も訪れ、通過していった。

こまか時、どじょう売りがきよった。タニシも売りに来た。3月の節句頃、皮を剥いてある。

田植えの時は鳥栖の朝日町、ぜにとりて手伝い、植えに来よった。雇いよったもん。一丁とか田が多かった（から）。六反でも雇った。ごっつおう（ご馳走）、車代、いたれりつくせり、田植えは六反で三日かかる。加勢は（当てにしていた）親戚の遅れたり具合の悪かったりすることがある。金取りに行ったことはない（自分たちが他の村へアルバイトに行ったことはない）。石屋は早良からうちに三人ぐらい来た。川端、河川の石垣。何日も泊まり込み。田の石垣はここにはない。桑河内にちょっと。

盲僧琵琶・しんきょうさん

西新町（福岡市の中心街）から1年にいっぺんしんきょうさんがきて荒神さんを祭る（川崎真教氏と思われる）。琵琶を持ってひいた。のちには鈴だった。大野、泊まるところに帽子を掛けとく。中折りで羅紗。天気が良くてもコウモリ傘。「しんきょうさんのくるけん、雨が降る」といった。しんきょうさんは目は見えて、親父さんが悪かった（盲僧、親子で引き継いだ）。坊主の位は高かった。

しんきょうさんが来る日、うちのばあさんも、ほとめきおった。あのやかましか、うちのじいさんも一歩譲っていた。土間にごさを敷いてお経。（カマドの）火の神様、台所の神様。じいさんたちも横座。あとでお礼に米をやった。荒神さんはたいせつにする。迷信ぶかい人はなんでも関連づける。火事が出たこともあったから。

箕の修理、肥（こえ）たごの修理はやってきた。どこからやってきたか。ゼンモンでは、よういった。うちはたいがい泊めたけど、ゼンモンは泊めたことはない。お宮かなんかに泊まったろう。畳屋は泊めていた。立派なもんを作るけん。ばあさんは親切なひとだった。巡礼途

中の旅のひと、いまいうハンセン病、「ライ」の夫婦も泊めたことがあった。やかましかじいさんが泊めてやった。信心ではなかるう。宿代なんかは、もらわなかった。店ではないから。豆腐も作れば餛も出す。ひとのよう、泊まった。ばあさん、学校の先生って(先生だといわれて)泊めてからくさ、ほとめてご馳走。明くる日バスに乗る銭ももたん。(そのあと、その人物が)網取でも、だまくらかいてから。

肥前からはドジョウやタニシを売る業者が来た。川の石垣が崩れた時は早良(福岡市西区)の業者が来た。

炭

炭焼き、しよったですよ、リヤカーで引いて、ここ(ダム事務所)が木炭倉庫のあった所。新竈作るのはいまごろ(9月)、稲刈りの始まりか、終わる頃、おやじは竈づくり、あらかた仕舞えたら、残っているのは子供ばかり。子供が稲刈り。かし、なら、くぬぎ。世話人は地元の人、国有林(営林署)はタッチせんですよ。買った分、小分け。だいたい(境界は)分けてある。境だけ、切っていく。何合、1合から15合。1町歩、3町歩、五ヶ山50軒から山総代、投票して100林班を分ける。切れんとは印(入札区界の目印)をつける、目印に皮ば削る。

タカムラ山、アミトリ山。雑木山、国有林からの払い下げの値段と、個人への払い下げ価格に差額がある。その差額が区の財産になる。その財産がいまだに五ヶ山にある。入札、毎年、札を入れる。(そこを落札した場合)百俵できるか、できんか。ちょっと、もういつぺん、考えよう。一出し(ひとだし)でふつう80俵、90俵はできる。1俵は15キロ。カシの一番良ければ高い。米のダンじゃない、炭で食うとる(米より炭の方がずっと収入になる)。

田は平均6反、反当5〜6俵。いまは8〜9俵、1俵4斗の玄米、60キロで1万5千円が、政府の買い取り価格、個人で売れば高く売れるが(反当6俵で6反なら年間54万円の収入しかない)。

切畑(焼き畑)

切畑まきはうちのじいさんのころ、あずき、どーんとうちぶつといて。スイカ、カラスの食うてから。床焼きすれば草はあんまり生えん。バーさんがソバも作った。白い花、三角の実。昭和30年近く、中学卒業した頃。

牛と馬

昔は牛が活躍していた。おろしぎも宮ノ先も牛で行きおった。歩いていく。牛に鞍をつけ、梯子のごたるつけよったなあ。「テーキ」(梯子状の「テーキ」は荷用の専用鞍)をつけて、荷物を「いなわせ」(背負わせ)たりたり、クビキをクビからひっかけて田で働かせたりした。牛を右に動かすときには「しえい」、左は「しゃし(さし)」、前へは舌打ちして「チェチェチェ、はいけっ!」まっすぐも、横も、牛がいうことさえ、ききゃー、行きますよ。バックはあんまりせん。

モッタテ犁を使うと牛はまっすぐ進む。馬力のよか(とても力が強い)。田に出してすぐは跳ぶように働く。鞍あぐるとが、一苦労、びんこ、びんこ、してるから(元気がよすぎて鞍もあげられない)。危険だった。1畝、2畝は元気、持っただけでひきずられる。あとはぐったり。1日使うと、動けへん。こういう時は犁で牛をたたく。晩方になると、(帰ろうとして)わが家の方へどンドン行こうとする。

田植えの時は昼めし、牛に先に食わせてやった。後で人間が食べる。飼料は草とワラとフスマを混ぜたもの。フスマは裸麦や大麦の米ぬか。高いけん（高価だから）、ちょっとでよか。裸麦はそれだけ煮てから食わせた。牛は5月（田植え作業）するときはやおいかん。栄養がいるから高い飼料を食わせた。それ以外遊ばせる時は草だけでいい。田の草だけでは足りん。田の草は小さい、ノ（野）から大きい草を刈ってくる。ワラやら干してから、牛の一年の兵糧にせなかん。堆肥作りがおおごと、まや（牛小屋）に草を敷いておき、牛に踏ませて堆肥をつくっていた。マヤはフンやワラがたくさんあって、こづんどくと、ほめく（発酵する）。わらを唐鋤で切ると屑になる。夜なべにバーさんが二人で切りよった。発酵させて、10、11月にたたく。なかにカブト虫の幼虫のいっぱいおるとですよ。いま堆肥がない。

オスのキンキリ牛は女性がエサをやると「ふぐり倒す」こともある。人間が負けたらつけこむ。いっぺん、えすかって逃げたら、角でついてくる。（こらしめのため）鼻繰りを高い木につり下げて、ぼたぼた、うっ叩く。コッテ牛はおそろして、使い切らん。胴引き（路引き）に使う。金（キン、鞆丸）を切ったのが金切り。金を切ってもコッテはコッテ。メスはウノウ牛、オスより足が速い。キンキリより高かった。肉が高いから（食肉としても高値で売れる）。太ったら（筑前だけど）「肥後牛」で売る、ばさら、もらった（値段が良い）。たかちゃんかたは、ウノウ牛にも胴引きをさせた。

盆前は親父も金のいる。5月以降この牛をまるまる太らかいて、磨いてバクリューさん（博労）に売り、お金を手にすることができた。お金は盆の費用になる。差額で仔牛を買う。子牛は鋤きやら知らん、左さも行かん、右さも行かん、止まりもしない。一から教え直し。すぐに覚えるけど。牛、足の爪の破れる。小さい牛沓、わらじをつける。それが履かんのや。蹴られる。前足は何とか履かせる。後ろ足は履かせるとき蹴られる。痛（いた）か。

馬は荒かけん、大野に一軒、みちえさんが戦争の時、五島から持ってきた。田んぼやら牛の倍を行く。競犁（きょうり）会があって、鋤く時間の早さを競った。馬洗いはお汐井場。場所のよかところはリヤカーでも行ける。

山の恵み

——国の方針で薪炭用の雑木から針葉樹への樹種転換が図られた。雑木の時にはさまざまな幸があった。

営林署は、造林させよう、ってなつたですよ。杉、檜にしたかった。山つきは栗、杉を植えた。減らかいて半分もない。自生するへらの木の皮を剥いで川につけ、繊維を取って蓑を作った。これにはワラや庭のシュロ（棕櫚）の木も混ぜる。

うーへらの木は、一回でおしまい、枯れはせんけど。漆っては、なかけん。カゴ（楮）もない。トリモチの木は自分でメジロを捕るのに使う。

シュロの皮は下の方から皮剥いで池の中で石で突く。繊維が取れる。それを業者に売っていた。蓑作ったりはワラじゃなく、シュロのはっぱ、山に自然にある。田植え綱にもする。田植え綱、シュロばかり。杵は5本植え、6本植えがある。地元の手の器用な業者。治七じいさんが作った。

ミツマタは栽培した。アセビの毒は、川に撒いて魚を気絶させる。椎の実、食べる、どんぐりは、食べん。クヌギは野焼きしたところ。しいたけのほだぎにした。3年くらいもつ。椎茸組合、

ローキャビンの上、プールにほだ木を 1 週間漬けて、水（から）あげる。水あげて、ナバ（椎茸）を植え付け。五箇山区のしいたけ組合があって、冬に出荷したが、借金だけやった。冬出した。個人で売買する人はいない。家庭用が主だった（採算がとれなくなったため、現在は家庭用のみ栽培している）。ホダギは 3 年もしたら、つまらんなた（使えません）。

川

大野橋の下がレンキチ淵。魚取りよった。テッポウつくって。リヤカーのホーク（スポーク）やすりで研いで。ゴムでパチッ。箱めがねは自分で作った。ロウソク垂らして、よう見えるもんな。水中めがねはなかった。高くて買いきらん。越中べこで。網取の学校の前、椎の木淵、八重桜淵、深かった。八目鰻がいる。いっとう深いのは石の上。レンキチ淵はつつこみした。エノハ、どんどん浮いてくる。ゲランて乾燥した根っこ。大根の虫を殺す。Kさん、T屋のおやじ、三人で。芋づるが毒を吸う。あれば川にしとったら、それより下は死なんげな。雇うている石屋、何日も泊まりがけ。石屋さん、玄翁いっちょう、岩の上（叩く）。魚がビラビラうって浮いてくる。椎の木淵はえすーないけど、えすかったとはチゴ落とし。下まで潜るとはやおいかん。カップの話はこの辺はない。

川の魚はおかずにはしなかった（*忙しいから余り釣りはしなかったの意味と思われる）。エノハは焼いて、具合の悪か時（病気の時）、エノハの滋養の付く。味噌汁の薄うして飲んだ。西小河内からエノハ釣りの名人。朝から釣ってるところ、上から石を投げてじゃまをした。あこのころ 1 匹 50 銭。

薬・食用になる虫・動物

サルカケイゲってトゲがある。猫の爪のようなとげ、根に虫。クサギの木に似ている。それがリュウマチに効く。焼いて食えばカンの虫の薬、百葉丸。

おねしょに効くのはイタチの肉。中学生の頃から川端にずーっと、7 つぐらい、竹のワナを仕掛けて、アブランコ（アブラメ）がエサ。500 円か 600 円で売った。オスは美しかもん、メスやら銭にならんばい。子供だけん、だまされたかもしれんなあ（安値で買い取られた）。肉はおねしょの薬、親父はイタチ取り専門、炭縄の縄ない機械、イタチ売ってこうた。尻が臭い。イタチの最後っぺ。皮を剥くときに出る。

「犬はおねしょの薬にならないんですか」

西小川内の A さん、悪かった。アカイヌのおいしかって。泡のたつげなっていうが、たつとらんかった。たつたっぺんだけ（何の肉だったかわからないものを食べさせられた）。

うさぎはしょっちゅう、すき焼きにして食べた。おいしか、固くない、柔いですよ。専門にワナをかける人がいた。ウサギの皮、あれは売れめえ。皮むきは尻から空気入れて剥ける。

カラスは殺したのを吊しといて、身のあるのはちょこっと、臭いとじゃ。毛ばむしる時、剥いてしまったら臭くないけど、うまくない。狸の皮を張っているのを見た。

イノシシはこうくぼの池、梅の木、ワイヤーのワナを掛けとった。あらかいたな。ブーブーブーブーいうて、根ば引き抜いていた。ワイヤーは切れめいが。足にかかって死んどらん（ワイヤーは切れず、木が引っかかって逃げられない）。とうぐわが冬で直してある（片付けてある）、それを組み直して、離れて先さ行って 5 発ぐらい撃ったら死んだ。あんまり太うして、あげきらん。50 キロあった。冷とうなつてダニが出てくる。

金の採掘

——昔びくんだん（比丘尼谷）で金を掘っていた時期があった。分限者のおばあさんSさんが始めた。金山といっても手掘りの小規模なもので、人手は身内だけで間に合った。あとからも別の人が投資して井戸や水車を作ったが、けっきょく失敗。

あんたたちも知つとろう、水晶のある石。あとからだまされてこうてから。Kさんは静岡からきた。流れ者じゃろう。「んだもの」といったくさ。都合よう、養子に入られた。Sさんの婿。悪か人ではなかったけど、やおいかんねえ。仕事すかず。Sさんの家は女ばっかしの家、そっちのT・Yさんのおかあさんが長女、Sさんは一番末の娘だった。網取のこげん大きなマキの木の何本もあった（それほどの分限者だった）。大正の初め、Sさんの（金鉱を）始めたけど成功せず、少しぐらいは金（キン）の取れたろうが、採算の合わんかった。その養子の（が）、財産のうして（なくして）しもうた。

そのあとからもIさん、長崎のKさんたちが「金が出る」とだまされ、水車小屋を作って、長屋たてて井戸掘って。結局何も出てこなかった。Iさんは長女がわたしと同級生。Kさんはふとか電蓄を持っていた。うちのじいさんがくさ、やかましかって腹かいて、それからいっちょんこん。

いまでも縦坑がある。水のだんぶりしとろう。ビクンダンのちょこっと入ったとこ。ほんの道の横、現在も国有林のなかに堅穴が残っている。もし子供がメジロ捕りに行って、落ち込んだら、帰ってこられん。

よばいはむかしあつたげな。青年、戸の隙間、蚊帳吊っていたりする。ただ、いつてからじゃー、冗談で。干し柿、夜ばい、石垣のそうへいさんのえすかった（石垣惣平さんからさんざん叱られた）。学校（不入道）の下まで行った人がいる。「だれかー」って（いわれておしまい）。——小川内も大野も福岡県と佐賀県がある。佐賀県は向かい大野、「川向こうの大野」（佐賀県小川内）とは言葉も違い、交流は限られたものであった。

子供のころ、佐賀もんとは、よう喧嘩した。「向かい大野のおおべこ（べこはふんどしの意）はいて……♪」、おらびよったよ。あっちは言葉があらかもんなあ。長じてからは死んだりしたらお悔やみには行く。それだけのつきあいで、結婚だけはない、行きも来もせん。

——寺は脊振の三光寺か埋金の光蓮寺まで出てゆかなければならない。



Photo. Ⅲ 3-4-1 大野：聞き取り調査



Photo. Ⅲ 3-4-2 大野での聞き取り

三光寺、築地姓のものばっかし、檀家は少ない、五ヶ山でも五、六軒。もし祈祷・お尋ね事があれば発電所近くのエトウさん（大分県出身）か、太鼓をたたく「ばあさん」を訪ねる。祈祷師はおかみさんのごと、おたずね。ばあさん、コマさんやらに行きんしゃった。

「おとこし、おなごしはいましたか？」

Tさんが使いよった。住みついてから二人いて、一人は焼酎じいさん。酒飲みすぎてうちにきて小便まいて困った。さかい雲右衛門とか浪曲語り、いちゃもん入れとる。肩から背中から観音様の立派な彫りもん。芝居青年に芝居を教えて、それでお礼に焼酎って約束。それがちよっとくわんねえ。腕に「すみよのばか」って入れ墨で彫ってある。逃げた嫁御の名前がすみよ。流れてきて炭焼き使い。Tさん、よう使いきんなったなあ。

戦死者

うちのおやじはガ島で戦死、30歳、わたしは4歳のときだった。さっきから親父っていつてきたのは2番目の親父です。靖国には行ったけど、それよりもガ島、ガダルカナルに行きたい。50万（円）でいけるそう。いっしょにいくつもりの人、よかろうといていたけど、弱ってきて困っている。

V. 道十里 (2003 (平成15年) 3月18日取材)

地名

桜谷：大きな谷、九千部山まで行ける道がある、今排土で埋め立てられて、グリーンピア。

漆ヶ谷：桜谷と下部で合流、桜谷より小さい、ヨダチの手前から分かれる。上の方には小さい深田、水の溜まったごとあったね、田のつづきに墓があった。

ヒトツノ：丸くて低い山、今グリーンピアのなか、漆ヶ谷のほん、傍やったよ。

ナバダン

ヨダチ：ふさえさんかたの田んぼがあった。

タチクチナワ：漆が谷の入り口。高い岩が割れとう、なかに立口縄、たった蛇（クチナワ）がいるという、何度も覗いてみたが、いなかった。

オオヤシキ・コウザブロウサンヤシキ

ハンノダン

中尾橋

オクノノ

大坂

セグチ

前田：大きな田で4反の田があった。

キタゴウ：北川の意か、やすさんの実家の屋号。

やすさんは道十里の出身、南畑ダム、五ヶ山ダムと、自分の住んでいた家がダム建設のためになくなるという経験を、生涯に二度もした。

お宮と仏さま

網取橋のすぐそこに社があった。桑河内と道十里のもやいのお宮。もともとは桑河内の宮、かたしてもらった（水没するので地蔵や社をここに一緒にした）。石の鳥居がいまでもある。（お薬師さまと阿弥陀さま）

（見てもらった）地図の鳥居のマークは、神社ではなくお薬師さま。新暦の7月7日にお祭りがあって、地蔵の方は薬師さまのすぐ近くにあつて、7月24日がお祭だった。お経はあげなかったなあ。振る舞いは炭酸まんじゅう、ふくらかして。お煮染め、ちくわ、かまぼこ、肴作つてね。拝殿で。楽しかったね、あのころは。みんなで寄り合った。

御利益は何もなかったなあ、あの人は（お地蔵さんは楽しかったみんなの村の生活を守ってくれなかった）。

近くに阿弥陀さまがあった。いまダム水面に枯れた2本の木が突き出ている。阿弥陀さまのイチョウと呼ばれた。おんなイチョウと傍らのおとこイチョウ。もう少し上にお宮（阿弥陀さんの建物）。大イチョウ・おんなイチョウはたらちねイチョウ、乳房がさがりよりましたよ。乳のでない人が参った。福岡県天然記念物にもなった。小川内の佐賀県天然記念物のスギ（山神社）よりもさらに奥に、同じようなイチョウ（東光寺）があった。それを切った関係者、若い人が、かつがつ亡くなった。神社の木を切ると祟りがあるというのは、まんざらでもない話（詳細は『小川内誌』142ページ）。大きな木、特にお宮の木は切ったら障りがある。切ってもいかん、売ってもいかん。ダムに沈むことになっても、そのままにしておいた。十何人でまわす（10人以上の人でもかかえきれんくらい）、大きな木（今もダムの中に立ち枯れている）。

ダムの記録映画か何かで、ギナン（イチョウ）の木の周りで踊り、そのなかに元気な母がいた。涙がとまりませんでした。

（最澄と空海）

一番奥の木戸にあった祠。空海と最澄をお祭していた。どちらも石作りの像で、茶色くなって、空海のほうが立派だった。祠の家も立派なものだった。来た人が売ってくれ。父が売らん。グリーンピアのところに移築した。それが去年、戸を叩き破って盗まれてしまった。

わたしの家が一番向こう、実家の姓は築地。屋号はキタゴウ（キタガワ）。他の家の屋号はなかった。川の北側、下から徳永、山田はじめ、長野洋三郎、きたごう（やすさん実家、築地）、南側長野さんの向あたりに福富、上は早くからよそに行った家、あとで佐七さんが入った。その山側に薬師。

用水

サクラダニとキタゴウ（北川）の二つの水で道十里の田んぼをまかなった。憶えている田んぼは、一番したからナバダン、次がオオサカ、そしてセグチ、一番奥がオクノノという順にたんぼがあった。10枚くらいずつに名前がついていて、ひとつずつ堰があつて、水はそこでちよっと止めて流していた。みんな石垣をついていた。自分の里の山。

前田という、いい田んぼがあった。大きいとが4反。一枚の大きなよい田んぼだった。小さい方の田んぼがヨダチ。前田より登って、はるのだん（ハンノダン）、よだち、中尾橋のうえ。

漆ヶ谷の墓地改葬

ウルシガタン（漆が谷）には墓所があった。田んぼの堤のところ。ここにあたしのじいさん

がいけとった。掘りましたよ。ここ、ダムになりよりましたろう。そったら、おきな甕にねえ。コンクリの蓋をかぶせとったんです。そおたらねえ、掘ったらね、まだ、足やら、立派についって……爪から指から、まだじいさんが若いとき、見覚えのある足も手も立派に。頭は上の方やけん、くさっとった。水が浸かっとうしこ、(ほ) んつとに澄んだ水。そいを飲めば肺が治るっていう。今は飲まれん。んつとに澄んどりました。匂いはした。上は腐っとりまっしょうが。

——病気の薬で欲しがる人がいましたか？

いや。いない。足見て、ああこげんな足しとったねえ、って。立派な足。83かねえ。出したのはそのあと、火葬にして焼きなおした。明治35年、五十歳のときにうちの母が産まれましたから。元気な人だった。漆が谷の墓には、ばあさん、おじいさんと、お父さんの子供のマツって人。それとその前のじいさん、ばあさんがいかして(埋めて)あるっちゃったい、な？(おじいさん、うなづく)。あたしのひいじいさんとひいばあさん。5～6人。

古墓

それより前の先祖の墓はマエダの田んぼの上のほう。ダムの中になつとりますたいね。そこが古い墓。そこも改葬したが、そっちは全部泥ぼっかしだった。せいともう一つ、ナバダンの下に。3つお墓はありましたねえ。戒名は残ってない。石塔だけあった。サクラダニの墓には戒名があった。おじいさんの戒名はしらんばい。京都に参って戒名をいただくってしょうが。そしたら龍谷寺授与のなんとか、って戒名が書いてあった。龍谷セイ何とか…ちゃねえ。つまんない戒名じゃったなあ…。

ナバダンの墓が一番古い。その次がマエダ、一番新しいのがサクラダニの墓。誰の墓かということは多分ダム事務所が調べているはず。今実家は不入道の学校の下に移動した。お寺はコウエンジ。ぼんさん(お坊さん)呼んで、墓を移動させるのは、おおごとやった、って(実家の)嫁たちがいいよりました。おもてなしやら何やらで、ですね。骨は火葬にしてお寺の納骨堂に納めた。道十里の墓所はその3ヶ所だったから、彼岸や盆に参る場所(墓)は沢山あった。ナバダンの墓所は三軒分。マンちゃん(福富マンキチ)とレンちゃん(マンちゃん・レンちゃんは同じ家。マンちゃんのほうが養子に行った)、うちと、サシチさん。福富、山田、長野の三軒。前田とサクラダンの二ヶ所の方は6軒すべての墓所があった。

——草分けという家はありましたか？

いえ。知りまっせんなあ。サシチさんの家は徳永さんの家の分かれ(分家)やけん、な？サシチさんの家は一番新しい。あと田作りで道十里に来て、そのまま住んだ人もいる。明治28年くらいの生まれの人。田つくりで10年くらい道十里の三軒の家の田を作った(*のちダムを造るときに小作権補償が発生し、田の所有者ではなく、耕作者のほうへも補償金の一部が行ったらしい)。鳥栖の河内(カワチ)出身の人。東小河内から嫁をもらって。

オオヤシキと呼ばれる大きな畑があったが、そこには昔人がいた。自分は何も覚えていない。オオヤシキのあたりはコウザブロウサンヤシキとか、あたしたち、いいよりましたよ。家はない。ただ、畑があっただけ。オオヤシキ。ハンノダン、こっちがオクノノ。オクノノまで田と畑があって、そこから先はずっと山。官山。

炭焼き

炭焼きをやりました。みんな部落で寄って、投票して。焼く場所を選んで、分けて。投票は一年に1回。秋。夏の終わりから秋口。9月に投票、籤じゃない。

山の値段を決める。20とか30に分けて、競って高いものが取っていく。ここなら500俵できるから、いくらとか。競りあぐる。五ヶ山中が全部寄って、ナラ、カシ。毎年投票する。国有林やから、炭焼きしたあとは全部植林していく。造林はスギ。ヒノキ。だからあとはずっとスギヒノキばっかし。そのころは、スギは値段は良かったですもんね。で、みんなスギを植えるのが良いって思ってた時代でしょう。それが、ねえ。今となっては。(部落から)遠い處は全部、官山。

——戦中でもスギを？

はい。スギ苗かろうて、唐鍬持ってねえ。山へ植えに行きましたもん。これくらいの穴掘って、スギ植えな、ならんでしょ。唐鍬っていうのは小さな鍬のこと。男も女も出て行ってようやりましたよ。よくぞやったよ、あの頃は！あはは。思い出すねえ、ほんと、な。

——営林署に雇われたんですね。

はい。あのころは一日5円か、6円か。今のお金で考えれば安かったですよ。でも昔はそれだけあれば…こう、物を(肩から)下げて帰ってくる(それ程度は買えた)。あんころは母が…ありゃあ、紋付っちゅうか、きちんと仕立てたものを買ったら230円したかねえ。行商の人が仕立てた着物を売りにきていたんで、私と妹が自分達の金で母に買ってやった。…そしたらもう、お父さんが怒ったもんねえ！あの頃は父親っちゅうもんは何でも取り締まってたから(笑)。“(その着物売りは)大野までまだ行かんくさ！”って。買った着物を戻してこいって。あれには難儀した。恐ろしかった、お父さんなァ(みんな大笑い)。お母さん喜ばそうって思ってたね。自分達が働いた錢もあるっちゃけえねえ。お母さんも欲しいって言うし。

ワサビ売り

——官山の日雇いをしていた頃ですか

いや、あたしたちが娘のころはね。村の谷でワサビを一生懸命取ってね。肥前の山のむこーうへ、30キロもかろうて、もう、やおもいかんとですもんねえ。歩いてですよ。自転車もオートバイもない。あたし達の小さいときは。大野の道。七曲峠を越えてね。さがないところですよ。2〜3人で。ワサビの谷(キタゴウ谷)を官山から借りて。税金(入札料)は払うんです。道沿いにあった。鑑札はない。そやけん盗人がおりましたねえ。そんなころは、肥前に行けばよう売れよっとですよ。鳥栖なんかはワサビ漬けで有名でしょ。神崎まで売りに行きましたよ。売れんときはとうとう、あんた。歩いて久留米まで行きましたよ。歩いて。久留米の市場で売れるかと思ったら、そしたら“5円！”って言われてくさ。いっしょけんめい行っても、5円やった。普段はいいお金取れた。10円か15円。

——久留米までも行って、がっかりですね。

根っこを持つとるほうがね、ずっと高値。あん時、そなん(根でも)持つとればよかったばってん、根を取ったら生えてこない。持ってあったんとは(葉っぱだけだったので)5円ぎりやったけん、わたしはあんとき涙が出た。10枚葉っぱをまとめてとめるとも、ちょっとしたコツがあるとですよ。熱い湯で葉っぱを塩もみしたらカラっとなる。とっても美味しいとで

すよ。食べさせてやりたいけど、時期がな（ワサビ葉は4月のみ）。あんた達が来るのがちょっと早かった（笑）。甘酢に浸けたり、粕漬けにしたり。とっても美味しいですもんね。酒の肴にいい（註1）。ワサビで稼いだお金で着物の羽織を買うたこともありましたよ。あの頃は着る物もなかった時代でしょう。それから炭をかりて売りに行ったり。炭3俵で着物と交換。あれは絹やったなあ。柄もんですよ。山越して綾部町の方で交換しに行った。

ワサビ泥棒はなあ…誰がやったか、大体わかるくさ。でもそんなこと、いわれんなあ。やおいかん（笑）。土地の人は絶対そんなことせん。ここは白炭はなかった。黒炭、焼き子はいなかった。地元だけ。窯は自分達で作った。そうちゃんが今でも休校中の学校の傍に作ってあったが、上がぽんと、ほげて（笑）。泥が悪くてね。粘り気がなくて（註2）。

9月～10月に竈をうつ。5月～6月はいくめいな（時期ではない）。迷信というか、家でお葬式をすると、ちょっとしたしきりがある。神棚に紙を貼るとか。うちのなかでさぐるだけ。書くと家の門口に「忌中」。「ひのはれ」があつて、女は（それまで）33日、男は31日、神様に参れない。お宮参りもしない。お産の時もしない。

切畑

切畑焼きは、前は小豆、らっきょう、里芋。自分の山です。いまはサルとイノシシ、何も野菜は作れんですよ。サルはイノシシのおるところにはこん。（イノシシが食べるのは）くずね（葛根）、くずはかずら、山芋、ニオイがするそうです。タケノコ、いまは歩かれんごと、全然見えん。

国有林たら七曲峠ですなあ。国境の石がずーっとある。境界のちがう。福岡の分、国有だから防火線がある。佐賀のものは福岡県分下がった分を国有林っていう。

川の瀬、淵

大川の瀬はながあぜ（長ぜ、ながあーせ）、水浴びどこ、深かった。立ったところ、いっぺんくさ、砂が、ぞーぞって、行くとですよ。小さい子は浅いところ、六年生は深いところ。みんなが助けに行く。事故はなかった。淵は道十里にはない。網取。

魚はアブラコぐらい。大きい魚はおらんやったですね。イシモチ、腹に吸盤、頭の太い、頭ばかりでおいしくない。ドンポ。アブラメはたべた。ウナギのおった。天然のエノハは佐賀橋、大野橋から上にいる。サンショウウオは見に行きましたよ。五十何年も前、胴がこげんに太かった。気持ち悪かった。

お万が滝、ハマグリ水道、佐賀にとられとる水を落とそう。チゴ落とし、そこにチゴを落として自分は上に行って、水を落とした。佐賀もんが通ったら草もはえん。佐賀とは縁組み一つない。わたしの子供のころ、石投げて喧嘩した。

平家伝説

平家の落人（おちびと）、白い馬に乗ってきた。白い馬はいままでいうふうの馬だろう。平家の落人がばくろうになって、島原から来ましたげなから、馬に乗ってきてヤーラ（？、229頁、ヤーウチか）あたり、馬と換えた。ここで一人ぐらい百姓されるよ、っていった。みんなから材木もらって、家たてて暮らしたとか、先祖はばくろうだったげな。年寄りばばさがそういわした。

もみすり、田植え

道十里、前田が反当 6 俵、山田が 4 俵から 5 俵、1 俵のげ(毛)、ちがうねえ。うちの里は戦死した兄がいたころは 1 丁 6 反、村は平均 6 反、3 分 1 は小作、(道十里) 全部で 5 町歩くらいあった。1 反で二人養える。11 人家族だったけどゆっくり。

(収穫後の) もみすりは村のみんな、総動員。おい(おし) たり、ひいたり。足踏みで、わらから籾を落とす。天日に 3 日。そうけで担いで木のトウス(唐臼)、いっぱい。農協の機械が入る前のことはちいさか時、かすかに覚えとる。格好だけあった。木の臼、目ば詰めて、細工してあった。上から吊してって、聞くだけで、覚えていない。

「もみすり歌とか田植え歌とかは？」

田植えの時、歌でも歌おうもんなら遅れてしまう。競争しおりました。わたしは早かった。(一日で) 苗取りしてから二人で一反植えた。仕舞い田は荒神。苗を 3 把、3 つ苗、3 把(さんば) 苗をお荒神さまにあげよったねえ。お荒神さんはムシロ敷いて庭であげましたもんねえ。御幣は 3 つたって、りっぱなワラとってかな、いかんかったもんなあ。

田植えは学校に行く子供も手伝う。加勢は 4 人ぐらい、それで 1 週間かかる。加勢にはお昼にごちそう、晩はお酒。ちょっと一。父親は采配をふるう。母が炊事、そとにでりや人が来る、はかがいかん。こびる(小昼) にお茶持って。それで、やとわな、植えきらん。

いまは祇園頃、7 月 15 日まで。おそう(遅く、田植えを) した人がいる。わたしの里は 6 月の内に終わります。遅う植えるのを、好いとる人がいた。雇い手の奪い合いとか、よそに行きましたら、やおいかん。(人手の確保が楽でも) 7 月過ぎるとできが悪い。日和がだいぶちがう。太陽の光が当たる年と当たらん年があるけど。(夏至もすぎた) 7 月に植えると 1 俵ぐらいちがってくる(落ちる)。田植え前、麦をコンノウして、しもうて、田をおこさなならん。

小麦も作ってました。岩戸まで挽きにいきよりました。友達同士背負って、山田の上に精米所、粉を挽くところ。母はうどんを作りよりましたもんねえ。粉挽き、いつでも小麦をかうて、津垂(つたる) 沿いに行く。

盲僧琵琶とカマド

シンキョウさんの西新町からこらっしゃった。そのお父さんが目が見えない。チゴ落としから落ちた。お手引きさんがおこられよった。シンキョウさんのとまる家は決まっとりましたもんね。徳永さんやった。越中富山の反魂丹、入れ薬、それはうちに泊まった。姉さんが子供の時、寝とぼけて、薬屋さんどこに泊まり込んでおかしかった。

シンキョウさんのこらすばい、小学校のころ、えらいきよったが、4 月か 5 月、背の大きうしてなあ、りっぱな男、美しかった、きれいかった。ありがとうございましたって、1 升ずつあげよった。帰り、百姓しおらんものに、売って帰る。

「荒神さんは竈神ですね、いつも竈に火はあったのですか？」

マッチの替わりはツケギって硫黄を溶かして、木のかんなくずみたいな——竈に火の消えたことはない。電気は 3 つまで、つかんかった。母が「キンギンっていったよ、あんたが、たまがったよ」ってのちのちまでいった。

早道は御所橋のずーっと上、石の飛び(飛石) があつてね。近道がありました。学校はそつちが早い。大水には流れることがあった。

機織り

木綿、はたおりはしました。麻はしてない。木綿の糸は買ってくる。ばーちゃんたちがやっていた。蚕は飼いました。茅からダツ、寒いのに小屋に行ってダツ編み。

ささぐりは自分で取った。けど売らない。柿も売らなかった、甘くない、悪いけん。かじ、こうぞもない。お茶は東小河内。

戦争中のこと

今うちを継いどる弟は、戦争中は小学生、昭和6年生まれ。朝から巻脚絆、ゲートル巻いて学校へ。筑豊炭坑に送る坑木出し。戦争中の勤労奉仕、山から一本・二本、生徒が松の木を出す。馬車がかり（道）まで。学校しとらん、わたしも坑木出しには行った。市ノ瀬、山口のサル山。きょうも勤労奉仕、あすも勤労奉仕。電気があかかったら空襲の目標、電気を切らして（切って）。そのころは今の脊振山頂上の地下基地みたいな軍事施設はなかったけれど、国有林に焼夷弾を落とされて山火事になった。

*昭和19年に日本陸軍のレーダー基地建設のため道路工事が行われたらしい。

兄が戦地に行って、田鋤（たすき）もしました。わたしは（女でも）競犁会にもでた。父が用事でない、わたしが赤牛、ウノ牛を使った。女と思ってツノでわたしを土手まで押して。いつも鋤（すき）よるけんねえ。父が竹持ってきて叩いたら、それから（悪さは）せんごとなりました。左、サシサシ、右、セッセッ、前は叩く、（止まれは？）だまって引けば止まる。

かわったもんで、女でも炭焼きにいった。木を切るとが、私たち姉妹の仕事。青い服着た囚人が加勢にきた。父が村会議員、明日おらんけん、たのもう。監視（看視）に頼む。上の竈で詰め替え。監視はいたけど。田植えにも来た。草とるときのがんづめ、囚人たちがはやく植えるけど、草とる場所を空けずに植える。いやでいやで、たまらんかった。

戦死の公報

昭和19年、みなで田を植えとりましたら、「ちょっと帰れ」、何ごとかと思った。帰ったら、ばあちゃん、川で麦をひらかす（冷やかす）。むかしは麦をそのままご飯に入れず、長（なご）う炊いて、大きくなして、それからご飯に入れた。そのままだと、べたべたするから晒す。ばあちゃんも、何があったか知らん。田植えで夕方にししか帰ってこんはずなのに、「あんたがた、昼に何ごと、帰ってきた」。家に入ったら、線香のにおいの（が）した。次の間で父が一人で、手あわせて拝んどの。いわんでもわかります。ばあちゃんは知らん、じいちゃんが悲しがるからと思って、いわんかった（いえなかった）。肉弾で突っこんどうですよ。築地淳美（あつみ）、20か21やったろう。ビルマ、日の丸高地だったかな。弟はまだ小さい、まだ小学校。兄がおるときは1町6反全部作ったですよ。（こんな気持ち）そういう目におうた人じゃなきゃわからんでしょう。

戦死者の家ということで、田植え、稲刈りも来てくれました。学校の生徒もきました。終戦までです。道十里で戦死した人は徳永さんの弟の勝（まさる）さんと二人。

遺骨迎えに行ったのは市ノ瀬、あそこまでは車で持って来とらっしゃって、そこまで行った。弟は男やけえ、あんた（お骨を）持ちなさい。後ろから黙々と泣いていきよると、上から知らん人がわあわあ笑って歩いてくる。こんなん思い、身内じゃなきゃ、わからめえ。昭和20年、もう戦争は終わっていました。

わたしの従兄になる人も一人息子で戦死しとります。その母、わたしのおばさんに当たる人がすでに死んでいて、葬式ができなかった。頼まれてこっちのお父さん、母の兄になる。遺骨迎えに（博多）万行寺まで行きました。わたしたちはいとこ結婚ということです。

父はわりとすぐに靖国神社に行ったりします。母は腰が曲がって長旅はしきらなかった。行ききらんで死んだ。

vi. 市ノ瀬 〈2005（平成17年）6月28日取材〉

塩買峠について市ノ瀬にて（2005年6月）

一里塚がある。成竹（なるたけ）の下、九千部にアンテナがある。正月の日の出を拝みに行く。犬の塔、猟師の人、峠でお弁当、犬がワウワウ吠えて、吠えかかってくる。自分の犬か野良犬か知らんですよ。せあしいって、犬の首ば切った。大蛇のおって頭から呑まるるところやった。それを知らんで、犬を切った。犬をまつらないかん。それが犬の塔。

塩買峠、塩を買いよったんでしょかねえ。ここからも鳥栖に買い物に行くから。博多より鳥栖に行きよったって、古かバーちゃんがいった。シオクジラ、山の仕事に行くとき持って行く。半年たっても一年でも保つですよ。塩辛うしてあるですよ、焼いて食べておかず。塩くじらはかたまりでこうてきた。おばいけ、こうてきて、ずーっとくさらんですわ。薄く切って大根やらでたくと、油が出ておいしい。

むかし峠の歩いて行ったこと、あったかなあ。戦時中、鳥栖までは行かんけど神辺（このえ）まで行った。鶏、卵は供出、鶏を買いにいった、めんどりば、こうてきた（塩買峠を越えて、ワサビや炭を売りに行った人は、苗ヶ尾、大谷には多い）。

このへんは塩をかますで1俵ずつ、買ったですもんねえ。かますに入った塩、わたしの里、実家は笹原駅の方のこうちゃ店、ちょっとした百貨店みたいなところ、田植えになったら笠から蓑から緋の着物から。豆腐もあれば塩とか砂糖もあった。むかしは味噌、醤油、しこまなかんでしょ。牛にも馬にも、水飲ませなかんですもんねえ。駄桶って桶の中にちょっと塩を一握り、入れてやるとよう飲む。塩は1俵いってもかます何斤っていった。20キロぐらい。

* 1斤は160匁、600gに当たる。

ざーっと編んだカマスに綱かけて。コリって桶、楕円形の桶、それにしょうけ、そこへ塩をのせておく。にがりができる。それで豆腐を作った。

豆ばひいて、炊いておく。豆腐たぎらかいて、にがりを入れないと固まらない。

市ノ瀬きてから老司の角、百貨店前に、市の立った。

市とヤマモモ

ここはヤマモモの産地、五ヶ山にはならん、五ヶ山は小さくてガシガシ、食べられん。西畑からあのへんまでは粒の大きい太いモモがなった。それから下も小さくて酸（す）いして食べられん。うちの桃は九平（きゅうへい）モモ。二代前が九平っていった。赤モモも白モモもある。黒田長政のごじえん（御前）モモ、わたしが孫を育てる頃まではよかモモ。じぶんが子どもの頃は西畑やらの青年が取りにきよった。モモはねえ、大きな木があれば接ぎ木してつがわ

る。堀切、大谷（うーたん）でも九平ってモモはあるですよ。ふしぎに接ぎ穂のモモはモモがちがう。うーきなモモ、大きな粒の上に二粒ほど飛び出たモモは、この親モモにしかない。

今生きてれば100いくつ、明治10年生まれのじいさんが市へ売りに行った。自分も15くらいの時から、いのうてモモ売り。届いて降ろしさえすれば、すぐに売れた（市場に小売りの人がきて、すぐに買った）。仲間の人もりんちゃんのモモば、先に売らな、売れん（九平モモがはじめに売れなければ、自分のモモが売れない）。すぐ金になった。こんな楽なことなかった。かごはザッショかご、つぶれもせん、翌日の色変わりもない。いっちょも変わらん。買いやさんも知ってる。見て、よかとしか、買わん。

朝鮮人労働者

この家の下に橋が架かっていた。杉と杉の土橋。脊振、昭和20年に負けたけど、19年、日本陸軍がレーダー基地、どんどん、道路作った。そこに人夫、親方夫婦と子ども3人、（うちの土地に）杉と杉の間、ムシロひいて屋根はトタン、ふたをして、住んでいた。おじいさんが契約していた。陸軍に雇われて働きにきとった（*軍属ではなく、協和会を通じて雇用されたはずである）。裸になってシャツ一枚、ツルハシで道路作り。15〜16の娘、子どもを背負っていた。親方は朝鮮人、日本語分からない。娘は日本語できた。「みかんください」、いいよ、っていう。親方はおとなしい。

8月15日、終戦になったら、その晩わんわん、人夫が騒いで酒飲んだ。飯場は新しいどんぶり飯で、いっぱいだった。親方も（土地の）借り賃、支払います。ここにあるものは、持って帰れん。使えるものは使って下さい。案外お金を貯めて物持ち、それで帰っていった。

博多の空襲は夜やった。九電の鉄管、登ってみた。南畑ダムの九電鉄管は明治30年できあがって、もうようになったのは39年ですって。花火大会っていうけども（花火のように）、ここもビラビラ、そっちもビラビラ、それからがたいへんですたい。五ヶ山から嫁入りしていた人、夜明けになったら、こどもからって、ワンワン泣いて、帰る（帰ってくる）人がいっぱいおった。

聞き取り協力者

山田和馬さん（昭和3年生れ）；山田善寛さん（区長：昭和16年生れ）

築地勝藏・富喜子さん（東小河内出身）；築地九内・洋子さん。

築地松蔵さん（大正7年1月1日生れ。聞き取り時84歳）

築地徳実さん（大正11年生れ）・築地やすさん（大正14年生）

築地蔵次さん（昭和14年生れ、当時区長）、神代さん

註

1 ワサビの葉にお湯をかけて塩もみし、辛味を強くすることを“ワサビを立てる”という。

「昔は根性の悪い人が立てると辛いと言っていた」とのこと。伊藤義光(64)スミエ(59)さん談。（西日本新聞：平成9年4月25日付「五ヶ山の記憶・春-6」より）

2 ここに出てくる“ソウちゃん”とは宗雲荒江さんのこと。なお、西日本新聞の平成9年1月25日付「五ヶ山の記憶・冬」に東小河内でただ独り炭を焼きつつけている築地可隆さんの記事が紹介されている。

〔服部英雄〕

4 小川内の地名と地誌

〈2003（平成15年）3月19日取材〉

小川内俗称地名簿 明治9年土地台帳より

昭和54年1月調査 杉童（武広勇）小川内俗称地名調査

字大野・うーの（古代は笹の内・ささのうち）

宮の瀬・ぐーのせ 桜宮・さくらぐー 竹の出口・たきんでぐち 作開・さくびらき 南・
みなみ 三（畝）町・みつぜまち 椿の下・つばきのした 川原・こーら 前田・まえだ
五畝田・ごせだ 花田・はなだ 笹原・ささばる 野間ヶ谷・のまがたに 頭石・かぐめい
し 大原・うーばる 竜笹・りゅうざさ 芋山・いもやま 深谷・ふかだに 西ベラ・にし
べら かずらが谷・かずらがたに ドックー谷・どっくーだに 裏田・うらだ 片へら山・
かたへらやま 大開・うーびらき ジュルカイ 雪穴・ゆきあな 前川・まえがわ

字古小川内・ふろうごーち

瀬井川・せむいご 堤ヶ原・つつんがはる 深田・ふかた 猫峠・ねことーげ

字長谷

矢落・やーうち 加藍淵・がらんさん 墓の上・はかのうえ 墓の下・はかのした
礫ヶ谷・つぶてがたに お岩の谷・おいわんたに 大牟田・うんた 中畑・なかばたけ
又谷・まただに 淵下・ふちじも 近道・ちかみち 稚子落・ちごおとし

字前田・まえだ

宮の裏・みやのうら 宮の下・みやのした 一本杉・いっぽんすぎ 前川・まえがわ
川原・こうら 八竜山・はっちゅうさん 前田・まえだ 森の裏・もりのうら
猪川・ししごー 助の谷・すぎんたに 南・みなみ 丸山・まるやま 滋海山・ちかいさん
加勢原山・がせばるやま 寺屋敷・てらやしき 寺の上・てらのうえ 寺の下・てらのした
寺の坂・てらのさか 寺山・てらやま 穴釜・あながま 石南の辻・しゃくなんのつじ
大凹山・おおぐぼやま 金比羅山・こんびらさん 溝洗・みぞわら 氷倉・こうりぐら
お萬泊・おまんどもり 包石・つつみいし 堀釜・ほいがま 出切・できい
五郎兵衛・ごろべー 登尾・のぼりを お萬ヶ滝・おまんがたき 夫婦石・みよといし
中畑・なかばたけ 徳阿弥・とくあみ 鹿の猪谷・かのししだに 鹿の尾・このお
阿弥陀山・あみださん 籠原・かごわら 平口原・ひらくちわら 不動山・ふどーさん
楠ヶ谷・くすのきがたに 長藪・ながやぼ 南・みなみ 茅立・かやだて 又谷・まただに
九衛門釜・くえもんがま 竜笹原・りゅうざさばる 柿ノ木・ツボ 巻藁畑・まきわらばたけ
湧山・わくやま ニガ所・にがどころ 岩立・いわたて オモノ木カクラ 打越・うちこし
大タブ・うーたぶ カキガ谷・かきがたに 穴釜・あながま 花子ダラ・はなごだら
ウボ山・うぼやま 正札下・せいいたつもと（ママ、せいさつもとか） 権ヶ坂・ごんがさか

字豆野

竜尾・リウーオ 豆野・まめの 長石・ナギャーシ 丸尾・まるお 藤原・ふじわら
尻無尾 三つ尾・みつお 豆尾・まめお 亀石・がめいし

字大谷原・うーたんばる

一人遍人・ヒトイセンド 大谷・うーたに 角石原・かどいしわら

字竹の屋敷・たけんやしき

五次郎岩・ごじろーいわ 長原・ながひゃー 鳥居ヶ原・とりいがはる 威張山・いばりやま

火動ヶ原・ひどーがはる 貞兵衛谷・さだべえだに 竹の屋敷・たけんやしき

香椎山・かっしいさん 蛇谷・じゃだに 樵(杣)の家・そまのえ

黒岩の谷・くろいわのたに (*東小川内であろう) 一本松・いっぽんまつ

猪見石・ししみいし 薬師ヶ瀬・やくしがせ

筑前肥前国境

札木の辻 めくら落 中峠 地焼中の谷 地焼牟田 烏帽子岩 地焼下谷川 大坂上の塚

中の滝 さくら宮 まい淵 井手 椎木淵 川原 花田 瀬戸口 いやなぎ 渡瀬 白土川

新兵衛滝 こうご淵 小石の本 児落淵 塩井場 渡瀬 近道 中瀬 ふけばた ほうら

長尻 井手 竜王 柳田 くまかし淵 せば戸 すか牟田 古川

*小川内地名地図は、従前に江藤千晴が作成していた地図を参照しつつ、今回調査分によって新たに作成した(「佐賀県東脊振村小川内における山村空間の重層性—小地名とその住民認知を手がかりとして」日本地理学会、2004年度春季学術大会プログラム)。

地名 (以下は武広勇氏資料を元にして、聞き取った地名の位置と回想)

ふるおごうち: 佐賀橋からの入り口、(古小川内と書くが)村があったとかは全然聞いていない。

*現在の佐賀橋の下にあった旧橋は古小川内橋(ふろうごうちばし)といわれていた(『小川内誌』154頁)。

つつんばる:

せむいーいご: 瀬守口、大野の谷水、せむいごっという(*瀬守川の意か)。

*『小川内誌』68〜69頁に宮の瀬井堰とならび、瀬無井吾井堰の写真が紹介されている。

深田: 湿田、水気が一年中ある。牛は入った。日は当たるけど、乾かん。

長谷(ながたに): 学校の裏、深田の手前から右、墓地が二つあった。田はあった。枚数は一? 2反ぐらい。奥まで。

*『小川内区長日誌』に7月24日長谷道修理・前川飛石係とある。

猫峠、猫城: 不入道、山を切り開いたところに猫城ってあるけど、うち(小川内)でも猫城っていう。ほんとうは白土城らしい。

ヤーウチ: 小学校の先、追分をヤーウチ。鎮西山(上峰)から背振山、鎮西八郎為朝が矢を射たが届かず、ここに落ちた。*『区長日誌』(資料編)・昭和7年1月から5月にかけて「里道矢討付近石垣修理」とみえ、昭和7年歳出歳入決算書では「矢落石垣竣功」とみえている。

くえた: 竹屋敷(に出てくる)。

がらんぶち: 七曲から下ってきた左の山に、がらんさん。下にがらんぶち。(脊振)頂上が東門寺、そのおまいり関係。カップの話はきかんごとある。あまのじゃくの話もない。毘沙門さんの像は、石で作ってあったが、だれか走ってもってった。台座だけある。かすかに憶えとる。

*ガランサン、ガランサンブチについては『小川内誌』154頁に詳しい。

つぶてだん、まただに：しらんばい。

ふちじも：チゴ落としのところ（* 渚のしもの意味か）、田んぼはあります。ほこらがある。

うんた（大牟田）：お宮の上、墓に行くところ。

* 『小川内誌』24 頁に「学校職員住宅野菜畑の件 ウンタ杉山使用決定」、とある。武広勇地名簿（下記資料）では大牟田（うんた）。

中畑：うんたのちょっと手前。

前田：むらの一帯。できいは前田のうち。

一本杉：大野の一本杉ははっきりしている。こっちの一本杉ははっきりしない。

* 『小川内誌』68 頁に一本杉宮<グウ>の瀬井堰。

ぐう、ぐうの瀬：大野、宮の瀬井堰。

さくらぐうさん：ぐうの瀬。

さくびらき（作開き）：さくびらきといいよった。うちのワラ小屋。

あぶらこぼし：* 『小川内誌』210 頁、坂本峠への道が険しく、どうしても油をこぼした。

おだて：* 同上『小川内誌』210 頁、「尾立」の難所については同 87 頁。

あながま：寺の上、林道の終点。久保山越しは谷に行く。おまん泊まりの道は尾根が 4 つある。

かぐめいし：うちのおやじからは、あたまいしって（「頭石」の意味だと）、聞いちゃう。わたしはカゴメ、かごめの石かと思う。登ったところ、3 つ重なった石がある。鬼がつきあげた石。

村人に鬼が捕まって約束させられた。田畑を荒さん、牛、馬を殺さん。もう一回悪いことをさせてくれ。（そんなにいうなら）石の家を作りなさい（もしできたらいうことをきこう）。下の方に大きな石があった。（その石を）家みたいにこづみなさい。一晩で作るなら鬼のいうことを聞こう。

下が二つ、上に大きな石。3 つまではこづんだ。南側にもう一つ乗せるとよかったけど、夜が明けかけてきた。最後に一つ、かぽーっと嵌めると石の家ができる。一番鶏が鳴く前に作ってしまえ。（いま）仏様が二体入っている。磨崖仏が一番鶏を早くうたわせた。50 メートル（実際には数百メートル）ばかり下に、積み損ねた石がひとつ残っている。鬼は夜しか動かん。

* 『小川内誌』30 頁に「かごめ石付近植林の件」とあるから、「かごめ石」と発音・認識されていたことが分かる。

* 「かぐめいし」地名は「頂石」と表記するものが多い。迫野虔徳「地名と方言」（『角川福岡県地名辞典』月報「わたしの地名考」昭和 63）はカグメイシ地名を収集、検討したもので、頭にかぶる動作の古表現がカグメルであるとする。戦国時代の宣教師が作成した日本語辞典である『日葡辞書』に「Cagume, uru, eta: (かぐめ、かぐめる、かぐめた)、ものを頭にのせて持つ、運ぶ。カミ（* 畿内地方、京都周辺）ではイタダクという。Cagumevchi (かぐめうち) 力を入れて振り下ろすため、刀を頭上に備えて斬りつけること、カミではヲガミウチという」と記している。小川内のカグメ石の形状による限り、巨石のかたち、様子が、頭上（他の石の上）にあるようにみえることから、かぐめ石と名付けたと推定できる。（本書 24 頁、Pho. I 4-1-10 参照）

うーばる（大原）：これも大野。切畑（焼き畑）をした。

こおりぐら：氷蔵。製氷会社ができたりしました。佐賀市に持って行った。

* 『小川内誌』89 頁、156 頁に氷倉に関する記述、写真がある。本書 31 頁、Pho. I 4-2-5 参照。

寺やしき：水道の下、てらんさか、寺の上。だいたい弘法大師の石仏。西村さんの上。

じかいさんやま：水道の村山、今日は大和尚。（*持戒山？）

しゃくなんのつじ：それがしらんたい。聞いたことあつたばってんがね。やすえさん、もう（しゃくなげが）なくなつたって、いいおつた。やすえさんは大石久一さん、士族の家。

*背振の山頂付近にしゃくなげがなく、小川内にはあることに関する伝承は『小川内誌』180頁。この地名も関係があるだろう。

つつみいし（包石）：お万泊まりのちょっと上、三方境（個人の山の三方ざかい）。

掘りカマ：山を掘って、すみがま、うたんで穴掘って。おれも焼いたことある（*炭窯を作らずとも、ある程度燃えたところで土をかぶせれば炭はできる。もっとも簡易な炭焼き法）。ロスの多うして灰ばかり。炭は上等かもわからん（一部、質のよいものもできた）。

ごろべえ：のぼいおの下やろうねえ。

のぼいお（登り尾）：盆や正月、久保山（背振村）へ夫婦で行ったりする。その時休んだちようど峠。石が二つあつた。一人で動かしきるぐらい。だれかが転がした。登尾は大正12年まで茅床。13年に植林。

とくあみ：豆の尾林道の終点のにき。とくあみは深と。ムラサキサンショウウオもおる。毒するっていつてよりつかん。ほんとうは無毒って大分の佐藤先生。両棲類の研究。とくあみは植林するといいい木が育つた。

かのしし谷：金を掘ってだまされた。名前がでんさくという人。名前がでんけん。出んくさ。小川内は金山の出た。金鉱石はあつた。最終まで掘らせて。白土川の方はあとまであつた。戦後、網取の方はうちたちが遊びに行った。

阿弥陀山：そこの出水が末期の水。ほこらがあつて二体の仏様。（死ぬ前に）故郷の水を飲みたい。出て行つた人も、くみにくる。それが末期の水。

ヒラクチガワラ：ヒラクチガハラ、川原ではない。ヒラクチのふとうと（太い、大きいのがいた）。

*『小川内誌』189頁に不動明王（ヒラクチガラ）の写真がある。武蔵ノートではヒラクチワラ。

くすのきだに（ししごう）：山の神社の近く。なりやぶ、なかやけ：不明 りゅーざさはわからん。かやたて：聞いたことがある。中間に休むところ。かきのきつぼ：にがどころ：名前聞くばってん。岩立（いわたて）：聞くけど。よう聞く。みぞわら：うーたぶ：水道の上のねき。うぼやま、おおくぼやま：せいさつもと：べざいてんに対する何かお札がたつとる。

りゅうおう：なぎゃーいし：元製材所。ふじわらの下。しりなしお：尾が切れるところ、下まで行っていない。みつお（みつのであろう）：三本の尾根があるところ。さがべえだに：よう聞くばってん。ひどうわら（火動原と書く）：

たていわ：幕府の役人がここまで駕籠できて検分した。*楯岩（本書192頁、Pho. III 2-3-7 参照）
はなのきばる（花の木原）：仏さまにあげる花しばがいっぱいある。そこだろう。

*『筑前国風土記』早良郡下（名著出版・470頁）に「花の木原の川筋を此所（竹屋敷か）迄のほり、此所より川筋をはなれて、西北の方、楯岩ある所をさかひとして、これより又川筋にしたかひて背振の山に登る。471頁に「筑前肥前の境は、背振の西の酒盛山を下り、唐船岩をかきり、二重平の下を過て、谷川筋を以て境とす。三渡、花木原、楯岩など云所境に在て、皆当郡板屋村に属す」とある。唐船岩、二重平については本編2章（180頁）。

そまのい：ひとりへんろ：ひとりせんどっていう。

じゃだい：鉄塔の下をいいなつたもんねえ。

寺の上の上：わからんやつた。

とりいか：とりいかは？べざいてんの鳥居やなかか。

おおびらき（大開）：だれかが開きよつた。

くせだに：国有林、くせ谷国有林。

ししん石：石の上にあがってシシの動くのを見る。

どっくうだに：ガマガエルがドックウ。じゅるかい（じめっばい）。

かずらだに：藤カズラのいっぱい。葛カズラはイノシシの掘ってくれる（クズは立木を枯らしてしまうが、イノシシが根を掘ってくれるから、木が助かる）。フジカズラはちいさかデンプン。トウカズラはむかしカンネ掘り。東脊振のクイワラ、あのへんは南面、採つたでしょう。カタクリでは作つた。こちのカタクリはヤマユリのこと。ユリみたいな花が咲きますもんねえ。6月の始め、道ばたいっぱいにきれい。

地焼中の谷：坂本峠の方。

札木の辻（ふだきのつじ）：良材を産出して、杉を切りますよ、という札を立てた。

たたり石：竹の屋敷、シイの木を切つたら血が出た。シイの木はだいたい、赤かつと血の出ますもんね。（本書238頁、Pho. Ⅲ 4-6 参照）

*『小川内誌』159頁にキリシタンであった尼御前処刑に関わる伝承が紹介されている。

しおいば：近道（ちかみち）橋、むかしは飛び石、あのへん、汐井場。お汐井。

*国境の古文書にお汐井場が登場するが、これは牛宮谷の脇だから、別。

お宮の上にも飛び石。下の飛び石は福岡県が修繕、上のは佐賀県が修繕。大水のたんびに区役（工役）で出た。

*『区長日誌』に区役記事多数。昭和5年9月19日記事では「小川内前川飛石掛村工役朝鮮田吾作君自発的ニ出役ス」とある。田吾作とはいかにも適当に付けた喜劇的日本人名である。あえてそれを用いた朝鮮の人が、積極的に「村工役」に出ることで、村人の理解を得ようとしていたことが分かる。自らの立場をアピールするための必死の行動であった。

国境の碑は全部で4つ、いちばん下のだけがうごいとる。石垣つきが上手いですよ。大水の時は石の流される音がする。あそこは流されない場所が選んである。

おいわの谷：*杉山の件、『小川内誌』26頁。

竹の屋敷：小宇

*『小川内誌』159頁に詳しい。なお同2頁に小川内の史料上の初見史料として、黒田文書・建武二年隆寂等売券（『南北朝遺文』九州編・1-310号）をあげる。しかしながら、この史料には「早良郡脇山院内背振山上宮領中山引地屋敷并坊雑舎」とあるのみで、竹の屋敷とはない。『筑前国続風土記』早良郡・背振山の項（昭和48年・名著出版・470頁）には、この文書に依つたのではないかと思われる記述があり、座主別宅が立岩の麓、谷川の西北にあつて、岳屋敷にあつたが、貧窮して西小川内の民に20貫で売つたとある。この論を成立させるため、東小川内は那珂郡ではなく早良郡であつたともする。いかにも強引な立論で史料解釈に無理があろう。東脊振村教育委員会『霊山寺跡』1980、7頁が竹ノ屋敷座主別宅跡と地図上に記すことも、上記を受けてであろうが、根拠は薄弱である。

道

むかしの道、釣垂（つたる）から南畑ダムの堰堤にちょっと登る。トイレのところに出る。御所の橋、から池渡って、網取に上がる。高橋さんの山に石畳がある。笹城にも行ってきました。佐賀橋は飛び石、白土川は七曲峠へ。お宮の前、中島、そこに大きなヒノキ。一番はじめの橋のことは、明治20年の記録があって、『小川内誌』に抜粋が書いてある。

べざい天まいの道、坂本峠、むかしは背振峠、あとでだれが、なしたか、坂本峠という名前に変わった。べざいてん、東門寺、坂本峠から背振の道はなかったけん、営林署の巡視路があった。筑前街道は赤道（あかみち）としてあった。

べざい天まいは白装束ではない。思い思い。夫婦一緒にとか。肥前久保山から脊振山日帰り。宿坊もあった。

綾部峠という道が、参謀本部の地図以来、七曲峠になった。往来は七曲峠の方が多かった。

蛤水道

おまんさんがチゴを落としたりとは、むこう、五ヶ山はいわん。

蛤水道を落としに行く。福岡にくる水を成富兵庫が佐賀に流した。田植え時は水が足りない。福岡の岩戸あたりの水が足りない。それがたまたま乳飲み子を抱えたおまんさんが当番。番（警戒）が厳しい、気を緩めるのは若い婦人。チョイチョイ、落としにくる。53年の大渇水、平成6年も水を止める袋、米も入れる袋、スコップでどんどん落としたり。その頃番人はあらんけん。

お万が滝、おまん泊まり。蛤水道まで近い道がある。お万が滝の上に蛤水道。おまん泊まりは泊まったところ、石があってから、なかに人が入って泊まれる。しばらく休んどって、日が暮れたら夜中に取りに行った。乳飲み子をからって行く。夜中に泣く。

稚児は連れていっとろう。何回も行ったんではないか。自分もとうとう水を落とすことができんやったら、村に帰れん。お万が滝に身を投げてしまった。

（筑前側）五ヶ山は本流からとっていない。向い大野でホンの少し。（もっと下流の）岩戸あたりの人が盗水。番人がおったわけはそういうこと。

ひとつ憶えとるのは、昭和12年。福岡も佐賀も大渇水。博多・櫛田神社に朝鮮征伐のトラの頭。チゴ落としでそれをつける。その年と、昭和53年にやった。53年は見た。水道局、南畑ダム関係者が祈祷人を連れてきた。平成6年（の早魃）はきちゃあなか。

*虎の頭による雨乞いは『小川内誌』156頁。（本書22頁参照）

こっちの雨乞い。お万さんがしたみたいに混ぜる（キタないもので濁の水をかきまわす）。はちゅう（八竜）さんて部落の中にある。ちょっとした広場、そこで女相撲、戦前はようありよった。戦後一回。まねごと。ふんどしなんかしないし、横綱もない。（雨乞いは）背振頂上、べざい天の下の池。雨乞いについて（池の水をかき）混ぜてくるだけ。「効きますか」きかんね。

蛤水道、池からの頭首工は成富兵庫が作った40センチ角の切石、それだけしか行かんようになっとる。本流、福岡県側の堰堤がそれより高い。水は全部佐賀に行って、40センチを流れられないほど大雨が降って、堰堤まで水位が上がったときしか、流れない（ふだんは本流側に水は落ちない）。平成7年の改修で三面側溝の水路は50センチになって池の中に100メー

トルもある。そこから下流に石伏せ（いしびせ）が二カ所あって、それが余水吐（よすいばけ、『小川内誌』71頁所収蛤岳井手溝之図では「ノコシ）」になっている。ちょっと低くしてもある。そこをはずせば本来の本流、福岡県側に水が落ちる。お万が落としに行ったのもそこ。53年大渇水、じぶんが止めにいった（大野は本流の水を宮ノ瀬井堰から取水するから救済が必要だった）。かますを持って行って、スコップで泥入れて、頭首工40センチの枡の所に（土嚢を）置いた。（お万とちがって）見張りも番人もおらん。4時間ぐらいで水が下ってきた。24時間流した。明るる日の昼には（取り去られて）ひとつも水がこらん。役場（東脊振村）の柿本さん、会計で知り合い、下から電話かけてきた。「坂本のノウシロが干上がった。役場に文句が来てる、うち（自分）があげやいた。お前が蛤水道、どげんかしたろう（止めただろう）」って、「いや、おれは知らん」って。

「記録に残してもいいですか」

ああヨカですよ。9月（少しずつ用水が不要になる時期）に入ったら、東脊振村が自発的に、全部福岡側に流した。それぐらい福岡は苦しんでいた。（この年は歴史に残る大渇水）。その時ギリのこと。平成7年（正しくは6年か）もじぶんが止めた。工事で頭首工の構造が変わって、3面側溝の50センチ、余水吐で落とした。気づかれたのは53年よりだいぶ後だったですよ。じぶんは南畑ダムに勤めていた。流入量ゲージが、ちょこおっと上がったです。

正月

お正月のまつたけ（飾り松）がちがう。うらじろ、山芋に似たつるで、ところ、ヒゲがながーい。子孫繁栄。とくぎ、しらかし、4つに割って1メートル20〜30、斧の柄とか、鍬の柄にこう、4つに割って、藤カズラで上、下くびって。炭、長く保てる、くさらん。栗はくりあいがいいよう、入り口の両側にユズリハ、新芽が出ておじいさん葉が落ちる。たえん（家が絶えない）。

14日のモグラうち、正月の餅、モグラうちをすっもんと、餅をもらうものと（役割分担）、あとで分け合って食べた。

種粃・田植え・もみすり

正月の2日、若木切り。男の青年だけ、カシの木、小さい木でよい。おじいさん、お父さん、孫は小さいの。正月が過ぎたら切って屋根裏にあげて、種まきの時、蒔く日にそれで（その木で）、ご飯炊きおった。種粃は各家で保存、乾燥するところ、屋根裏に。うちは杉の葉を敷く、枯れたら痛い、ネズミがこない。ヤマザクラが咲いたら、すぐ蒔きました。みず苗代、短冊はつくらんで、足かた、そこに蒔く。短冊はあとになって戦後作った。

水口から。朝早（は）ようから蒔いたら、種がよってしまう。午後3時ころから蒔おった。ほったらかし。水は入れっぱなし。苗代は戦後やり方が変わった。水3センチ、苗代期間が2ヶ月。植えるのが6月の10日から。でも田植えの賃取りに（平野部へ）行った。20日ぐらい。

お宮の下から本流に井堰。宮前の井手、受益者が掃除、道の改修で切ったけど、大杉が2本あった。大野川は谷の水、せむいごっていう。むかしは大野、フルゴーチがあった。

6月時分で麦を作っていた。7月で田植えする。下さ日用取り。下は6月、7月10日頃まで。一番麓から有明海まで植えて下った。はげみず（半夏水）がきてからしか、植えられん。はんげいじ（半夏至）、梅雨の末期の大雨でしか、植えられん（*半夏至は夏至から11日目、太陽

暦 7 月 2 日ころ、田植えの終期とされる。賃取りと雨の関係で田植えは 7 月になった)。

山間の人は 1 ヶ月ぐらい田植えに出る。それで田植えも遅れる。3 食・ホテル付き。長雨の時、はっちゅうさんでお籠もり (雨止み祈祷)。おにぎりを作って。今も年 2 回する。

田植え歌、聞かんだったですねえ。小学校に昭和 4 年からはいつとるけど、みんな親たちは貧乏やけん、忙しかった。脊振村には西山歌、こびき歌ってあるけど、こっちは…。

14 日のもぐらうち、ちょっと初めにせりふをいうて。歌のような、もう忘れた。

風切り

かぜ (祈祷、台風よけ)、歩いて綾部の八幡、姪浜と箱崎、久留米の高良山、ベザイ天に行く。綾部、姪浜、箱崎、3 つくじを作って、湯呑みに紙を丸めて入れる。行きたいところを入れる。行かん人は出不足を納める。はじめは流行病の祈祷、虫の祈祷、綾部、いちょうの木。高い木の上に旗、7 月 1 日、破れ具合、巻き付き具合で占う。ぎなんがいっぱい。

切畑

A きりはた、やったでしょうね。小さい頃、杉ば切ったあと、そば、あずき、あとでは里芋、そば、あわ、夏焼きは梅雨明け後、春焼きは 2 月、3 月。

B わたしはしおったですよ。杉植えるのに片づけなならん。うちの山で、ウーバル (大原)、雑木山、クワがよりつかん (鋤が入らない)。根がはつとるけん。ちょっとねえ、根の張ってから。雑木山で杉も植えてない。土地が木におうた (適性が合う) ところはない。さがしかとこ。スギ、ヒノキ、マツ、のけたところ全部雑木、カシもシイも雑木。さきのサイコシまでびっしり。

お宮の山

お宮山に入ったら赤ガシはいっぱいあります。カシ、シイ。アカガシとシラガシ。ヒノキ、スギ、山ツバキ。サカキは大きい。ホオ (朴) の木が大きい。木は刀の鞘にする。カシ (樫) は堅い、



Pho. III 4-1 小川内・宗雲商店

根も堅い。村山に一本、アカガシのりっぱなもん、あります。

炭焼き

炭焼きはいまも学校の裏にカマがある。木炭組合、中原町販売所。プロパン流行ってから、30年ごろから炭焼きはいない。カマは炭だけは担ぐけど、原木が重い。集めよいところ、なるべく下に作る。石垣でカマを作り黒炭（こくたん）を焼く。しらすみはいない。五ヶ山の人もしらすみの焼き方は知らん。（特定の人の）専門だった。

戦後植林、戦前は農閑期だけ駄賃取り。夏はどうびき。木材。戦後炭山（すみやま）を買う。戦前は九千部。国有林の払い下げを佐賀県にもした。おやじ、塩原（しおばる）のお宮で入札。小川内の集落が区有金を持つとった。入札に行くとき、こっちの会計が行って区有金でどんどんとった。それを（区からさらに）とった（小川内の）人が、さらに五ヶ山に分けてやった。それから佐賀のもんはできんくなった。通知もこん、戦後はあちらばかり。

ワサビ

区有林からワサビ、借地願いで許可がおりよったですよ。ワサビは百年ゲンタロウさんがしよった。最初は島根・三瓶山から持ってきた。150年ぐらい前、佐世保のにきまで、売りに行きよった。いくーさん、あんた方がしよった。うちが昭和25年から請けてした。国有林の伐採になって7、8年入られん。

*『小川内誌』21頁に昭和13年・山葵谷千本杉とあって十五年間の借地権設定がされている。29頁に、昭和33年、寺山ワサビ谷の件とあって、このときは借地料は取らないことに決定したとある。

小学校

シイの実、子供の頃、大野の観音様の下、いっぱい落ちとった。毎年子供の頃、生のまま、おいしいよ。甘くはない。このごろ（とる人がいないから）車が踏んで白うなる。

（あまり食べると）カサン、でくる。カサ、できもん、できる。かぶさ（かさぶ？）と漬垂れが多かった。着物の袖がキラキラ。カサは多かった。女の子はシラミ、男はちゃっと丸坊主、おかつぱでもしらみ、梳く櫛、細かい櫛、それでシラミをつぶした。戦後はDDT。ここはワラ葺きの小学校、私とその校舎の最後の卒業生。むこうは先生の住宅。門柱もここにあった。

電気は大正6年。お宮の下に発電所を持っていた。いまも残っとるです。昭和23年頃まで続いた。木炭組合、電気組合。



Pho. Ⅲ 4-2 小川内・東光寺



Pho. Ⅲ 4-3 小川内小学校旧校舎

中学・青年

福岡県とは中学生ぐらいまでケンカばかり。まっくらおつるまで、放課後、(遊んでいてケンカになる)石投げ、大将、中尉、少尉作ってから。向こうは親父も出てきた。向こうは(戸数・人数が)少ない。こっちがいつも勝っていた。それで親が出てきた。大野の方は福岡県の田んぼを小作させとった。女は行き来はない。女をいじめることもない。ケンカは男だけ。

蕨のウメ(ドブクロのこと)、青年宿で泊まるときに盗った。盗んでもやかましう、いわれんもんねえ。密造酒は山の中にカメ。見つけたら呑んでくる。たいてい掬うもん(ヒシヤク)は置いてあった。お寺は無住。いぼとり地藏、あそこに石がいっぱい、イボがとれたお札に置く。

12月5日は小さい祭り、しめ縄。(春の)お彼岸、7月1日はがんたつ、8月1日はついたちごもり。9月1日、今はない。秋彼岸、12月1日から夜祭り。9月お彼岸中日、綾部八幡のお祭り。

青年の祭り、神様は出雲、11月が神無月、10月30日頭屋(とうや)に集まって、男の青年ばかり、お嫁さんを連れてきてください。出雲の神様、14人も嫁さんがいる。うちの親父どもの頃はヨバイもあったらしい。年頭(としがしら)、年長者が引率。雨戸に水を入れて。いちばん若い者が下駄持ち。つぎが障子を開ける係。年長者の入っていく。ぜったいいやいやする。ふられた腹いせ、うそかほんとか、飴、びろびろのゆるい飴を置いてくる。明るる日べとべとして困ったろうね。福岡県にもいった。ヨバイにはいくつとさ。よお聞いた。嫁さんには、もらいよらんかった。青年の(福岡県の村と)ケンカしたとはようきいた。五郎さんはいっとる。おれもいっぺんマスマスさんといっとる。ケンカにいった。

大正時代の青年たちは、よう久留米の瀬の下、水天宮の近くの女郎屋、遊郭には金がないから、上がりきらん。お彼岸、綾部八幡、祭りのついでに行く。大正時代はよかったらしい。

ふろも男女混浴、30代ぐらいまで。村芝居は41の厄払い、青年がすることもあった。

医者・まじない・禁忌

お医者さん、常駐の代診さん。区に一人いた。綾部神社の人、納富(のうどみ)さんが正規の医者。そこに病院はあるけど(遠いから診療を受けることはほとんどない)。末期の水かわりに水薬をもらうくらい。小川内には派遣(の医者)、心得はある人。名義はどうだったか(正規の資格があったかどうか)。大坪さん、子供三人はりっぱに医者になった。診察は上手、大きな病院にいってもぴしゃり同じことをいった。投薬は下手だった。戦後まで重病人が出ると、



Pho. III 4-4 小川内・山祇神社



Pho. III 4-5 小川内・山祇神社狛犬

担架作って下までおろした。次男も三男も。おれの妹は北茂安へ、おれは神崎まで、いなわれていった。

代診の先生がどここの病院へ行け。手術をして直った。親父が負うて行った。筋炎、ものすごく痛い。いなわれて行くとき、ものすごく気持ちがよかった。地面からの震動が伝わらん。馬は荒い。馬車はがたがた。

まじないは各人で信心がちがう。各家で祈祷さんのところへ行く。うちは親父、瘡（おこり）になったとき、修学院で祈祷、スターツとよくなった。方角の悪いところから、カマド、値で買よかった（方角が悪いとされたカマドを、安値で買った）。

全部土を取るときの日の廻り。コンジン（金神）、そこにおった時に（恐る恐る）土を取った。老僧がいった。運んだのは僕ばってん、ていったげな（サワリがあれば自分にくる）。

土を崩すのに、親父に障った。それでカマドは作り替えよった。赤土で。ヘッチイさんて、いいおった。カマドは10年ぐらい保つ。

筋炎、神様がとりついたろうって、おふくろがいいよった。お祓い。こまーかお札ば飲まされた。梵字見たいな字、お湯と一緒に飲んだ。歯が痛いとき、ばばさんがいっぱい、もつとる。

土用はいうねえ。四回土用、土用のいって一週間はよかけど、土用のさめて一週間は入れていかん。土用は20日ほどある。土用のうちは扱うな。土用のいってなごうなるけん、もってこい。さめても一週間。屋敷内に持ってはくるさ。屋敷の外には行かん。お百姓されんもん。炭カマ、行っていかんのは12月の20日と、1月の20日。山に入らん方がいい。ケガなんかする。山の神様が嫌うけん。

11月から3月。（炭窯は）夏はされん（もともと夏土用に炭窯作りなどしない）。田の仕事が忙しい。土ば、かせてよせて。

新しく家を建てるとき、据え石の下をしめる時分、5ー6人で引っ張り上げる。「じしん」、



Pho. Ⅲ 4-6 たたり石

「石ぼうつき」といった。綱取りさんがいて、みんなで加勢。「やあさらさあ、やあさらさあ」って。

(たたり石とはちがう場所だが) 穴がほげたところがある。ギナンはならんけど、乳の下がったおおきなイチョウ。その木を切ったあと。曲がってこうなとった。もし水害が出て倒れたら(危険)、とって木を切ろうとした。切った人はN町のT製材所。刀「キチガイ」、長持ちに2杯も刀がある。鑑定士もした人。その切った人には障(さわ)らんで、50代の若い人ばかりが7人、一年ほどのうちになくなった。昭和25年、全部病死(事故死ではない。だから関係はないのだけれど)。切った人が残したところを床木に分けて残っている。村中の人が般若心経、266文字を紙に書いた。修学院の和尚さん、水垢離とって沈めた。修学院さん、薬師堂は前からあった。そこに倉庫があった。狂言も浪花節もあった。

*大銀杏伐採の一件は『小川内誌』142頁にふれられている。

炭焼く時は一山倒すとき、一番大きい木に神が宿る。真ん中にさして拝みよった。酒と塩、炒り粉。むかし山知って行ったから。届いたら火をたきなさいよ。倒したら木を取って刺して拝んどけ。ヨギでぱっと立てて拝んどけ。昭和39年は補償で100万円もらっとる。

だますキツネ・動物

キツネ、経験はある。役場に行って農協に行って、遅うなる。魚屋があつて、イワシなんかをワラツトを作って(ツトに魚を入れてきた)、峠を担(かた)げてきおったら、横をついてくる。10時くらいやったら、お月さんがあがってきた。むこうから人間がくる。こりやだまされるぞってかまえたら、電報配りのおやっさんやった。そりゃー、キツネかタヌキぞ。月見ながらタバコ吸う。そっから先はついてこんやった。おやじは天ぷらもってて飛びかかられた。天ぷらとられた。ミノスケさんは酒飲んで、きのうとる(酔っぱらって峠まできている)。一生懸命歩いたつもりがぐるぐる回るだけ。坂本へ牛で荷物を運ぶ帰り。タバコかションベンまれよ。おちつくぞ。まりきらんとだまされるぞ(落ちついて一服するか小便をすればだまされない。だまされるのは酔っぱらい)。

アナグマはタヌキとは別。食べる。おいしい。ワナ、てっぽう。タヌキもむかしは食いおった。PTAの幹部、アナグマば食べさすって。校長、「アナグマのおいしかですねぇ」って。本当は犬の赤犬たい。犬は2回くらい食べた。野良犬だったかどうかは分からん。この辺ではうるつく犬がけっこういた。ネコも食べた。うさぎはよう食べさせてもらう。針金のワナ。あちこちに仕かけておく。こぐらいに、回ってきたら、からってきた。ワナ10個に1匹かかる。

バクチ

小川内、むこう(福岡県)のひとがばくちで取った。ばくちが流行った。金借りにきた(金取りに?)。その金が返せない。こちらの山、坂本峠、うちの資産の人の山、(ばくちで負けて)取られたことがある。

交流・格差

中学校を作るとき、村山を売ったこともある。七曲峠は中原の山。交流はないけど、お葬式のお悔やみは行った。婚姻はない。明治時代の戸籍を見ても。日常のつきあいはあるから、今でも倉谷までお悔やみは行く。

お宮は女性禁制、小作人が祭りに入れないというようなことはなかった。

戦後ぴしゃーと止めたけど、序列はもったもん順だった（資産の順）。固定資産税の大きな人から、賃貸価格の序列が付いていた。（戦後はまるで）イロハ順。

オトコシは住みついたことはない。鳥栖からここにきて、上に行って一緒になった人はいる。

葬儀

ウンタ・大牟田は墓地の下。水くみはそこで汲まんとない。葬式の時、お棺かついで、おおごと。掘っていくとむかしの人の遺体に当たる。今の（村構成員の）年齢と（減ってしまった）人員なら、葬式もできん。花、すだけ、竹を二本、花柴とか花いけとく。花立てて枯れんように（うんたで）水を汲む。

座棺はその日に作る。すぐに手を結ぶ（合掌させる）。後ろから膝を抱いて。じいさんの時そうした。身内がする。お葬式のたきもん、お棺の木、朝からとらないけん。若い人は墓掘り。お葬式の買いもん。おとぎ、品物がきまつとる。あらめ。こんにやく。豆腐屋はあった。旗が4つ、提灯が二つ。それができん。天蓋が一人。先頭は念仏の金叩き。

聞き取り協力者

武廣邦敏さん（大正12年生れ）、西村哲也さん、宗雲孝吉さん

〔服部英雄〕



Pho.Ⅲ4-7 小川内集落（H15.10月）

Pho.Ⅲ4-8 小川内集落（H19）



Pho.Ⅲ4-9 小川内大野集落（H16.2月）

Pho.Ⅲ4-10 小川内大野集落（H19）

